
dear

銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

dear

【Nコード】

N7009X

【作者名】

銀

【あらすじ】

イジメすぎた。様々な恨みつらみの籠った攻撃から逃れるために転移すると、そこは次元すら越えた異世界で。よし、とりあえずブリーチ顔を作って　なん……だと……！？

試作品1（前書き）

精霊術に関しては色々な作品の設定を拝借しておりますので、「ん？ 見たことあるぜよ」と思った方、どうか暖かい目で見てやってください。

試作品1

パリッ

「やっぱりポテチは元祖、うす塩味に決まってるね」

それが遠くで広がるファンタジックな光景を見ながらの第一印象だった。しつかり咀嚼しながら、きつとこの思いは最後まで一貫して頭に残るだろうと思ったりもする。それは、そのファンタジックな光景が俺にとって見慣れた光景の一つでしかないから。

町から数キロ離れた海面に、光芒は傍若無人に鎮座していた。周囲との調和を完全に無視したその光景は、町の住民が見れば空いた口は塞がらない代物である。

いくら結界が張ってあるとはいえ、この管理外世界 地球で魔法を乱舞させるなんて正気の沙汰とは思えない。管理局的でありだとしても、この国の法律は余裕で破っている。

自分たちの法さえ破ってなければ……それでいいのかねえ。

その個人の価値を優先する振る舞いに、思わずこう言いたくなる
いいぞ。もっとやれ！

繁華街の高層ビル、その屋上のフェンスに腰を掛ける俺はクスリと笑って、中空に乗るポテチさんを風の精霊を使って口に運ぶ。そんなでもって膝元に座る緋菜の頭を撫でる。

綿飴のようにふわふわしたウェーブを描く金色の長髪は指を走らせるとサラリと流れる。俺と同じく正面を向く緋菜の顔は伺えないが、心地よさそうに大きな碧眼を細めているのはまる分かりだった。緋菜に向けた視線を海面に引き戻す。

風の精霊を使って”見て”いるから自分の目は必要ないのだが、気持ち的な問題だ。

海面では、常人ごときが理解できる範疇を遥かに超えた非常識が展開されている。

例えるなら、怪獣大決戦。一方は魔力と物理の複合四層式の防衛プログラムを持つ触手やらなんやらがうようよしている本物の怪獣。肉眼で見れば背筋が凍り付きそうなくらいに不気味だ。どれくらい不気味かというと……やっべ、これマジやべえ、どれくらいやばいかというと、マジやべえっスわ、マジで　くらいだな！

もう一方は人間。数はいっぱい。お約束だな。

だがお約束は数だけ。人間側は”質より量”であるべきなのに、

「人間側、強っ」

こういう場合はBランクの魔導師が多数と少数のAランクであるうに、一人一人がA A Aランクは卑怯だ。視聴率の不興を買うだけだ。ただのリンチだ。怪獣乙な展開が見え見えじゃないか。

心情は怪獣の味方をしつつ、だからといって介入するつもりもな

く傍観に徹するのは行く意味がないから。俺一人が怪獣の味方をしてもあの戦力差では勝敗が目に見えている。しかも小さくなり、かつ魔力が切れているこの身体じゃ、ねえ。

状況は終始人間側の有利にあつた。

数年前に顔を合わせたことのある守護騎士たちに、彼女達に一步譲るものの十分な実力を兼ね備えたおよそこの小さくなった身体と同年齢の少女たち。

だが、それ以上に目を引くのは、

「化け物だな」

やはり少女たちと同年齢の少年二人。

あれはなんだ？

人間の魔力保有臨界点を明らかに超えている。放たれる砲撃が空間に干渉するほどの威力は、現代の技術で作成されるデバイスでは不可能だ。

ロストロギア。思い付くキーワードはこれと人造魔導師しかないのだが、これまたロストロギアは個人の人間の扱える代物ではないし、人造魔導師も現代の科学ではあそこまで強化はできない。

その二人がトドメとばかりに叫んだ巨砲で怪獣は完全消滅した。

「……………」

邪気。そう邪気のようなものを感じる。あの二人からは底知れない何かが潜んでいる。そう思うざるを得ない猜疑心が粘土のようにへばり付いて離れない。

今こそ晴れやかな笑顔で勝利の余韻に浸っているものの、渦巻く邪気のようなものが俺の不信感を募らせる。

「……おにいちゃ？」

「！ん、ごめん緋菜。ちょっと不気味なものを見てね」

「んー？」

緋菜に風の精霊は扱えないので、あの光景を見ることは不可能。星空を見上げているだけだったが、俺の感情の波が揺れたことに気付いたのだ。

義理でも、流石我が妹！

「何でもないよ」

緋菜をギュッと抱きしめて俺はゆっくり飛翔してその場から離れる。

光を屈折させて姿を消してはいるが、あの分けワカメな二人が気付かない理由にはならない。

未だ風の精霊が送る映像を脳内で見ながら、俺は結界の外へと向かった。

お試し版1(前書き)

フッ。シリアスしか書けねーぜ。

クレイ(いけしゃあしゃあと)

お試し版1

あれから五年と半年。

六年前、ちょっとした出来事があったって身体が縮んでしまったが、時を経るごとにきちんと成長をしてくれたのは重畳だ。

肉体年齢はおよそ十五歳。仕方ないから日本の法に乗っ取って義務教育を受けている俺は現在中学三年生にある。学業というのは今まで修めたことがなかったから最初は新鮮だったが、如何せん実際に生きた年齢が他の連中とは違う。精神年齢の違いから小学生時代は本当に辛かった。皆、馬鹿ばっかだもん。

だがその苦痛も中三になると薄れていく。どこか俯瞰して見ているものだからクラスメイトたちの成長を知ると少し感慨深い気もしない。進路の違いとクラス分けで、その数は十にも満たないが。

俺の選んだ中学は、これ以上ないくらいハズレだった。適当に学校名の記したサイコロを緋菜と一緒に「なにが出るかな？ なに出るかな？」とご機嫌に転がしたのだが、まあハズレだった。幸運値が緋菜と違ってマイナスにある俺と一緒に転がしたのが間違いだった。

私立聖祥大付属中学校。私立なんて、ただでさえ学費が馬鹿にならないのに、その上、彼らがいるのだ。

五年半前に風の精霊で見たあの分けワカメども。

クラスが違う。それは唯一の救いだったと思う。あの二人を視界に入れると、冗談抜きで不快感が露になってしまふのだ。

生理的に受け付けられないのだろう。

まあ、そんな話は置いていて、

「ハヤテさんよ、ハヤテさんよ」

「なんや、と言わせてもらう前に敢えて言わせてもらうので」

「グラハム・100エーカーである、と？」

「私はキミに心奪われた女や！ プーさん っ、とんでもないコロボが発生しとる！？」

「どつちがいいと思う？ プーさんが修羅の道を求め、操縦桿を操って『はじめましてだね、ガンダム〜！』っていつのと、ハムさんが森でひたすら蜂蜜をペロペロするの」

「どつちも映像が衝撃的過ぎるわ。プーさんの姿で、プーさんの声で『僕はキミという存在に心奪われた熊だよ〜』って、どう考えても、その存在は蜂蜜やろ」

「プーさん・スペシャル。空中で蜂蜜をペロペロ」

「そこまでいったら機体に乗る意味ないやん。でも、あの世界にプーさんがハムさんの立ち位置におつたら腹筋崩壊は確実やな」

「古来のガンダムファンからは、これ以上ない批判を受けるだろうが」

「私は支持するで。笑いは文化や」

「さすが関西弁を扱っただけあって笑いにお熱だな。半端な関西弁だが」

「それは一人称が『私』やからか？ そうなんやろ。だけど甘い。甘いでクレイクン（キリッ）」

「なるほど、少しでも個性を主張して出番を獲得するためか」

「ああん、言っちゃ駄目や。これから私がちょこつと盛り合わせしたストーリーの独白が始まるはずだったのに」

「どうせ、その盛り合わせは核を担う米が数粒しかないだろうが。米三粒、肉一切れ、キャベツ山盛り」

「チツ。バレとったか」

「仕方ない。俺が完璧な独白を見せてやろう。ストーリーは我が最愛なる妹、緋菜について。起承転結 よし、結は省こう」

「はい、アウトー。結を省くって永遠と語るつもりかいアンタ」

「二十四時間じゃ全然足りない自信はある！」

「相も変わらず物凄いシスコンっぷりやな」

「フフ、キング オブ シスコンと呼んでくれて構わない。」

「大変やな緋菜ちゃんも」

「大丈夫。あの子はキング オブ ブラコンだから」

「ブラジャーコンプレックス？」

「ブチ殺す」

「ちょ、冗談やって！ そんなマジな目にならんとつてや！ 瞳からハイライトが消えとるで！ ブラザーコンプレックスやるッ！」

「命拾いしたな。あと二秒遅ければ真夜中に八神家のインターホンを連打しにいくところだった」

「地味に、いや、完全に最悪な嫌がらせや！ そんなことされたら私もピンポンダッシュがしたくなるやんか！」

「あれは中々スリルがあつたぞ。押したと同時に家主が偶然扉を開けたらどうしよう、そんな緊迫感のある遊びはそうそう見付かりはしない。若い頃は、軒並みすべてを猛ダッシュしながら押したもんだ。やりすぎて最終的に武器を持ち出した家もあつたが」

「な、なんと羨ましいことを……！ くっ、私もやってみたかったけど、昔は車椅子のお世話になつとつたから」

「車椅子じゃ捕まるわな。だが、ハヤテよ。まだ諦めるには早いだろ」

「ま、まさかクレイクン……！」

「きつと、まだいける年齢だ」

「！　そうやな！　諦めたらそこで試合終了やもんな　なんて言うわけないやろっ！　ピンポンダツシュが許されるんは小学校低学年までや！」

「見てみたかったんだがな。中三の女がピンポンダツシュ……。あいたたたた。俺、居合わせたら絶対写真とって翌日の掲示板に貼り付けるわ」

「私のすべてが地に墮ちる瞬間やな。分かります。ちなみに最初に言おうと思うけど、私の名前は確かにはやてや。けどカタカナ変換はいただけん。どこぞの完璧超人の借金執事と誤解されてまう」

「そうだな。口調的にも中の人的にも相沢」

「そこまで！　ネタバレは芸人の心をデストロイヤーする悪魔の囁きや。」

「プーさんの囁き……だと……!?!」

「悪魔や。『あ、熊』なんて無理あるやろ」

「諦めたらそこで試合終了なんだぞ」

「本音は？」

「諦めたら敵チームのドリンク剤に下剤をぶち込め」

「それ無理ゲーやろ」

「同じ形状をした水筒をこちら側で用意して、足が滑ったつって敵陣にぶち込めばミツシヨコンコンプリート。後半戦の敵はケツに力を入れて踏ん張ってるから、ソツと腹を押しやれば爆発は起きる」

「鬼畜すぎる。最凶最悪の監督や」

「俺はただ、限界まで溜め込んで外に出たいと苦しんでいる彼らに協力しただけだ。ボカーンッ！」

「そのボカーンの意味は……」

「ん、口答では、とても言えたもんじゃない。だって厨二に隣接しているお年頃だもの」

「まあ、厨二に隣接しとるお年頃やなくとも口答で言えたもんやないけどなあ」

「ならば敢えて俺が言おう」

「なんでやねん」

ビシツとはやての鋭いツッコミが決まる。

「今日もやるじゃないか、はやて。さすが関西弁を扱っただけのことはある」

「クレイクンも、ナイスボケや。最後の最後に基礎の『なんでやねん』を引き出すその話術。策士やな」

そう言つと俺たちはくつく、と笑つ。

この話題に逡巡もなしについて来れるのは、マニアックなネタと頭の回転力を兼ね備えるはやてしかないだろう。

どんな無茶難題の振りをかましても打てば響くように返ってくる。彼女との出会いだけがこの学園に来た唯一の利点と言えるかもしれない。

あの五年半前の出来事の該当者、あの二人の知人であったため初めは敬遠していたが、同じクラス、席が隣になって触れ合つてみると見事に意気投合。やばいくらいに楽しい。

「はやてちゃんと時神くん、本当に仲がいいね」

と、控えめな声はやての後ろの席から入る。

「当たり前や、すずかちゃん。クレイくんは将来の相方候補生やからな」

「候補生かよ」

別にシヨックでもなんでもないが、ツッコミは必要なので入れてみた。

展開についていけず、ずっと聞き手に回っていた少女は月村すずか。深い紫色の波を打った長髪、それに乗る白いカチューシャ。アメジストの瞳。

容姿、発育共に非の打ち所のない美少女だ。多分、学園で一番俺

の好きなタイプだと思う。はやても美少女といえば美少女だが、身体の発育は、……乙、だ。

「なんや、今、不愉快な電波を受信したで」

「木の精だ」

「字が違わないかな？」

「月村、これはワザとだ。はやて、続けるがいい」

「……なんか納得いかんけど、まあ流しといたる。この海鳴市ならクレイクんは指折りの素養の持ち主やけど、関西にはそれすらも越える漫才師がごまんとおるんやで。街角のおばちゃんですら並々ならぬ力量を持つておる」

「誇張しすぎじゃないか？」

「かー！ これやから田舎もんは」

なんか凄い残念なものを見るような目をされた。非常に不愉快だ。ぶん殴つてやるうか。

「というかお前もその田舎もんだらうが」

「心の話をしとる」

「まあ、ウザい」

「黙つてきけ」

ニツコリと笑う俺とはやてのソレはメンチの切り合いと同じ意味であった。

「クレイくんとすずかちゃんは、もっとバラエティ番組を見るべきや！」

「え！？ 私も？」

反応したのは月村だった。

「俺はともかく、月村は確かにもっとレパートリーを増やすべきだな」

「私……結構、本読んでるよ」

それは休み時間の行動から察するが、

「違うねん！ 今はそういう話をしてるんちゃうねん！ ええか、すずかちゃん。これから先、波のように押し寄せる登場人物に負けだけのインパクトを習得せんと、空気キャラなんて悲惨なポジションに左遷されてしまっくんや。」

例え名前が出て来たとしても『あゝ、そんな奴いたな』ってあっさり幕を降ろされるんや！ 一発芸人と同じ末路を辿ることになるんやで！？ それでいいんかすずかちゃん！」

はやての演説じみた説教が熱を帯びる。

穏やか、優しい、大人しい、読書好き……確かに、いつからか扱

いが難しくなつて脇役に左遷されそうなのは同感だがな。

「押し寄せる登場人物……？」

「私たちはフィクションやから当たり前や！」

「はやて、それは危険だ。自重しろ」

「なに甘つたれたこと言つとるん！？ 媚びず、退かず 自重せず！ はやて仕様お笑い三原則を忘れたんか！ あの夕日に掲げ誓つたコンビの絆をッ！！」

「候補生つて言つてただろお前。漫才は終わったんだ、さつさと正気に戻れ」

「いやや！ 今日こそはクレイクンに関西のおばちゃんの強力さを！ すぐかちゃんに空気キャラにならんための秘技を叩き込んだる！」

完全に熱血スイッチがオンになったはやては周囲の目を気にせず、勢いよく立ち上がつて握り拳を作つた。

置いてきぼりの俺と月村は何とも言えない苦い顔をする。これから起こる出来事が手に取るように分かつてしまった。

このままではホームルームが始まっても語り続けそうだ。

仕方ない。

「まずは、重症のすぐかちゃんからやあ！」

ガサゴソ（はやての机、物色）

「ええ!？」

タータラ、ララララン（ハリセンGetだぜ）

「すずかちゃんのインパクト上昇には、その豊満な肉体を駆使する必要があるんや」

はい、せーの

「とりあえず、まずは脱いでみよ」

バッチコオオオオーンッ!!!

「ぎゃあああああああああああ!?!？」

はやて専用ハリセンMk-2と太字で書かれたハリセンで思い切り顔をシバく。頭ではない。より強い苦痛を求めての行動である。

回避も防御も間に合わないはやては盛大に後ろへずっこけた。痛い痛いゴロゴロ転げ回る。

「悪は去った」

「あ、ありがとう……?？」

血糊を払い退けるような動作をしてハリセン（戦利品）を自分の机に仕舞ったところでスピーカーからチャイムの音が鳴りはじめた。

「目が！ 目があああ！？」

なんて言う何処そのムスカ大佐はスルー。いつまでネタに走るつもりなんだ。

あっさりはやてを見捨て、他人のふりをして他所を向いていると、不意に教室のドアが開いた。

カツ、カツ、カツ、と凜々しい足音を立てて現れた一人の男。一見すると青年実業家を思わせる風貌をしている。くせっ毛の金髪に、しかしまだ少年のあどけなさが残る面立ち。

着こなしている服は 軍服。

「諸君、朝の挨拶。則ち、おはようという言葉はこの私、グラハム・エーカーが慎んで贈らせてもらおう」

前時代がかった口調を好み、その行動も基本的スティックそのものな古典の教師兼、我らがクラスの担任は『サムライ』や『武士道』という言葉がすんなりと馴染む……ような態度を取っている。

俺は斜め後ろの席に座り、苦笑する月村にコソツと囁く。

「あれが分かりやすい、主役級争奪戦で長生きしそうなタイプだ」

「な、なるほど。確かに変わったもんね。山田先生」

その言葉にピクツ山田は耳聡く反応した。

「月村よ！ 私はグラム・エーカーと名乗ったはずだ！ 気を付けてもらおう！」

「す、すみません！ ……でも、山田太郎先生ですよ？」

「グ・ラ・ハ・ム・エ・ー・カ・ー！！！」

「山田だろうが。00が放送された途端、髪型に髪の色、口調に性格、体つきまで散々いじくり回して。山田太郎のくせに、グラム・エーカーって、影響受けすぎにもほどがあんだろ」

「時神、お前もか！ いつまでも仮の名前で呼びおって」

「うん、仮が逆だから」

「ええい、このままでは埒外あかん！」

お前があかなくさせているんだ。

山田は険しい表情で一步下がると教卓に乗せた帳面を開く。

「トランザム（出席確認を取る）！」

馬鹿がいる。阿保がいる。厨二がいる。批判きそつだ。

適当な発言ばかりするものだから一々翻訳をしなければ収集が付かない。

「少年！ 少年！ 少年！」

ほら、意味が分からない。これが出席確認というのだから、きつと彼は終わっているのだ。主に頭が。

クラスメイトたちも、もう慣れたのか出席番号順に「はい」「はい」とテンポよく返事をしている。きつと、この一年の時を過ごし卒業して新たな地へ飛び立つ彼らは常人ならざる順応性を開花させているに違いない。担任の頭が弱いから。

「痛た……。ようやくムスカも収まってきたわ」

今まで山田にも構ってもらえず、いい加減淋しかったのか、はやくは起き上がり席に着く。

……………。

「またシバかれないか、はやて」

伝わる。ムスカも収まってきた、で伝わるのだが、いつまでもギヤグに突っ走って変な表現をするのはいただけない。ただでさえ山田という馬鹿がいるのに、はやてという阿保まで混ぜたら、教室は永遠にカオスだ。

「冗談や。ようやく私の熱きパトスも収まってきた」

「……………まあ、よしとしよう」

疑心は解けなかったが、ハリセンを炸裂させるのはやめておく。

「ハム先生は今日も元気やな」

「うっざいだけだ」

溜め息と共に頬杖を着く。

「それも分かるけど、それ以上に楽しくないか？ あんな濃い教師は他におらんとと思うで」

「あんなものがちらほらいてたまるか」

学校に二人もいれば崩壊は免れない。

「少女！ 少女！ 少女！」と連呼して、ようやくブツ壊れた出席確認が終わる。平静を保つクラスメイトたち。本当にこいつちの順応性の高さには感心すらも覚えてしまう。

山田（絶対にグラハムなんて呼んでやらん）は出席名簿を畳み、「全員出席だな」と満足げに頷くと教卓に両手を着いて生徒を眺める。

「諸君、この私、グラハム・エーカーが勤める今日の体育は二組の時間割変更に従い、彼らと合同となる」

……………えー。

山田から齎された言葉は俺の気力を根こそぎ奪ってしまう残酷なものだった。ざけんな、と声を張り上げる気も湧かないくらい、とんでもない脱力感に襲われる。

「なのはちゃんらのクラスやな」

「楽しみだね」

ああ、お気楽なはやてと月村が羨ましい。中空に『 』なんて浮かしゃがって。はやてはどう考えても『禁』だろうが。

「なんや、また不愉快な電波が」

「木の精だ」

「二度ネタはタブーや」

「鬼の精だ」

「よし」

「よし、なのかなこれは？」

「すずかちゃん。世の中すべてのもんを受け止めるなんてできへんのだよ。必要性のあるもんだけを見抜いて生きる。それが大人というもんや」

「格好いい発言だけど、使いところのせいで素直に頷けないよ」

「ぼーややからな」

クールにフツと笑うはやてはハリセンでやんわりと叩いておいた。ツッコミ待ちだったし、俺も少しでもストレス発散をしておきたか

ったから円満に終わる。

しかし鬱々とした気持ちが消えることはない。

それもそのはず。二組には俺が敬遠している二人が所属しているのだ。

確か……天之川 刹那とゼロ・レオンハルトだったか。

なんとも厨二臭い名前である。

ちなみに俺は、昔日本人の女性に引き取られて、時神の日本姓を得たので名前のクレイに漢字はない。馴染む漢字が存在しない。

それはともかくこの二人と対面するなんて虫酸が走る。食わず嫌いならぬ会わず嫌い、だが、そう思っても仕方ないほどあの二人からは異質な空気を感じる。

山田にそれだけは、と懇願したいのだが、山田にそんな言葉を口にするのも虫酸が走る。

「教師として公平なジャッジをしなければならないが、担任として敢えて言わせてもらおう！ 必ず勝利するのだ！」

死ねばいいのに。

決め顔で激励を飛ばす馬鹿に本気の殺意を抱いた。

風の精霊を使役すれば、窓から駆け抜ける春の陽気なそよ風一つでヤツの首を”ポロリもあるよ”にできるのだが。

仕方ない。サボるか。

「時神、サボりとは関心できんな」

「……山田」

なんで、気付いた？

「心眼は鍛えている。そして、私は山田などという名ではなく、グ
ラハ」

「あー、分かった分かった。ハム先生。これでいいだろ」

「うむ！」

「いいんやな」

この馬鹿なら体育の時その場にいなかったら校内放送や自分の手で探し出したりだって、平然とやりそうだ。ていうか、絶対やる。

そんな迷惑なことをされ、なおそんなことで有名になるなんて、いよいよハムを微塵切りにしなければいけない。

「……ちゃんと授業に出ればいいんだろ」

「分かればよい」

上から目線……！ このハム野郎……！

「クレイクン、どげどげ」

「ああ、分かっているよはやて……！ やるなら夜道で背後から、だろ。上手くやるさ」

暗殺か。ピンポンダッシュで培った、人込みや自然の一部と化して行動する能力を使えば余裕だな。

「そうそう、抜き足差し足忍び足　グサアッ！　って阿呆ッ。そんなこと言つとらへん！」

スパン！

奪ったハリセンを取り戻したはやてが俺の頭に一閃。

「大体、ハム先生をやって警察のお世話になるなんて、損失以外のなににもんでもないで」

「それもそうだな」

殺す価値もないとは、まさにこのことだ。

「お前たち、本人を前にいい度胸だな」

おっと聞こえていたか。

「まあ、多少の暴言は認めよう。私も大人だからな」

「アリガトウゴザイマース（棒読み）」

俺も大人だから多めに見てやる。良かったな。

ようやくハムは俺から視線を外し、何か言おうとしたが、腕時計で時間を確認すると、

「もう、こんな時間か。今日は一時間目から私は授業ある。連絡事項は述べたからホームルームは終わらせていただく」

有無を言わず一方的にまくし立てると、ハムは淡々と教卓に置いた所持品を回収して外に出て、

「しからは」

ピシヤリと教室のドアを閉めた。

数秒間、いたたまれない空気が教室を支配したが、時を経るに連れて活気を取り戻す。

「あの男のワンマンっぷりもあそこまでいけば逆に清々しいな」

「ゴイング マイ ウエイやもんな。これは当分、主役級の登場は確保されたも同然や」

俺としては是非とも遠慮したいのだが……

「ここぞって時に現れそうだな」

「いいとごどりか、空気をブチ壊すかの二択だな」

どっちにしる現場にいた者にとってはデメリットでしかない。風

の精霊で常に監視でもしておくべきか？

「いつそ事件でも起きて最初の被害者になってもなってくれれば俺も喜色満面で葬式に出席できるのだが。」

「それよりも」

「はやては怒気を孕んだ低い声を上げた。」

お試し版2

「すずかちゃん！」

その矛先は月村へ向けられた。

唐突に怒鳴られた月村は何が何だか分からず、目を白黒させている。

チラツとなぜ怒られたか理由を問う視線を向けてきたが、残念ながら俺もはやての思考回路は理解できない。静かに首を振るうだけだ。

「どうしてさっきのやりとりに一言でいどしか喋らんかったのや！」

「え……ええ!？」

……ああ、なるほど。と、それだけで理解してしまった俺もなかなか末期かもしれない。

「ハム先生が来る前に言ったばかりやんか。波のように押し寄せる登場人物に負けんだだけのインパクトがないと空気キャラへと左遷されてしまうって。今のすずかちゃんはまさしく空気やったと言えるで！」

まあ、そういうやつって結構いるんだがな。何か意見を言い合ったりはせず、輪に入ってたただ聞き役に徹するタイプは。

物語に必要かどうかと聞かれると、安易には頷けないが。

「こつやって私に怒られてスポットライトを浴びるんもあかん。自然の流れで会話に参加して、シャキンと心地好い言葉を放てるようにならんと、『すずか消えたww』なんて言われるで！ それでいいんかDear Friend!？」

「なんで英語？」

打てば響くような切り返しのチャンスを与えたつもりなんだろうが、しまった。先に俺が言ってしまった。

だが、はやては挫けない。

「よし、すずかちゃん。今のクレイクんのツッコミより一層キレのあるツッコミを見せるんや。ハリセンも貸したる」

半ば押し付けるようにはやてはハリセンを握らせる。

とんでもない無茶ぶりに月村は視線を右往左往させて激しい動揺を見せる。はやてのお笑い魂の熱量を知るクラスメイトたちは冥福を祈りながら、しかし被害が及ばないようにいつでも逃走を計れる距離を取っていた。薄情な連中である。

仕方ないから俺は抜き足ではやての背後に回って、月村と視線を合わせた。

ザ・アイコンタクト。

(ク、クレイクン。どうしたらいいの!?)

(落ち着け月村)

(でもはやてちゃん。鬼のような形相をこっちに向けてくるんだよ!?!? こんなはやてちゃん見たことないよ!?)

(お前の心配をしているからだよ)

(え? 私の?)

(そうだ。親友であるお前が空気となつていつの間にかいてもいなくても同じような存在になることが我慢ならなんだよ。立場を逆転させて考えてみる。お前は嫌じゃないか?)

(……嫌。凄く嫌だよ、そんなの)

(だろ。だからはやてはどんな手段を使つても、変な印象を抱かれようとも、お前に不安や疎外感を与えさせたりなんてしたくないんだ)

(でも……私、どうすれば)

(ツツコミを入れるんだ。今のはやてはそれしか望んでいない。幸いお前には笑いのアルテマウェポンが託されているじゃないか)

(あ……)

(はやての期待に応えるんだ。さあ、思いきり振り上げろ)

(思い切り……)

(手加減は侮辱だ。思いきり振り上げ、思いきり振り下ろせ)

(分かったよ。私、やってみる！)

意を決した月村の顔に最早、迷いはない。

自ら進む道を決めた、強者の瞳をしている。その姿たるはまさに豪華絢爛の凛々しき騎士。

一皮剥けた彼女は躊躇うことなくアルテマウェポンを振り上げる。

教室の騒音が嘘のように静まり返り、無音になったのは俺がこの光景に夢中になっていたからだろうか。こんな空気、久々だ。成長した人間が見せるオーラを前に、俺は自然と口元が緩んでいた。

もしかするとはやてもそんな表情を浮かべているかもしれない。

成長したすずかの放つ一閃を真っ向から立ち向かうつもりか、一切動く気配はない。

そして、時は動く。

高々と振り上げたアルテマウェポンが手加減なく振り下ろされたのだ。

月村は叫ぶ！

「な、なんでやねん!!」

この時、俺とはやてはすっかり油断していた。

月村すずかという人間の身体能力はとても高い。女性特有の繊細さと、その穏やかな性格からは想像もつかない豪胆さを兼ね備えた彼女は体育において無敗の強さを誇り、男子すら屠り、その名を運動部へ知らしめているのだ。

その実力は俺もはやても知っている　そう思っていたが、どうやら月村は体育の授業ごときで真の力を発揮することは不可能だったのだ。

ズゴオオオーン！！！！

「は？」

目の前の状況が理解の範疇を越えた俺は、らしくない素っ頓狂な声を上げてしまった。

ズゴオオオーン？　何だ、この音は。ハリセンで叩いた音ってせいぜい、バシッだろ？　ズゴオオオーンって必殺技が決まったような音は立たないだろ？

本当に、教室が水を打ったように静まり返る。誰もが啞然として硬直していた。

はやての頭が消えたのだ。ハリセンが振り下ろされたと同時に、まるで跳ね飛ばされてしまったように消えたのだ。

「はやて……？」

机にガクンと身体を垂らせるはやては、ピクリとも動かない。まるで死体のように、全身から力が抜け落ちていた。

冷や汗を流しつつ、俺ははやての顔を覗く。

「うわ……」

ハリセンが直撃したであろう後頭部と、机に打ち付けたであろう額に、大きな瘤ができていた。少し離れた位置からでも視認できるくらいポツコリと瘤ができていたのだ。

これには同情を感じざるおえない。ただ勢いとノリだけでモノを言っていたはやてに困らされていた月村を助けるべく、ちよつと脚色付けてはやてを美化して事なきを得ようとしたのだが、まさかの結果。

俺は教室に掛けられた時計で時間を確認する。

「午前八時四十六分……ご臨終です」

「はやてちゃあああん！！？」

月村の悲痛な叫びが胸に響いたのだった。まる。

うああああ……。

声にならない苦痛を上げた俺はグッタリと木に背中を預けていた。

現在の時刻、十二時。ちょうど日がてっぺんに昇る時間帯に、俺はグラウンドの隅の木陰で休んでいた。

四限目は体育だ。

視線を明るい前方に向ければ男子はサッカーを、女子はグループごとに様々な運動をしている。

普段は男子がグラウンドの場合女子は体育館、と場所を交互に変えて行っているのだが、どうやら今日は女子の体育を担当する教師が体調を崩して休んでいるのでハムが女子も纏めて監督することになったらしい。二組との合同のワケもここだろう。

ハムはサッカーの審判に忙しく、男女の面倒を両立するのは難しいため女子には自由行動を与えている。

そのため、

「「「キヤー！ 天之川くん、レオンハルトくん！！」」」

なんて女子の金切り声が晴天を突き抜けるまでに響いていた。

春の寒気は去ったというのに、その悲鳴が三半規管を揺らし、背筋を凍り付かせる。この距離でここまで不愉快な気分になるのだから、サッカーをプレイする男子には堪ったものではない。

天之川、レオンハルト。

女子の視線を釘付けにしている二人は、額に汗を浮かべて爽やかな笑顔で活発に動き回っていた。

紫色の切れ目に魔性の輝きを乗せる鴉の濡れ場色の髪をした長身瘦躯の男が天之川刹那。

紅と蒼。対を為す瞳を持ち、太陽のように光り輝く金髪の方がゼロ・レオンハルト。

二人とも、まあびっくりするくらい均整の取れた顔立ちをしている。絶世の二文字がついても恥ずかしくないくらい美形だった。

男から見ても、女子が黄色い声を上げて目をハートにするのは頷けた。

俺が敬遠する二人。

現在、この二人のせいで体調が芳しくないのだ。

始めて肉眼でしっかりと捉えると、やはり異質な力を感じた。人

ならざるもの、しかもよいといえない力。それが原因か世界を創造したとされる精霊たちが恐れをなして精霊術師である俺に群がってきたのだ。

空気を取り込んで吐き出すことを繰り返して生物が生きるように、精霊も取り込めば何かしらの形で吐き出さないと精霊酔いを起こしてしまう。

あの二人に近付けば近づくほど精霊たちは助けを求めて精霊を取り込む回路を持つ俺に入り込んでくる。集合して出席確認を取っている時は安易に精霊を使役もできないから吐き出せず、ひたすら身体の中に溜め続けるだけだった。よって俺は精霊酔いを起こして授業開始早々にダウンしてしまったのだ。

誰からも距離を取って、ゆっくりと風の精霊を使役し、周囲にそよ風を発生させているから激しい頭痛と吐き気はだいぶ収まったのだが、まだまだ全快にはほど遠い。

「気持ち悪い……。あの二人、いつそ斬り刻むか？」

そうすれば無駄に神経を擦り減らす必要もなくなり、輝かしい学校生活が送れる。

目を細めて殺気を飛ばしてみるものの、反応はいつさいない。鈍いのか、サッカーに集中しているのか。

夜道で背後から。いや、背後からじゃない。夜道で数百メートル離れたところから……。ザクッ！ ザクザクザクッ！！ と挽き肉にしてしまえば完全犯罪の誕生だ。

大丈夫。俺ならできる。ふふ、暗殺なんてゾクゾクするじゃないか。

真つ青な顔で不敵に笑っていると、近付く影が一つ。全方向に発散させていた精霊の流れを変える。

「大丈夫？ クレイくん」

「月村か」

気怠げに顔を上げる。そこには前屈みになって心配そうに見てる月村がいた。体操服姿の彼女は身体のラインがくつきりして艶めかしい。ハーフパンツから覗く白い足は男子から多大なる視線を浴びそうだ。

しかし今の俺にそんな劣情を抱く余裕なんてない。

「体育が始まる前までは元気だったよね」

「ああ……だが時間が経つに連れて気分は下降していたが」

まだ授業が終わるまで四十分近くある。憂鬱な気分は晴れるどころか積もる一方だ。

そんな俺の隣に月村は座る。

「……いいのか？ 大好きな体育だぞ」

「うん。実は私もそんな気分じゃないから」

「ふうん」

生返事をしたのは彼女は俺と近い理由に感じたから。

月村の視線が誰に向けられていたか、気付かないわけもないが、
敢えて黙殺しておく。

「で、はやてさんは大丈夫だった？」

「あは、は……。まだ保健室で寝てる」

あの凄絶なツツコミに打ちのめされたはやては至急保健室へ運ば
れて、現在も気絶中のようだ。

ちょっとした悪ふざけがこんな事態を引き起こすとは面白い。月
村め、とんでもない才能を秘めていたな。

「あの一撃は最高だったぞ。はやてが目を覚ませば、きっと称賛す
るに違いない」

「それは……。喜んでいいのかな」

親友を滅つしたのだ。いい気はしないのだろう。俺なら「おう、
殺す勢いで振り下ろしてやったぞ」と親指を立てれるのに。

「あ、フェイトちゃんが決める」

月村の視線は別に移っていた。

いつまでもあの二人に囚われるのも癪に障るので、俺も釣られて

見ることにする。

校舎側に構えられたバスケットゴールが二つ。それに白線でラインを書いたコートで女子がチームを複数に分けて総当たり戦に励んでいたのだ。

ちょうどプレイ中の試合に月村の友達が参加していたのだろう。月村の言葉から推察するに、それらしき人物はトリコカラーの七号球を自在に操っている長い金髪が目を引く少女だろう。

月村より若干劣る、しかし平均点は余裕で越えるバランスの取れたポデイラインは一切無駄のない軽やかなステップを生み出して他を寄せ付けない速度を形成していた。

舞い踊るように、進路の妨げとなった敵を擦り抜けて跳躍。強靱な足の瞬発力と上体のバランスをを披露したジャンプは彼女を重力から解き放った。

パスッ……

右手に乗せられたバスケットボールは吸い寄せられるようにリングの中に納められる。

「ダンクシュート。さすが外国人ってところか」

何処の国かは知らないが。魔導師ゆえに鍛えているというのもダンクを可能にした一っだろう。

名は確かフェイト……

「フェイト……テスト……テスト……。！ テストゼロテンかつ。フェイト・テストゼロテン・ハラ……孕？」

「フェイト・テストロッサハラウンちゃん。もう、酷い間違いしすぎだよ。特に最後のは、絶対に漢字変換なんてしちゃ駄目だからねっ」

「ハラウン？」

「ハラウン」

「フェイト・T・ハラウンね。よし、覚えた。ん？ 覚える必要があるか？ ま、覚えてしまったし、もういいか。」

「見事ダンクシュートを決めたハラウンはチームから拍手喝采を受けて、照れ臭そうに頬を赤くしている。」

「なるほど。弄られキャラか」

「え？」

「何でもない。って、こっち来たぞ」

「視界の隅に映ったのが、ハラウンは月村の姿を認めると小走りで向かって来た。照れ臭さがまた抜けていない紅潮した頬と満面の笑み。手を振って駆け寄って来る様は、端から見れば恋人を見つけた初々しい少女そのものだ。」

「月村も笑顔で返す。」

「おめでとうフェイトちゃん。さっきの凄かったよ」

「ありがとう、さすが」

うお、女子臭がする。はやてからは微塵も感じられなかった女子臭がする。居心地悪ツ。ただでさえ気分悪くて行動不能なのに。

「でも、さすがが敵チームに入っていればきつと無理だったよ。今日は、何処か体調が悪いの？ 保健室に行かなくて大丈夫？ 私、おんぶするよ」

「うん、調子は少し良くないけど、木陰に休んでいれば大丈夫だよ。心配してくれてありがとう、フェイトちゃん」

「症状が悪化したらすぐに私を呼んでね。すぐに駆け付けるから」

「うん、そうさせてもらうね」

と言ってニツコリと笑い合う美少女二人は非常に絵になるつちやなるのだが、このお互いを気遣う優しい絆は俺の肌を粟立たせる。淀んだ俺にこの空気は辛い。

グデーツとうなだれて遂に芝生の上に倒れてしまう。なるほど。これが、顔が濡れて力が出ない現象か。

なんて一人遊びで挽回を計るも、憂鬱な気持ちは晴れない。大きな溜め息が漏れてしまう。

「あれ、キミは………？」

不意に、少しおずおずしたハラオウンの声が降って来た。

「あ……悪い。溜め息が聞こえたか？」

「気にしてないよ。え、と……」

「コルトパイソン田中だ」

「……………え？」

「コルトパイソン田中」

「クレイクんっ」

怒られた。

「冗談だ。もう一回すまん。時神クレイだ。月村とはクラスメイトではやてとは一方的なお笑いコンビの候補生に挙げられている」

「あ。二組のフェイト・T・ハラオウンだよ。よろしくね」

律儀に握手を差し延べるなんて。最近の子供からは絶滅したと噂されていたのに。

素直な奴は好きだ。色んな意味で。感心しつつ差し出された手を握り返す。

「ああ。とりあえずよろしく」

悪い体調を押して、人当たりの良い笑みを小さく浮かべる。

そうしながらも、きつと関わりを持つことはないだろうと俺は踏んでいた。ハラオウンはかなり好感の持てる人柄をしているが、彼女はあの二人の所属する二組にいるのだ。同じ空間を共有するなんて想像するだけで悪寒が走るのに、二組になんて足を運べるわけがない。

「じゃあすずか。私はコートに戻るけど、具合が悪くなったらちゃんと呼んでね。もちろんクレイもだよ」

「うん、ありがとう」

軽快なステップでハラオウンは再び試合へと戻っていく。

「いい子だよ、フェイトちゃん」

「そーだな」

初対面の男子にこの優しさ……。罪作りな女になりそうだ。

まあ、それはそうとして。

「悪い月村。俺かなり限界。寝るわ」

寝ていても精霊の放出は可能だから随分前から取り組もうとしていたものだ。芝生じゃ安眠できそうにないが、この苦行を味わい続けることに比べたら軽いもんだ。

「なら私の膝、使っ？」

すずかは正座して膝を開けた。

「いいのか？」

「少し恥ずかしいけど……クレイクン、本当に具合悪いでしょ。だから、良かったら使って」

見れば月村の顔は少し紅潮していた。

男子に膝枕をするなんて今まで一度足りともしたことはないのだろう。初々しさを感じる。

普通の男なら、同様に顔を赤くしてあわあわと慌てふためくが、俺はそんな常人と掛け離れた存在だ。

「じゃあ、お構いなく」

瞬時決断。

言葉通り、いつさいの躊躇なしに月村の膝に頭を乗せる。柔らかく、温かな感触が後頭部に伝わった。

そういえば膝枕って緋菜によくしているけど、されるのって数十年ぶりだな。

ソツと手の平が頭に添えられて髪を優しく梳かれる心地好さに負けて、俺の意識は闇に包まれていった。

綺麗な吐息を繰り返すクレイの頭を、すずかはソツと撫でてみる。

腰まで届く真っ直ぐで林檎のように朱い髪は小さく細い指の動きに合わせて波打つ。

柔らかい髪だ。すずかは率直に思う。

それに似合っている。学校生活での彼は飄々として掴みどころがなく、しかし軟派というわけでもない。が、家での彼は、妹の緋菜に対してだけは態度がコロリと変わっている。その時の彼に飄々としたものはなく、穏やかで優しい、非の打ち所のない完璧なお兄さんなのだ。数回程度だが、そんなクレイを見ればあの長髪も頷けた。より一層穏やかさを強調するためなのだ。

妹のためならなんでもする。とんでもないシスコン野郎だ。

知り合って、一ヶ月と半分くらい。

きっかけははやてだ。

新学期早々、一新されたクラスメイトの中で二人は視線が重なりと雷鳴の如く衝撃的ななにかが背筋に走ったらしい。

ゾクツとではなく、ビビツと。

少女漫画的出会いに憧れる少年少女たちに言わせると、運命的な出会い。

前世はイヴとアダムのような関係だったに違いない　そう感じさせた。

赤い糸で結ばれた、出会うべき瞬間に出会った二人が想いを同じくするのは当然だった。

「なるほど。ボケとツツコミを両立させる存在ですね。分かります」

きっと前世はイヴとアダムのような　ではなく、相方だったに違いない。

笑いの糸で結ばれた、出会うべき瞬間に出会った二人が仲良くなるのは当然のことだった。

その流れで親友のすずかもクレイと親交を持ったのだ。

すずかと思う。

(きっとこの人は私の正体に気付いている)

彼女の血には僅かながらでも人間ではない存在のものが入っていた。

今その話題は無関係なので割愛しておくが、とにかくすずかはクレイが自身の正体について気付いている確信があった。

クレイは精霊術師だ。

世界を創造した逸話を持つ精霊は、魔力素と同様に個我は持たず、しかし知性と生命を持つ存在である。四大元素の風火水土の四つに分類され、常に世界に存在し続ける。しかし公の存在と認められないのは精霊が秘匿されるべき神秘的なものゆえである。

それは精霊と同じく秘匿されるべき悪しき存在を滅するため。

それは世界崩壊の可能性の一つ、科学転用を避けるため。

それは精霊を扱えるものと扱えないもの間に確執を生まないため。

クレイは扱える側にある人間だった。

霊力という、本来見えざるべきに在らぬものを見通す力が、それを可能にする。

妖魔邪霊 人の世に仇為す魔性に抵抗する力を操るもの。

霊力のある者にこそ視認できる精霊と共に魔を滅するもの。

それが精霊術師だ。

そして、不幸にもずかには妖魔と呼ばれる存在の血が含まれてい

る。
精霊術師が討滅すべき側の存在だったのだ。

すずかには見える。

天之川刹那とゼロ・レオンハルトという、人間とも妖魔邪霊とも
いえない不可解な存在に恐怖してクレイの中に逃げ込む精霊の姿が。
そして精霊酔いに苛まれ、少しずつ精霊を解き放っているクレイの
行動が。

お互い知らないふりをしてただの友人として振る舞っているのは、
いつのまにか暗黙の了解になっていたのかもしれない。

初めこそ警戒していたが、何も言わない、何も行動しない日々が
続いてそれも氷解していた。

だから立場だけ見れば敵対関係の相手に膝枕も許せたのだ。

「好き、なのかな？」

言って、首を横に振る。

この想いはまだ、はやてたちと同様の、友へ向ける想いだ。

そう、”まだ”……。いつの日か、きっかけがあればそれも変わる
かもしれない。

……ええ、マジで？

お試し版3（前書き）

人肉ミンチはいけません。

お試し版3

「……イクン。クレイクン」

「ん……」

仮眠していた俺が目覚めるのは早かった。元々寝起きはいい方だし、眠りが浅かったこともあって意識はすぐにハッキリする。

半身を起こして月村の膝から離れると倦怠感が無くなっていることに気付いた。

「終わったのか？」

「うん。天之川くんたちも校舎に戻っていったけど、調子はどう？」

……………。

「だいぶというか全快した。重い病気が完治した時のようなスッキリ感で今なら重力からも解き放てそうな勢いだ。悪いな。もう昼休み始まっているだろうにお世話になりっぱなしで」

校舎の壁の掛け時計で時間を確認。授業が終わって十分も経過していた。

なるほど。それなら全快だっしてしているか。

が。

「本当に悪い。いつもならはやてたちと昼食取ってただろうに」

「気にしないで。フェイトちゃんには言っているし納得もしてくれ
たから。それにクレイクんの寝顔って何だかすごくレアっぽいから」

クスツと笑みを零す月村に一瞬言葉を詰まらせる。

「……まあ、確かにレアだな。これ以上ないくらいにレアだ。遊戯
王で例えるとホログラフィックレアカード……いや、モンスターが
飛び出る3Dレアカードが当たるくらいにレアだ」

「まず開発されていないから当たらない、よね？」

「独自開発しなきゃ手に入らないくらいにレアということだ」

「そうなんだ」

「そうなんだ」

いつも一緒に寝ている緋菜にすら見られたことないと思うのだが。
俺が起きたら抱きしめてる緋菜は無茶苦茶苦茶苦茶（誤字にあらす）
可愛らしい寝顔を見せてくれるし。

「自分でもかなり以外だと感じているよ。人前で寝るなんて気絶し
た時くらいだと思ってたが。それくらい体調が悪かったんだろくな」

あの二人エ……！ 極論。襲い掛かって来ないだろうか？ 返り
討ちにして挽き肉にして害虫の餌にしてやるのに。

そのためにはきつかけが必要だな。とりあえずいつも女侍らせて
いるって聞いているから、そいつらを全員寝取れば……

「いや、駄目だな。男の狂言に乗せられる馬鹿女は嫌いだ」

「どうしたのいきなり!？」

月村は驚愕する。

いきなりもなにも、

「どうやって人肉ミンチにしてやるうかって話じゃなかったか？」

「ないよ!？ そんな物騒な単語、カケラも浮上しなかったよ!」

「でも蠟人形は開拓済みだし」

やっぱり新鮮味のあるのは人肉ミンチだよな。店頭に『国産 人
肉ミンチ』……。

いけ ないな。常識的に考えてそんなの扱った瞬間、本店はも
ちろんチェーン店も消え去るな。

だが、それは店頭の場合であって店に出さなければ何の問題もな
いわけで!

余裕で法律違反です。絶対にやめましょう。二次創作だから

と許されるレベルではありません。残酷な描写にも限度があります。

……………チツ！

「で、何の話してたっけ」

「色々腑に落ちないけど……………。寝顔の話だったよ」

「誰が得するんだ。その話題」

「……………私？」

「疑問形ならやめよう。男に関するものでギャグ要素の無い会話に価値はない」

「これがはやてちゃんと共感する理由なんだろうな」

「俺がシリアスの似合うキャラに見えるか？ どう考えても主人公の隣にいるちょっと愉快的サブキャラだろ」

「なんとというか、三枚目？」

「確かに主人公系統って感じじゃないかな」

「ミステリアスな部分もあって裏切り臭がプンプンだな。帰ったら風呂に入るっ」

「自分で言うことなの？」

「さつさと俺の性格を把握しておいてもらおうかな、と」

「誰に？」

画面越しの皆さんに、とは言えない。

「それはともかく、飯いなくていいのか？ さつさと着替えればまだ間に合う時間だろ」

「あ、そうだった！ じゃあクレイクン、先に行くね」

「おー。また会う日までー」

駆け足で校舎へ消えていく月村に見送りの言葉をプレゼントして、俺もゆっくりと歩き始める。

さっきまで男女が活発に走り回っていたグラウンドはすっかり閑散として、吹く風が虚しさを強調しているように思える。土埃が舞い、土の乾燥した匂いを甘んじて受け入れながら空を見上げる。

『 天之川くんたちも校舎に戻っていったけど調子はどう？ 』

月村が口にした言葉。

「体調を崩した原因……言っただけはただけだな」

だが、月村は言った。

天之川と。その原因を的中させた。

「まあ、元々そうだろうなと感じてはいたけど」

月村は俺が精霊術師だと感覚的に理解しているのだ。

精霊の気配を、彼女は間違いなく読み取っていた。俺が少しずつ放出していることにも、もちろん気付いていたのだ。

その理由は、彼女が精霊術師だから……ではない。

まだ精霊術師の世界に足を踏み入れて六年しか経っていないから決定打に欠けていたんだが、これで得た。

月村すずかは陰である妖魔の血を引いている。

だから陽である精霊を視認できた。

おそらく先祖が何かの妖魔と交配したのだろう。触れたりしないと感じ取れないくらい微々たる力が流れている。

「ま、だからといってどうというわけじゃないんだが」

別に気にしないし。お互い今の関係に満足しているし。

精霊術師は妖魔を討滅する存在　なんだろうけど、そんな使命
どうでもいいし。そもそも受けてないし。定義なんて知らないし。
たまに軽い運動と技量向上目的で狩っているからいいんじゃないの。

俺の力は俺の力。お前の力はどうでもいい。お前って誰のこと？

「でも月村家には精霊に関する書物とかありそうだよな。気になるよな。俺、独学だから精霊に関する知識ってあんまないんだよな」

知識で操るんじゃない、感覚で操ってるからいずれ限界は来る。

いくら精密で強大な技量と経験を保有しても情報が少なければ戦闘の勝率は大幅に下がる。

力でごり押しが通じるのは雑魚戦のみだ。ボス戦では敵の弱点、攻撃手段を見切り、味方と協力してコンボを繋いで勝機を見出さなければならぬ。魔神剣、雷神剣、爪竜連牙斬 インディグネイト・ジャツジメント!!

「技名を猛々しく叫んで恥ずかしくないかね」

「瞬迅剣!」「ただの突きですよね?」「え?」「だから、ただの突きですよね?」「いや、あの」「ただの 突きですよ ね?」「あ、はい……。ただの突き!(泣)」「なんて展開はないのか。」

「そついや魔導師もコマンドに技名を入れてたよな」

「アクセルシューター!」「アクセルって自動車とかの加速装置のことですよね? それ加速装置なんですか?」「え? あ、あの……ゆ、誘導弾です」「加速装置が誘導弾? ちょっと意味が分からないんですけど、詳しく説明してもらえませんか?」「あ……う……」「どうして吃るんですか? 何かやましいことがあるんですか?」「ふ……ふええええん! フェイトちゃあああん!!」「とか?」

技名付けるとそんな切り返しがありそうで怖いよな。俺は絶対やる。

その時が来れば徹底的に相手の精神をズタズタにしてやろうと笑った瞬間、腹の音が鳴った。

そうだよ、今は昼休みだったよ。

大好きかつ尊敬かつ憧れの兄であり続けるため、規則正しい生活とバランスの取れた食事に気を遣っているのは当然のこと。空腹で倒れたなんて緋菜に知られたらもうシヨック死してもおかしくない。

他の奴からは基本どう思われても構わないが、緋菜にだけは好感度MAX状態にあってほしい俺は足を早めて校舎へ向かうことにした。

ついでにはやての様子でも見に行つてやるか。

十

着替えを終え、教室から弁当を確保した俺は保健室へ直行する。

階段を降りてたまにすれ違う知り合いに軽い挨拶をしつつ廊下を歩き、保健室の前まで行くと中から何やら話し声が。

「大丈夫か、はやて？ さっきの体育に顔を出さなかったから心配したんだぞ」

「……………」

しかし餓鬼な奴はなぜか激しい憤怒の表情を浮かべる。

イラッ……。

俺は入れ代わるようにレオンハルトの横を通り抜け、保健室に足を踏み入れると同時に。

「はっ」

鼻で笑ってやった。

「この……！」

なんて怒りに満ちた声が聞こえたが即座にドアを閉めて鍵を掛ける。

背後からドアを蹴る音も聞こえたが華麗にスルーしてはやてが使うベッドに腰掛けた。

「何をしたんや？」

上半身を起こしたはやてが聞いて来る。

「ちょっとムカついたので馬鹿にしてみた」

集った精霊たちが身体から抜けていくのを感じる辺り、レオンハルトは離れたのだろう。

「ほら、弁当持ってきてやったぞ」

実は俺、教室ではやての弁当も持ってきてあげたのだ。

「ま、まさか私の鞆を物色したんか！？ 乙女の鞆を！？」

「そんなわけないだろ、腐やて」

乙女なんていないし。

「腐やて！？ はやてのことか！ はやてのことかあああ！？」

「クリリンではないとだけ言うておく。アスキラ」

「サラツと吐いたな！ 私のデリケートゾーンに土足で踏み入れたな！？ これはもう言い逃れできへんでクレイクン！」

「悪かったって。でも俺が持つてこなかったらお前、昼食取れず午後からまたぶっ倒れるだろ、腐女子」

「それは感謝しとる　　って今度は直球！？」

ハイテンションなはやては無視して俺は弁当を開封する。

黒の長方形に半分収まるのは、黒ゴマの乗った白米。もう半分にはお浸しやら卵焼きやらたこさんウインナー（緋菜が好きなんだよね）やらさくらんぼやらが綺麗に分けられている。流石俺。料理が上手いぜ。

味の方はむしろ見た目以上に自信がある。

上機嫌で箸を取り出した俺はパクパクと腹を満たし始めた。それを見てはやても自分の弁当を食べる。

「それにしても、いやいやはやてさんも隅に置けませんなー」

「？ 何がや」

咀嚼した食べ物を飲み込んでにんまりと笑みを浮かべると、はやての箸が止まった。

往生際の悪い。

「さっき学園の王子様と親しげな会話をしてたじゃありませんか」

「……見てたんかい」

反応が期待外れだ。なぜ気落ちする？ ここは顔を赤くするとこころだろ！

「正しくは最後のほうだけ聞いていた、だが」

釈然としない苛立ち……。これが怒り……？

「同じようなもんや。変なところ見られてもったなー」

肩を落とすはやての反応を見る限り、

「お前、あいつが嫌いなのか？」

「嫌いつちゆうか何というか。ゼロくん、それに刹那くんも私の家族を救ってくれた恩人なんよ。そんな人にこんな気持ち抱くのは最低って分かっるとるんやけど……不気味なんや、あの二人は」

「……………続けて」

思わぬ収穫の予感に真顔になる。

魔導師には霊的要素は備わっていないはず。つまり直感ではなく確固たる理由があるのだろう。

「あの二人、何やなにもかも分かりきっているかのような行動をするんよ。まるで未来や結末を知っているかのような。聞いてみたらなのはちゃんとフェイトちゃんの時もそんな感じじゃったらしゅうて私らはちよつと敬遠気味なんやな」

未来……結末を知っているかのような　ね。それは想定外の情報だ。そんなレアスキルはカリムくらいだと思っていたが。

「ってか、続けてとか言っただけど何の話？」

知っているのに、こういう態度をする俺は性悪なんだろうな。

しまったと驚愕に目を見開いて口吃るはやてを眺めつつ、俺は食事再開させた。

お試し版4（前書き）

悪魔降臨。卑怯万歳。

お試し版4

「諸君。別れの挨拶。則ち、さようならという言葉を慎んでおくらせてもらおう」

これが終わりの挨拶なんだからハムはともかく生徒側は齒の抜けたような気分になる。「起立、礼。さようなら」が懐かしく羨ましい。

言うなりサツサと教室から出ていくハムを半眼で一瞥する。

「本当、我が道を行く男に変貌したな。山田め」

「一年前は地味で冴えん痩せこけた中年やったのになあ。一体どうやって若返りしたんか目茶苦茶気になるわ」

「整形はしてないって言ってたし、本気で努力したんだろうな。動機は不純だが」

アニメのキャラに憧れましたなんて。

「さて、俺は帰らせてもらおう」

支度を済ませた俺は早々に席を立つ。

「クレイクン、いつも帰るの早いよね」

「小学校は中学より授業終わるの早いからなあ。一足先に帰宅して
る緋菜ちゃんに会いとつて溜まらんのやる」

「当たり前だ。お前たちにはあの子の可愛さが分からんのか？ 目
が腐っているのなら仕方ないが。緋菜が妹だったらもう誰もがシス
コンになって全身全霊の力を込めて愛でるのは普通の摂理なんだぞ」

「流石、キンブ オブ シスコン。言うことが違うわ。シスコンは
常識なんか」

「想像してみる。俺のポジションを自分に入れ替えて妄想してみる」
「……………」

はやては顎に手を当てて妄想して、

「妹さんを私に下さいー！」

「死ぬ。いや、殺す」

そんな台詞は一生認めるつもりはない。

手に提げた鞆をクルクル回転させて勢いを付ける。狙うは後頭部。
角でやれば致命傷はいけるはずだ。

緋菜はやらん！

「理不尽やる！ 想像してみる言ったのはクレイクンちゃん！」

「それで言い訳付くと思ってるのか!？」

「何で私が怒られるんやー！」

「落ち着こうよ二人とも」

後は盛大に振り下ろすだけだったのに、月村が割って入り攻撃は中断された。

「離れる月村！ この世には綺麗事だけじゃどうにもならないことがあるんだ！」

「離れんとつてすずかちゃん！ この世の理不尽に私の命が風前の灯や！」

掻き消してくれよう！ 風前なんて生温いわ！

冗談抜きの攻撃に熱を注いでいると、不意に立ち塞がっていた月村が動く。

よし、狩れる ！

そう悟った俺は手に力を込める。

一狩り行こうぜ！

「と、思ったけど冷静さを取り戻したからやめます」

「そやな。私も特に言うことはないで」

たらたらと冷や汗を流しながら俺とはやては月村から離れる。

このやりとりをボケと感じたのか、彼女の手にはハリセンが握られていた。

しかも思い切り振りかぶっていたから手に負えない。

あの一撃を受けたら死ねる。

既に経験済みのはやてなんて蒼白になってガクガク震えているし。

「じゃあ俺は帰らせてもらう。また明日な」

安全確保も含めて俺は一方的に告げると駆け足で教室を出ていく。

いや、危ない危ない。月村にあんな狂暴な一面を与えるなんてハリセン恐ろしや。余計なことしなけりやよかった。

速度を緩めて階段を降り、下駄箱で靴を履き変えた俺は歩幅を若干早くして帰途に着いた。

「…………ふむ」

帰途に着いていたはずの俺は異変に気付いて足を止める。

この道は俺の住むマンションに辿り着く最短距離。昔から物騒な

噂が絶えずすっかり人通りの少なくなつた間道はいつも閑散として
いるのだが、今日は何か違う違和感を覚える。

建造物は少なく、見晴らしの良い周辺の景色を見渡す。

「……この感じ、どっかで」

昔は随分お世話になっていた気がするんだが。それこそ日常茶飯
事のレベルで。

しかもこの感覚の中、常に敵を蹂躪していたような……。

「あ、結界か」

なるほど。謎は全て解けた。

この閉塞感は結界の中にいるからだ。昔の俺はよく敵を結界に封
じ込めて楽しんでいたものだが……今回は立場は逆転。俺が封じ込
まれるパターンか。

現在俺の身体に魔力は存在しない以上、発動を瞬時に察知するこ
とは不可能だった。いつから閉じ込められたのかも定かじやないが、
犯人の目星は着いている。

「出て来いよ」

これで沈黙が流れたら目茶苦茶痛いな。シーンてなつたらかなり
いたたまれないぞ。

しかもなんだ「出て来いよ」って気取った台詞。あらやだわ奥様

「だったら厨二病じゃない。ここは「その気配を消してる奴……出て来いやっ！」をチヨイスするべきだったな畜生。」

バトル漫画にしょっちゅう出て来る台詞を吐いて軽く死にたくなつた俺を尻目に、結界を張った人物はお約束通り現れた。

「何か用でございますかレオンハルトさん。用件は三文字でお願いします（棒読み）」

よし、名誉挽回汚名返上。「何の用だ」なんてつまらないしな。

背後の電柱からスツと姿を見せたレオンハルトは蒼と紅の瞳を陰しくさせて指示に従った。

「殺す」

わおっ

「理由は？ 三文字じゃなくて可」

「お前も転生者の一人なら分かるだろ」

……転生者？

この人往来でなんてこと口走ってんだ恥ずかしい。 転生者って何？ 頭おかしいんじゃない？

予想を上回る痛々しさにひくついた笑みを浮かべた俺を、この馬ハルトは更に勘違いをする。
「鹿は更に勘違いをする。」

「刹那と結託して他の転生者は全部殺したと思っていたんだが、まだ生き残りがいたとはな」

「勝手に納得してないで理由くらいは述べるよ。それくらいの権利はあるだろ」

「ねーよ。俺ら以外の転生者にそんな権利。PT事件と闇の書事件に参戦せずに虎視眈々と原作キャラに近付こうとする屑がっ」

また意味不明な単語登場。原作キャラ？ え？ 何この人、現実と二次元がドッキングしてるわけ？

「あゝ、とりあえず病院行く？」

「必要ねーよ！ お前がこれから行くのはあの世ただ一つだ！」

……恥づ。台詞恥づ。真顔で言ってるよ。

全力で俺が引いている中、痛い子は右手首に嵌められた腕輪を輝かせた。

「聖なる光！ エクスカリバー！ セットアップ！！」

掲げた腕輪が姿を変え、空間に生じた刀身や柄やら派手な装飾部品によって剣の形をとってゆく。

同時に、なんか厨二病全開の痛々しい台詞を堂々と吐いてもう末期なんじゃないかとむしる同情すらしかねないくらい馬鹿で愚かで羞恥の塊のような奴の制服がはじけ、新たな衣服がその身を覆う。

言うならお約束の変身シーン。この光が収まる頃には、絶対にこいつもう駄目だよね色々終わっているよね転生者？ 原作キャラ？ 意味分かんねーんですけど？ その存在も意味不明なら頭の方も意味不明なのですかこの野郎はバリアジャケットレオンハルトに包まれ、剣化したデバイスを構えているだろう。

成功すれば、ね。

斬ッ

「え？」

素っ頓狂で哀れな声が聞こえた。

俺は内心で嘲笑う。どんな理由だろうと一瞬の隙を見せたお前が悪いのだと。

精霊術は魔法とは違う。肉声は必要ない。術者の意志に応え、精霊は自ら進んで集い、自らの意志を術者に託す。

術者（俺）は願えばいいだけだ。願い、精霊を事象化させる。

願った形は風の刃。

俺とレオンハルトの距離は僅か十五メートル。人間の反射神経では絶対に回避不可能な神速の刃が具現化させる。俺の意志一つで手足のように動く刃が。

一閃。レオンハルトの右腕を斬り飛ばす。

一閃。レオンハルトの左足を斬り飛ばす。

一瞬かどうかも判断し辛い出来事にレオンハルトは自分の、宙を舞う右腕で左足視認できずに呆けた表情が張り付いたままだ。

自分達を脅かす存在の無残な姿に精霊は歓喜する。

俺が無関心の眼差しを向けていると、レオンハルトの右肩と左太股は思い出したかのように血飛沫を上げた。

変身はもちろん中断。バランスを失った身体が惨めに地に伏せる。

「あ……ああ……!!」

レオンハルトの脳がようやく現実を認め、理解の範疇を越えた激しい激痛が襲おうとする。

驚愕に目を見開く姿を見て、俺は次に奴が取る行動を予測して歩み寄る。

結界は既に解けていた。

「ああああ」

「黙れ」

勢いよく顔を踏み付けて唇を塞ぐ。

鼻の骨と歯が碎ける感触が伝ったが、だからどうした。

「 ! ! ! 」

さきほどまでの傲慢な態度は一変。恐怖と激痛に目からはダラダラと涙が溢れている。

「 ! ! ! 」

必死に何かを叫んでいるようだが、無視をする。絶対強者を誇る人間が地をはいつくばる光景は無様で仕方がない。

「まあ、あれだ」

平淡な声で言う。夕焼けの空を一瞥して、

「誰に向かって大層な口を聞いていた？ 糞餓鬼」

振り上げた足を今度は首目指して振り下ろした。

「た、助け」

どれだけ祈ろうとギロチンのごとく振り下ろされる足が止まることなどない。

強者の矜持を放擲したその言葉は、しかし最後まで言い切ることもできず、首の骨の碎かれる音に飲み込まれ、レオンハルトの意識と共に消滅した。

「……………」

俺は踏み付けた足を退けるとレオンハルトを放置して帰途に着く。

正直気になる単語が二つほど挙がったが、まあいい。こいつの正体も気になるんだが、既に事切れた後だから聞き直すことも不可能だし。

だが「刹那」と言った。つまり天乃川刹那はこの二つの単語の意味も、自分達の正体も知っているとということ。

「だからといって聞けないよな」

明日はゼロ・レオンハルトが死体で発見されたというニュースで持ち切りになっていることだろう。そんな状態で問い掛けるなんて告白しているようなものだ。

ひとまずこの疑問は置くことにしよう。

どうでもいい奴の命に何の関心も示さない俺は軽い足取りで自宅へ向かった。

お試し版5

地球に転移した際、様々な金品を持ち込んで換金した結果我が家の財政状況は富裕層の方々と同等にまで潤っている。

そう、時神家はお金持ちさんなのだ。

いくら使い込もうと位の数値が下がらない現状にニヤニヤが止まらない俺が選択した住居は、この海鳴市最大にして最高級のマンションだ。

ロビーへと続く短い階段の脇には噴水や植物が設けられ、自然の癒しと秀囲気を取り入れている。山と海が丁度の距離にあり、涼しい風が吹き込むその場所は俺や緋菜はもちろん他の在住者も憩いの場を利用していた。そこを上がっていき、自動ドアの脇にある制御盤の前に立った。

立派なマンションは当然セキュリティも厳重である。

住人は制御盤にある指紋認証に触れれば自動ドアは開くが、訪問者はわざわざ住人の許可を得なければ、部屋以前に建物の中にさえ入れない。制御盤のキーボードを操作してまず住人と連絡を取らなければならぬのだ。

指紋認証装置に手を触れる。そして数秒経過すると自動ドアは開く。

ロビーに足を踏み入れると受付嬢に「お帰りなさいませ」と言われ、軽く会釈をしてエレベーターに乗る。押した階層は最上階。

マンションの最上階に部屋を構えている。鍵を差し込んで扉を開けると広い玄関が目映る。

「ただいま」

シューズインクローゼットを開けて脱いだ靴を仕舞っていると、中からトテトテと可愛い足音が。

来たー！

レオンハルトを討った瞬間の格好良かった俺は一瞬で砕け散り、締めりのない表情が表に出て来る。

仕方がないじゃないか。この瞬間が俺にとって、待ちに待ったゲームの発売日みたいな感覚なのだ。毎日毎日この瞬間はそんなドキドキ感に駆られてしまうのだ。

廊下を歩きながら腕を広げると、それは一切の遠慮なく俺に飛び付いて来た。

「お帰りなさい、おにーちゃん！」

んにゅうと笑みを零す可愛い奴をこちらも強く抱きしめる。

「ただいま、緋菜」

もう一度挨拶をして緋菜を抱き上げる。

金髪の波打った柔らかい長髪。大きくクリツとした碧眼。小柄の体格と保護欲に駆られる可愛らしさはまさにお伽話に登場するお姫様のよう。

そんな超絶美少女お緋菜様を抱き上げる俺は甘い香りと温かで柔らかい身体に触れてこれ以上ない幸福感にやられ、モザイク処理を施してほしいくらいの締めまりない顔だった。

「んー」

緋菜が頬をすりすりしてくる。

「……この野郎ーっ」

毎日毎日可愛すぎるぜ！

抱きしめる力を強くして頭をなでなでしつつリビングへ向かった。

部屋の中は、とても綺麗に片付けている。どのような家具にも調和する静やかで自然な色合いを基調とした幽寂のカラーテイスト。

天井には埋込型のエアコンを設置しているためすっきりとした空間を演出している。

キッチンは使い勝手の良い五口コンロを設置して一度に複数の調理をする際に遠慮なく対応できる。おかげで食する時はどれも出来立てはやはやである。壁には二階にある大型ユニットバスのお湯張り、追い焚き、保温までスイッチ一つで自動操作可能なオートバス。

そしてリビング、ダイニング、寝室に温水床暖房が設置されている。ちなみにロビーの受付嬢に連絡すれば美容室などの予約すらもやってくれる。

至れり尽くせり、というのはまさにこのことだろう。とち狂った経営者が高級ホテルをそのままマンションに利用チェンジしてくれたのには本気で感謝だ。

鞆をソファに放り投げてその後に俺も腰を掛ける。

ぼふんと緋菜も膝の上に乗せて完了。

「相変わらずかわゆい奴よのう」

「んー。おにーちゃん、朝も言ったよ」

「ていうか毎日四、五回は言ってるよ」

「照れる……」

「くっ、かわゆすぎる……！」

ほんのり頬を紅潮させる緋菜の爆発力は核弾頭すら凌ぐというのか！ かつて最強と謳われた（かもしれない）このお兄ちゃんをここまで骨抜き状態にさせるなんて！

「犬耳と尻尾を装備すれば確実にお兄ちゃん陥落する自信があるわ」

「んー？」

「なんでもないよ。それより緋菜、今日は宿題はないの?」

「ん。ない」

「良かったね。緋菜はお勉強苦手だから」

すると緋菜は頬をプクーツと膨らませて、

「むー。緋菜お勉強苦手じゃないもんっ」

「2×9(にく)＝?」

「? 緋菜はお肉よりケーキの方が好きだよ」

馬鹿な子のほど可愛いというのは本当だね! 話の流れをおもつきし無視しちゃってるよ。

「おやつ食べる?」

「食べゆ!」

一度緋菜を抱き上げてソファにころりと転がしてキッチンの冷蔵庫を開ける。

一番下の棚に置いてある皿を二枚取り出す。フォークとセットで乗っていたのは昨日買っておいたチョコレートケーキだ。

ソファに戻り、テーブルに皿を乗せると、緋菜はさっきまでいた俺の膝上に座り直す。

「手作り？」

「それは流石にお休みの日じゃないと無理かな。平日はお店のケーキで我慢してね」

「ん。お休みの日は作ってくれるの？」

「もちろんだよ」

緋菜の頭に顎を乗せてフォークを手に取る。一つしかないのは俺が緋菜ぶんを食べさせてあげるからだ。

「はい、あーん」

ケーキをフォークで切って口元へ運ぶ。

「あ〜」

ぱくっ

「おいしい？」

「ん」

「そっか。よかった」

ああ、この空気だよ。このほのぼのした癒しの空気が心を満たしてくれるんだよ。

学校じゃまず味わえないものだ。最近なんていつもはやてと漫才

やってるし。楽しいのだがあれは癒しとは呼べまい。

「おにーちゃん、何かあった？」

緋菜にパクパクと食べさせていると、不意に聞いてきた。頭に乘せた顎を外すと緋菜は顔を上げて視線を合わせてくる。

「ん？ 何かって」

細い眉を寄せて「んー……」と俺の顔色を伺う。

「嬉しい……こと？ おにーちゃん、すっきりした顔してる」

相変わらず緋菜は直感力が高い。感情を隠すなんて刃物で鉛筆を削るくらい楽勝な俺のソレをあっさりと紐解いてくる。

この子は色んな意味で俺以上の才能の子だからなあ。俺の保護欲を射止めるなんて並ならぬ力を感じるぞ。

顔を上げた緋菜に対し、俺は顔を下げた額と額をピタッとくっつける。

「なんか今日の帰りに変な奴に絡まれてね。日頃学校生活で溜まっていた鬱憤を正当防衛を立てに晴らさせてもらったんだ」

「せーとーぼーえい？」

「自分の身を護るために相手を徹底的にいたぶって苦しめて二度と反抗できないようにすることだよ」

「おにーちゃんらしいねっ」

”らしい”ですか。そうですか。流石緋菜さん、お兄ちゃんのお黒さまも看破しとりましたか。

「……とりゃ」

なんか悔しかったので反撃に移行する。

チヨコレートケーキを食べ終わると俺はフォークを置き、緋菜の脇腹、しかも一番敏感な部分を擦る！

「んに！？ ん〜！」

唐突な俺の行いにビクツと地上に打ち上げられた魚のように跳ねると、緋菜は魔の手から逃れようと身をよじらせる。

が、甘い！

「ふっふっふ。お兄ちゃんから逃れようなんて百年早いよ！」

スピードアップ！ 指に力も込める！

こちょこちょこちょこちょ、の間にツンツンツンも混ぜる。

このじゃれあいには最近ご無沙汰だったから油断していたな緋菜さんよ。悶絶するまで続けちゃうぜよ！

「ん！ お、おにーちゃ、や、やめ……！！」

「無理。だって可愛いもん」

ね〜。

「り、理由になってにゃひっ……！ ん〜〜！」

五分後。

「はぁ……はぁっ」

宣言通り悶絶するまで弄り倒された緋菜は俺の胸にもたれ掛かってクタンとしている。

息は乱れ、頬も紅潮し、涙目となっている緋菜は子犬や子猫の以上の破壊力を発揮していた。堪らずギュッと抱きしめて愛でてしま

「おにーちゃ、ひ、酷い……」

「だって緋菜があまりにも可愛いから」

「理由になってないよ……」

「いらないもん」

「？」

息の整いつつある緋菜はコクンと首を傾げる。

そんな緋菜の頬を撫でるように触れて、俺はニッコリと笑う。

「大好きな家族と触れ合うのに、理由なんていらないよ。たまにはこういう刺激的なじゃれあいだっていいと思わない？ 時が流れて緋菜も異性が気になるお年頃になったらこんなことできなくなるんだもん。緋菜が子供だから許される特権を今のうちに堪能しておきたいんだ。変わらないものなんてありえないから」

時が流れれば自然と人も変わる。

変わらない日々なんて決して訪れない。時間という定めは数学の公式のように決められた倫理しか叩き出さない。感情や努力などで覆せるものじゃない。だからいち早く現実の仕組みを理解して享受するかが大切なのだ。

変革なんて自らの意志とは無関係に勝手に起こる。未来や明日なんて前向きなヴィジョンに囚われて今ある幸せを、今という時だけにある”幸せを蔑ろにするのは愚か者のすることだ。

切り捨てるためでも、選ぶためでもない。今も未来も貪欲なくらい幸せを求める行為こそが幸福な生き方のはずだ。

いずれは緋菜も成長し、自立心を育てて巣立っていく。そうなる前に、できることはやっておきたい。色んな愛情の育み方をしてみたい。

そして門出の時は満面の笑みで見送るんだ。「いつてらっしやい」

って、「いつてきます」って家族だからこそ交わせる言葉で。

久々に帰って来たと思えば知らない男を連れて来て、幸せそうな顔で「私、この人と結婚するんだ」って

え？

け……結婚？ 緋菜が？ 結婚？

いや、な、ななな何言っておりますかクレイさんったらそんな馬鹿な。ちつくと待つてつかあさいな……！ 俺が一世紀ぶんの愛情を掛けて育てたお緋菜様を、見知らぬ男が掻っ攫っていく？

「チイス、トウイス、チヨリース。妹さん頂いていくツス。サンキューです。幸せにしてもらいます。あ、お兄さんお金ないっす。パチスロいきたいんで一万貸してくれないっすか？」

……。

……。

……。

「
%#&*@
\$

(解読の不能な断末魔) !!
」

緋菜を退けて立ち上がった俺は生まれて初めて咆哮が如く叫びを上げた。

「!?!? ど、どうしたのおにーちゃん……!?!?」

「何がチーイスだ、何がトウィーイスだ、何がチヨリーツスだ!?!? チャラ男か!?!? チャラ男如きにうちの緋菜が奪われてしまうんか!?!?」

「おにーちゃん? 今、いい話してたよ? 緋菜、ジーンってなってたのに、何処に辿り着いたの?」

「だって緋菜! あいつ『幸せにします』じゃなくて『幸せにしてみせます』ってほざいたんだよ! もう色んなモノがぶちキレて我慢なんてできないよ! しかも無職なのかあの野郎!?!」

「おにーちゃん、緋菜を置いてきぼりにしちゃ駄目」

「フツ……フフフ。そっか、そうだったな。緋菜を見知らぬ男になんてあげません。そうだよ、だから……だから、この世に存在する雄に分類されるすべての生物を消滅させたらいいだよ。大丈夫、俺ならできる。逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ? そうだよ逃げちゃ駄目だよ。俺が一人残さず狩り尽くして根絶やしにするんだから」

「おにーちゃん!?!」

ぼふっ

「はっ！ 俺は一体何を」

ソファの隅にあったクッションで顔面を叩かれて俺はドス黒い何かから解き放たれた。

「緋菜が聞きたい」

見れば緋菜はブーツと頬を膨らませて半眼でこちらを見ていた。

「そういえば何の話してたっけ。いい台詞を吐いたような気がしたんだけど」

いい台詞いい台詞……どうでもいい人間の命はどうでもいいとか？

なんか違うか。

緋菜も分かってないみたいだし、気になる。

本格的に頭を悩ませる俺が唸っていると緋菜のお腹がぐうっと鳴った。

「おにーちゃん、お腹空いた」

刹那主義ですなお緋菜さま。

「さつきチヨコレートケーキ食べたよね」

「ん。でも減っちゃった」

緋菜のたどたどしい口調は魔力を秘めていると思う。

「仕方ないな。でもお夕飯まで時間があるからお握りでいい？」

「んっ」

元気よく手を挙げる緋菜の頭を撫でて、俺はキッチンへ向かった。

お試し版6（前書き）

Main Event?

5と6を同時に更新しました。

お試し版6

「おかしい……。お菓子欲しいの略ではなく、純粹におかしい」

部屋と同様の幽寂カラーテイストなキングサイズのベッドに座り、ゼロのニュースを眺めていた俺はちよっくらシリアスモード。膝上に緋菜の頭が乗っかって可愛らしい寝息が聞こえて来る。

激しく、ぎゅーってしたいが今は自重。シリアスモードなのだ。

夕食、入浴を終えて緋菜とじゃれついたりして今日も一日が終わろうとする時間帯。

いつもは緋菜の就寝時間である十時に彼女を抱きしめて共に夜を過ごすのだが、今日は生活リズムをずらしてまだ起きていた。

原因は簡単。

そろそろゼロ・レオンハルトに関するニュースが報道されるんじゃないかと予想していたからだ。

あの場所は確かに人通りは少ないが、だからといって一日中無人なわけじゃない。俺のように近道に利用する学生をちらほら見掛けるのも記憶している。

だから奴の死体は誰かに発見されて警察からテレビ局へ情報が送られているはずなのだ。

だが、ゼロくはそんな気配を見せず、もう終盤に突入して

「……………結局放送されず、か」

そのまま終えた。

中学生が惨殺（注：犯人、俺）されたのだから速報されてもおかしくないのだが。

何かすつきりしない。納得できない。齒に食べ残しが詰まったかのような気持ち悪さがこびりつく。

精霊術で斬ったから秘匿されるべき神秘が関わり、世界の裏事情というのが絡んでしまったのだろうか？ 最後は踏み潰したのだが……………。

「考えても仕方ないか」

不愉快さは拭えないがこの程度、うちのお緋菜様を抱きしめれば問題ないわ！

とりあえず明日、望み薄かもしれないが朝刊とニュースを確認後、様子を見に行くことにした俺はテレビと明かりを消して、床に着いた。

テレビと朝刊は予想通りと言っべきか報道はされなかった。

さっさと支度を済ませて緋菜とともにマンションを出る。

「緋菜、今日はいつもと違う道を行こうか」

「んー？ ん」

緋菜はコクンと頷く。

「ありがとう」

手を繋いで俺たちは歩き始めた。

あの閑散とした道は時間短縮できようと朝の通学路には相応しくない。挨拶は将来、社会で生きるために勉強以上の必須事項だ。これはきちんとさせておかないと、俺のようになってしまつと判断したので通学路は活気のある街路を選んでいたのだ。

しかし今回はことがことなため致し方ない。問題があるような引き返せばいいだけだ。

緋菜としりとりをしながら歩く。

「じゃあ王道に、しりとりの”り”からだよ。リール」

「ルビール」

「ビール」

「ルーっ」

”う”でいいよね。ウール」

「る……ルーレットっ」

「トータル」

「る……！る、ルーフッ」

「へえ、よく知ってたね。フリル」

「うにっ！？る……る……ルーツッ」

「鶴」

「……おにーちゃん、”る”ばかり。……ルーム」

「る攻めはしりとり必勝法だよ。貪る」

「うー……また。っ。必勝法？留守っ」

「そう。”る”で始まる言葉と”る”で終わる言葉を叩き込むのが
必勝法。吸い取る」

「るー……もう、やー！」

緋菜はبيضとそっぽを向いた。

「ごめんごめん。やられる側は楽しくないよね」

「むー」

「抱っこしてあげるから機嫌直して」

「……………」

ピタリと足を止めて、逡巡すると緋菜は俺に向かって両手を広げた。

本当に可愛らしい子だな。はやてたちが驚愕に目を見開いて戦った、優しい笑顔を浮かべて緋菜を抱き上げる。

顔を胸に押し付けて頭をなでなでしながら先へ進む。

数分で例の脇道に辿り着いた。

もし他の術者が動いているなら風の精霊は使用しない方が懸命だ。ばれるとまたサクツと斬り裂かなきゃならん。

あくまでただのシスコン & amp; ブラコン兄妹な通行人AとBで様子見をするだけがいい。声優は穏やかとクールを両立できるなら新人でも可。でも緋菜はアルルウ役を演じた沢城さんで。

「緋菜、今日の晩御飯は何がいい？」

「んー。ハンバーグっ」

「りょーのかい」

なんて有り触れた会話を交えながら殺害現場へ向かう。犯人は現場へ戻って来るのは本当だったんだと実演して実感した。

「ん？」

俺は思わず足を止めた。

現場の距離はもう肉眼で認められる位置にあるというのに、そこに人だかりはなかった。

というか人っ子一人いない。

まるで何の出来事も起きてなかったかのように。

「……！」

距離を詰める。

思わずその足が早まったのも無理はなかった。

冷や汗が流れる。胸に押し付けて緋菜の視界を奪っていてよかった。こんな姿を見られれば不安を煽るだけだ。

焦る気持ちを自制心で押さえ込み、有り得るであろう可能性を思いつく限り重ねていく。だが下調べもない状態では限界はあっさりと来る。可能性を導き出すには非常識という材料がいるわけで、自身の認める非常識の範囲でしかその可能性は導き出せない。

今回のケースは、

「これは、どうなっている……！」

余裕で俺が生きてきた非常識を更に越えていた。

何も無い。

そう、何もなかった。

ゼロ・レオンハルトの死体も血飛沫の散った痕も、何もかもが消えていた。

まるで初めから存在していなかったかのように。

「……………」

らしくない焦燥感に舌打ちをして冷静さを取り戻す。様々な場数を踏んで来た自身の経験値の豊富さに感謝しつつ、予測する。

水の精霊を使役すればコンクリートに付着した血糊も腐臭も綺麗さっぱり洗い流せるが、そんな気配は感じられない。つまり死体の隠蔽工作に精霊術師は関わってないということ。

ならば表沙汰にしない理由なんてあるのだろうか？ まだ秘匿されるべき神秘があるというのか？

確かにあの男は精霊が恐れをなしていた存在だった。ただの人間がどれだけ奇特な才能を持つとも世界の法則を覆すなんて不可能だ。

あれがただの人間を逸脱した存在だというのは五年と半年前に認
知済みだが……。

「やめよう。多分正解は出ないな」

判断材料が少なすぎる。正解を導くに時間制限があるわけじゃな
いから無理矢理単語と単語をくっつけ合わせる必要はない。

「どうしたの？ おにーちゃん」

ひょこつと胸に埋めていた顔を突き出した。

「なんでもないよ。じゃあ行こうか」

ニッコリ笑い平静を装って歩きだす。

その行き先で俺は更なる驚愕を得ることになるのだった。と、含
みを見せてみる。

驚愕が連続するというのは傲岸不遜を常に置く俺にとって非常に
屈辱的なことだ。

だからと当たり散らしたりはしないし、普段なら知らないなら調
べればいいとあっさり決断するのだが、今回その決断は適応されず
お蔵入りになる。調べようがないのだ。いや、たった一つだけあっ

だがそれは安易にしていることじゃない。

手段はあるのにそれが取れない歯痒い現状が苛立ちを加速させる。

「何なんだねさ一体」

いつもの軽口が出てくる余裕があることに安堵しつつ、二組の様子を伺う。

聞こえるもの、見えるものは他の教室と変わりなかった。

男子の騒々しい談笑や

女子の華やかな会話。昨日見たドラマやファッション誌、それからゲームや漫画の話がグループから聞こえて来る。

まるで何も起きていないかのように、平凡な日常が今日も繰り広げられていた。

そんな光景をひとしきり眺めて積もった心労を溜め息と共に吐き出す。

「俺にとっては非日常なんだがなあ」

「何が？」

不意に背後から声が掛かって振り返る。

「ハラオウン……で合ってたよな」

そこにいたのは昨日体育の時に初めて言葉を交わした少女。大海

に反射するように輝く金髪と人を惹き付ける魔性の輝きを放つルビ
ーの瞳が印象的な、いわゆる美少女。

「うん、そうだよ。きみはクレイ……だったよね」

「当たらずとも遠からずじゃなく大正解と言っておこう」

無意味な言い回しをしてハラオウンと向き合う。彼女は腕に三つ
の缶ジュースを抱えていた。

「……パシリ？」

この品行方正なブルジョア学校にもあったんだな。

「ち、違うよ。これは罰ゲームっていうもので、なのはもアリサも
そんなことしないよ」

なのは？ アリサ？ ま、いつか。どうせモブだろ。

それよりこの平々凡々な回答。

「なんだつまらん」

「クレイは何を期待しているの？」

「刺激と波乱とカオス」

「学校で求めるのじゃないよー！」

「テロとか？」

「そんなの求めるなんて絶対に駄目だから！」

「OK。なら核弾頭だな。三日待て」

「それ刺激と波乱越えて絶望しか残らないよね！ クレイ、道徳って理解してる！？ それに三日待てって、三日で用意できる代物じゃないよ！」

「何を言ってる。この国には核三原則があるじゃないか。『持つて、作って、ぶち込みまえ』キャッチフレーズは『困った時には核弾頭 皆にカオスをお届けしますっ』」

「非核三原則！ 法治国家を何だと思っているのクレイは！？ そんなキャッチフレーズ聞いたことないよ！」

「なら実現すればいいだけだ。任せろ。人心掌握は得意中の得意だ」

「任せないよ！ 絶対にクレイに国の未来は任せられないよ！ 人心掌握が得意ってどういうこと！？」

「こつこついうこと。現に今も一人手の平で躍らされている」

ニヤツと笑う。

「あ………」

ようやく気付いたハラオウンは病的なまでに白い肌ではない健康的な肌を真っ赤にさせた。

「うっもっ、クレイ！」

缶ジュースを持ってなかったらポカポカ叩かれていたかもしれない。もし相手がツンデレとかだったら、この状態から回し蹴りが放たれるだろう。甘いわね、私にはまだ足があんのよ、みたいなの？

適度なストレス発散をしたところで本題を切り出す。

「ところでハラオウン。ちょっと聞きたいことがあるんだが」

「……なに？」

弄られていたことに気付いたハラオウンは羞恥に頬を赤くしながら、拗ねたように返事をしてくれる。

「ゼロ・レオンハルトって名前の男なんだが、聞いたことないか？」

「ゼロ・レオンハルト？ うっん……………多分”ない”と思うよ」

やっぱり。

「そっか。ならいいんだ邪魔したな」

「うん。じゃあ」

俺は二組から離れ、ハラオウンは教室へ入って別れる。

自分のクラスの廊下まで歩いて、思わず窓から天を仰いだ。

「誰もあの男のことを覚えていないってどういうことだよ」

二組へ行つたのは確認のためだ。

クラスメイトはもちろん、はやてやすすかまでゼロ・レオンハルトという存在がいたことを忘れていた。

いや、忘れていたというよりは、初めから存在していなかったようにゼロ・レオンハルトに関する情報や歴史は別の情報を用いて修正されていたのだ。

人の記憶だけじゃない。授業中に風の精霊を飛ばして二組の教室を覗いたのだが、彼がクラスに在籍していたことすらも無くなっていた。

机やロッカー、名簿。なんにもかもが抹消されている。

同じクラス、同じ局で働くハラオウンならカケラくらいは残っているかとも思ったが結果は見ての通り。

「ここまで来ると自分が白昼夢を見ていた錯覚に陥るな」

自分で撒いた種がまさかこんなことになるとは。溜まらず自嘲だつてでてくるものだ。

小事なら自分が撒いた種でも無視してくれてやるのだが、この鬱々とした気分がいつまでも続くのは拒否しておきたい。

「……仕方ないか」

危険が伴うため最後の手段に位置付けていた方法を選ぶしかない。

気は進まないが、これじゃないと求める答えは手に入らないのだ。

俺は天乃川刹那との接触を決意すると踵を返して教室へ戻った。

お試し版7（前書き）

なのは「私、出番ないのかな？」

クレイ「おめでとう。Main Event? で、最初で最後の
会話」

なのは「え……? 終わり……?」

お試し版7

呼び出しはしなかった。お互い何の接点もないのだ。予めことを伝えておくのと相手に余裕を与えることになる。もし看破されると、動揺という感情が生まれず迷いの比較的少ない敵と戦わなければならない(端から戦う姿勢)。

俺は騎士を自称したことはない。真剣& a m p ;真っ向勝負なんて掲げないし、未知数の相手にそんな愚行は犯さない。

精神論や根性論なんて論外だ。

勝率は最大値まではいかなくともそれに近い状態を常に保ち続ける。ヒーローじゃないんだ。必要なら逃走して様子見も平然とできる。

校門に寄り掛かって天乃川刹那を待ちながら戦場を探す。最高の条件が揃った場所を。

風の精霊がある限り、この海鳴市に俺の目が届かないところなんてない。そこから近距離で、なおかつ人気のないところといえば……

思考を一度断ち切る。ようやく玄関から天乃川刹那が出て来た。

烏の濡れ場色のような髪と深いアメジストの切れ目。ゼロ・レオンハルトのようにつしりした体軀ではなく少し華奢な、俺と同じで着痩せするタイプだろうか。

連れがいないことにほっとした笑みを一つして、校門に近づく天乃川の前に立った。

「ちょっと付き合ってくれないか？ 大事な用があるんだ」

「大事な用？」

返ってきたのはレオンハルトのような邪険な声ではなく、純粹に疑問一色のもの。

「ああ。それに火急でもあるから良い返事がもらえるとありがたいんだが」

「………すまない。今日はそんな気分ではないんだ。できれば明日にしてみもらえないか？」

そういつて通り抜けようとする天乃川に囁く。

「ゼロ・レオンハルトについてなんだけど」

「!？」

驚愕に目を見開いた天乃川が勢いよく振り向いた。

確信。やはり覚えている。

「着いてきてくれるか？」

「………ああ」

声を低い同意を得た俺は踵を返して校門を抜ける。後ろから一瞬足りとも外れない敵意の視線に薄い笑みを浮かべながら戦場になるであろう場所へ向かった。

学校から数分の距離にある郊外の森。学校帰りに森林浴をするなんて奇特な趣味の持ち主でもなければ、まず近付かない打つつけの場所である。

まだ、何も言葉は交わさない。未だ背中を刺し続ける視線を飄々と受け流しながら森の奥へと分け入っていく。

妖魔の気配はない。算段を壊す可能性のある危険な獣の気配もない。いや、熊や猪なんて一刀の元に切り捨てられるんだが緋菜との約束で動物は殺せないのだ。お兄ちゃん約束護るよ。人間も広義に解釈すると動物だなんて言わないよ。

暫く足を進めると道が開けた。鬱蒼とした茂みや高々と聳え立つ木々のない斜面が十数メートルほど続いている。

ここまで来れば大丈夫か。

俺は数歩進むと足を止めて振り返った。

「さて、じゃあ大事な用についてだが」

「その前に」

強く言って天乃川は遮った。

「お前は転生者か？ それとも目撃者か？」

向こうから聞いてくれるとは手間が省けて助かる。

「俺もそれが知りたくてお前を呼んだんだよ。あの馬鹿から、転生者とか原作キャラとか意味不明な羅列を並べられて殺されそうになつて」

「それで振り返りにしたのか？」

「正当防衛だ」

嘘は言っていない。騙してはいるけど。

「どうやって？ あいつは技量こそなかったが、莫大な魔力と特殊能力を持っていたというのに」

「んなことはどうでもいいだろ」

見る機会無かったし。

「あの馬鹿は俺より弱かったから死んだ。それだけのことだ。お前だって転生者とやらを散々殺って来たんだろ」

「あのお喋り……」

憎らしげに顔を歪めて吐き捨てる。

自らの行いを悔いているのか、それとも暴露されたことに怒って

いるのか……おそらく両方か。

「で、とりあえずお前の持つてる情報を教えてほしいんだが？ 結果はどうあれ、そっちの同類が命を狙ってきたんだ。知る権利くらいはあると思うんだが」

「……少し待ってくれ」

そう答えると天乃川は目を逸らして何か考え込む仕種をする。

俺は内心舌打ちをする。

馬鹿と行動を共にしていたことからこの男も単純で扱いやすいんじゃないかと思っていたが、どうしてなかなか冷静だ。馬鹿の手綱を握っていたということか。

それに、発言と佇まいから天乃川は自らの才に自惚れはせず、質実に鍛練を重ねていたことは感じ取れる。たかが五、六年魔導師を続けたていどでは熟練者とは呼べても玄人とは呼ばれない。だがそれに通ずるだけの雰囲気はある。

何を考えているのか、とりあえずこっちが不利な状況に傾いたのは確かだ。

数十秒の間を置いて、天乃川は意を決したように口を開いた。

「条件がある」

「何だ」

げっ、と声が出そうになった。

「俺と戦ってくれ」

そう来るかよ。

天乃川刹那という男の人柄を理解する。

騎士道精神というか自らの矜持を持っているのだ。そして、おそらく覚悟も。そういった男の目をしている。そんな男に脅しは効かない。手足を斬り飛ばしたとしても、白状しないまま自決するだろう。矜持だけを残して。

それに冷静さが加わる。転生者……予測するならば、前世の記憶を引き継いでいる者か。それなら確かに精神年齢の高さから、落ち着いた物腰も頷ける。

答えを知るためには彼の条件を飲むことは必須になってしまった。

「理由は？ 敵討ち？」

「違う。ゼロの死はもう俺の中で整理できた」

なるほど。仲間だったが、それほど好きな奴でもなかったのか。

なら

「力を示してほしい。上から目線ですまないと思うが、ゼロを倒したお前の力を、俺にも見せてほしい」

瞬間、冷静だった天乃川の瞳に闘志が宿る。

風は吹いていないというのに、周囲の草木はざわめきの音を立てる。膨大な魔力が奔流したのだ。

「バルムンク」

俺に見せるように、自身の眼前に広げた右の手の平。その中指に嵌められた翡翠の指輪が煌めく。

すると奔流する魔力が収束し、強く鋭く練り上げられる。

対峙までしておきながら、冷や汗が流れる自分の心境に驚いた。

緊張。 歓喜。

「はは、最高だな」

まさか真つ向勝負に武者震いするなんて。

自分を客観的に評価すると、小細工、罾、ハメ技、騙し討ちなんかが非常に大好きな人間だ。自身がやるのは言うまでもないもないし、他人がしているのを見ても楽しくなるどころか助言までしてしまうそうだ。そして始末の悪いことに、他人が仕掛けた罾を鼻歌混じりに看破し、悔しげに嘆かせるのに至っては病み付きになるほどだった。

そんな俺が武者震いなんて本当に可笑しい。

だが、それもいい。

結局のところ俺は歓喜しているのだから別の感情で水を差す必要はない。

丁度良かったじゃないか。精霊術師の最高峰ハイエンドを自負する俺に市内を徘徊する妖魔は物足りない。天災規模の精霊数を制御する技術はあっても使う機会は訪れず、未だ自らの技量を肉眼で視認できていないのだ。

俺の期待に応えるように天乃川が結界を作動してくれる。

景色は変わらないが、分かる。俺と天乃川は常に在る世界から切り離された別の空間に立っているのだ。二人しかいない世界で、二人だけの戦争が開催される。

天乃川は一瞬で防護服バリアジャケットを装着した。白鎧と、籠手、黒のコートが合わさった奇妙な形の鎧。機動性と防御力を等しくさせているように感じる。

キーン　と高く澄んだ音と共に足元に出現した三角形の魔法陣、それはベルカ式である。

右手には漆黒の剣化したバルムンクと呼ばれたデバイス。その重さを確かめるように軽く一振り。

肺に溜まった濁った空気を一息で全て吐き出すと緩やかな動作で剣を構える。正眼に捉えた両手剣の切っ先が、ぴたりと俺に向けられる。相対距離はおよそ八メートル。身体に魔力強化を施したなら間合いの内と言っている。

開戦の合図はこちらでやっていいのだろう。

足元に落ちている手頃な石を拾って上に投げる。

「これが落ちたら　でいいな」

「ああ」

重量に従い落下する石を俺たちは見向きもせずに対峙し続ける。
頂点を認めれば、何秒後に地に着くかなんて誤差無しで予想できる。

三。

風の精霊に呼び掛ける。

二。

精霊が応えて召喚され、収束する。十、百、千と。

一。

願い、操る。奴を斬れ。

トン……。

一閃！　神速の刃が走る。地面が綺麗にスライスされて直進し、
触れるもの全てを鋭利に斬り裂く。

かわされた。

認めるよりも早く、それを理解していた俺は身体全体を包むように、莫大な風の精霊を凝縮させた。鎧とも結界とも言えるそれは蒼穹の如く澄み渡る。

そこに背後から横一文字に剣閃が走る。

回避の動作は必要ない。台風に匹敵するほどに凝縮した風の精霊を打ち破るにはパワーが足りない。

受け流され、ベクトルを狂わされ、重心を崩した天乃川の脇腹を殴る。振り向く際に生まれる身体の回転力とバネを乗せた強大な力が一点で炸裂し、天乃川は地面に転がる。防護服の上からじゃ大したダメージは与えられず、殴られた勢いで天乃川は距離を取った。

追撃に風の刃だが、シールドに阻まれる。

チッ。

これは風の精霊を使った術 風術の弱点だ。召喚速度、探索に優れる風術は引き替えに一撃の攻撃が弱い。

そもそも戦闘に特化されていないのだ。並の風術師なんてお粗末そのもので援護くらいしか取り柄がなく、ゆえに風術は非力やら下術と蔑まれている。それが精霊術師の常識とまで。

俺の風術は高層ビル程度なら輪切りくらいワケないのだが、それでも防御を重点に置いた魔導師や騎士のシールドを貫くのは簡単じ

やない。風の結界に回している分の精霊をいくらか攻撃に配置換えすれば実現可能だが、あの速力に魔力を持たない今の身体は反応できない以上、賭けはしない。

「速いな。音速レベルか」

本当に感心する。直感も優れている。知覚するより速くそれが作動して、風の刃の回避を可能にしたのだ。一瞬でも早ければ音速でも神速の攻撃は対処できる。

俺の素直な感想に、天乃川も笑みを一つして、

「フェイトもこれくらい、いやこれより速いさ。それよりお前のそれは一体何なんだ？ 魔力をまるで感じない攻撃なんて熟練の魔導師でも反応不可能だぞ」

「そんな一撃に反応するお前も何だろうな？ 冗談で済むレベルじゃないぞ、その直感力は」

「レアスキルのようなものさ。気にしなくていい」

「なら、俺のもレアスキルってことでいい」

天乃川は大人な対応をしてくれる。言い返すなり戦いに集中してくれた。

「ありがちな言葉で言わせてもらおう　行くぞ」

より多くの精霊を召喚して風の刃を形成する。百本を越える風の刃が、全包围から天乃川に襲い掛かった。同時攻撃ではなく、それ

らの全てが軌道とタイミングを、時には緩急も付けながら飛翔する。

「凄いな……」

天乃川は素直な声を漏らしてそれを観察した。どう動こうと、雨のように　しかもそれぞれが別の指向性を持って　降り注ぐ刃は、どれだけの速度を持ってしても回避不能だ。

なら、どうすればいいか。

天乃川は即座に決断した。

柄を逆手に持ち、魔力を練り上げた。収束した魔力は、ガシャンガシャンと剣が装填するような音を立てると更に膨れ上がる。

「カートリッジシステムか。いつの間に管理局は実践配備させたんだよ」

苦虫を噛むような顔をしてしまう。

カートリッジシステムは保有魔力の絶対量で劣るベルカの民が、自在に魔力を扱うために編み出した機構で、特殊な方法で圧縮した魔力を弾丸状のケースに内包し、デバイス内で炸裂されて魔力を瞬間的に高めるものだ。炸裂時の魔力の反動等の問題から、高いレベルで扱いきれる術者の絶対数は少なく、ゆえにベルカ式魔法は衰退していった。

局員であろう天乃川がそれを使っているということは、カートリッジシステムの不安要素のおおよそを排除できたのだろう。

天乃川は地面に剣を突き刺した。技が起動したことから、特定の動作で発動するアクショントリガーだ。

「爆碎ッ！」

言葉通り、突き刺した地面を中心に赤い光が炸裂する。

俺は即座に距離を取る。

足元の土を跡形もなく吹き飛ばす爆発は当然上にも広がり、空を翔けていた百の風の刃は抵抗も許されず焼き払われた。

「無茶苦茶だな……おい」

頬を引き攣らせながら、俺は風に乗って舞い上がる。

爆炎は広がり、肉眼で天乃川の姿を確認できないが風の流れを見ればまだ行動を始めていないことは分かる。物体が動けば風は自然と起きるのだから。

俺の攻撃可能射程距離は半径数百メートルを楽に越える。範囲に入っていれば、どの地点からでも攻撃を放てるのだ。

もう一度、先と同様に風の刃を形成する。仕留められるとは思わない。あくまで魔力や体力を削るための牽制だ。

爆炎を中心に風の刃の包囲が完了する。まだ放たない。解放するのは天乃川が空戦に持ち込んだ瞬間だ。

砲撃に備えて、大気密度を操り光の屈折率を変える。そうすれば

相手の視覚を狂わすことができ、命中率は大幅な下落へ繋がりがり回避が容易になるのだ。

ただ無策に上昇する愚かな振る舞いはせず、天乃川はタイミングをずらして直射型の砲撃を連射する牽制攻撃をしながら空の舞台へ上がって来た。

俺のいる空域に光条が殺到する。

しかし屈折率を変化させ、位置をずらしている俺を正確に射抜くことはできず、最低限の動きでかわしきる。

楽しい。ああ、そうだな。俺は楽しんでる。

才能という名の財宝を入れた宝箱を持つこの男は（昔はどうか知らないが）だからといって自らに溺れることなく財宝を丁寧に磨き上げれる大人の面を持っていた。黙々とそれを磨き続け、綺麗な財宝に更なる光沢を与えた結果が今、目の前にいる。

一手企てれば、それを看破して。二手、三手企てれば、やはり看破して。

俺と同じで、将棋やチェスなどボードゲームをする時のように、ありえるだろう可能性を常に頭に書き続けているのだ

こういう奴はそういない。思考と行動を同率で働かせる人間は。

だが 封殺完了だ。

不敵な笑みを浮かべて、停滞させていた風の刃を走らせる。

魔導師の基本魔法防御は四種類ある。

バリア。攻撃を防御膜で相殺して柔らかく受け止める汎用性の高い防御。

シールド。攻撃と相反する魔力で固く弾く、反らす防御。

フィールド。範囲内で発生する特殊効果の発生を阻害する防御。

物理装甲。素材強度による物理防御。

この四つの中で俺の放つ風の刃を防げるのは最も範囲の劣るシールドだけだ。フィールドは単発では弱いし、物理装甲も刃の一閃の前には紙切れ同然だ。バリアに至っては大気密度を操って魔力素を拡散させれば発動すら困難になる。

この戦いが面白いのは確かだが、本来の目的を見失うほど愚かではない。歓喜に震えようが、怒りに震えようが、何をすべきかだけは履き違えない。

天乃川は爆炎系の技を使った。魔力変換資質が炎熱だと踏んだ俺は天乃川が全力を出す前に静めることを決めた。

精霊だろうと魔法だろうと、風と炎は互角の力をぶつけ合えば必ず炎が勝利する。炎の持つ莫大なエネルギーは他の地や水さえも凌

駕するのだ。

だが、スピードは風が最速だ。先に召喚を始め、相手の力が収束されない内に攻撃すればいい。そのタイミングさえ読み切れれば敗北はありえない。

天乃川は飛翔するべきではなかった。範囲の小さいシールドに、上下左右あらゆる方向から襲い来る刃を防ぐのは不可能だ。

勝利は確定した。

が、それ自体に意味はない。天乃川は純粹な騎士として挑んできたのに対して、俺は自分が何か明かしていないのだから。始まる前からハンデは決定事項になっていたのだ。

「終わりだ」

徐々に対応しきれなくなり、風の刃に刻まれつつあった天乃川にそう告げた。

だが

お試し版8（前書き）

緋菜「おにーちゃん、何読んでるの？」

クレイ「ん？ バカテス」

緋菜「面白いの？」

クレイ「結構いけるかも。特に、語り部である主人公は成績悪いのにどうして地文では跋扈とか難しい言葉を知ってるのかなー、という謎が」

緋菜「……？ 楽しむところずれてないの？ んー？

お試し版⑧

パキイン！

唐突に、金属が割れるような音が森一帯にまで響き渡る。

は……？

確かに、勝利確定だと踏んだのは早計だったと認めよう。絶えず精霊術を発動していたためすっかり忘れていたが、精霊たちは天乃川刹那という存在を避けていたのだ。そんな男が常識範囲内の勝利に終わるはずがなかった。

だが　これは流石にないだろ。

風の刃による全包围攻撃が、その音と共に霧散した。掻き消されたと表現した方が正しいかもしれない。俺の意志に従っていた精霊が強制解除されて散っていく。

精霊術師の回路を持たない人間が精霊に干渉するなんて、そりゃあ精霊だって怯えるはずだ。世界の根源と謳われる精霊の理解の範疇すらも越えているのだから。

一瞬ですべての風刃を消滅させた天乃川は一旦行動を止めて視線を合わせてくる。

「お前、あの時神クレイか」

唐突に問われる。その質問の意味は聞き返すまでもないだろう。

”あの”時神クレイと言ったのだから。

「さあ、どうだろうな」

この男だって俺が求めた情報をタダで渡してくれないのに、俺が素直に肯定するわけがない。

だが、天乃川は問い掛ける前より確信していたらしく、

「時神クレイ 優れた知略に洗練された戦闘技術、新たな魔法の創造など卓越した才能を持ち、管理内世界において”最強”の魔導師と噂され、数々の勲章を授かったことから市民から英雄と讃えられた男」

「当然だな」

誇らしげに俺は頷く。

「だが、それは表向きの顔で、本性は局員からは悪魔やら鬼畜やら魔王やらと恐れられ、握った個人情報をも盾に上層部まで掌握しかけていたとんでもない悪党だった」

「それも当然だな」

更に誇らしげに頷く。

「局員で行われた『彼氏にたくないランキング』『憧れないランキング』『結婚したくないランキング』『何でこいつが美形なの？無駄なんですけどありえないんですけどチョーム力つくんですけどランキング』『上司にほしくないランキング』『部下にほしくないランキング』『同僚にほしくないランキング』『人として終わっているランキング』『市民よ、気付いて！ 奴は悪魔よランキング』

と、様々な負のランキングでぶっちぎりの一位を総なめにした鬼畜野郎と言われていた。奴がいる限り局内に平和は決して訪れない。我々は勇者が現れる瞬間まで耐え凌ごう　なんて適当に読みあさっていた雑誌に載ってあったが、本当なのか？」

「ああ。あの頃の俺は、市民の人気を上昇させつつ局の連中を如何に苦しめるかという人生ゲームに全身全霊を尽くしていたからな」

フ、若さ故の過ち。反省もしてなければ後悔もない。あるとすれば、それは名残惜しさ。

「何で市民に漏れない？」

「雑誌や人伝いで情報が外に出ないように脅し……ゴホン、話しあったりしていたからな。その情報も管理局のブラックボックスにあっただろ」

「お前の存在そのものも一緒にな」

英雄（市民評）を黒歴史にして封印するなんて人間のすることか嘆かわしい。

「百近く生み出した魔法つてのも」

「同員を苦しめ、俺が楽しむため”だけ”に創造した。犯罪者逮捕には一度たりとも使ったことはなかったはずだ。俺の矜持にかけて」

圧倒的な力を見せ付けると市民は最終的に応援してくれなくなるからな。強すぎると冷めやすいし。

いい感じに傷付いて接戦パターンを演じていれば、コロツと騙されてくれるんだよな。

俺の迷いなき断言に、天乃川は呆れたように肩を落とす。

「だから当時のことを聞こうとしたら皆、悲鳴を上げて逃げ出したのか」

「俺の労力は無事捻ってくれたようだな。恐怖を植え付けるのは数ある特技の中でも有力候補だったが、最の文字も追加するべきか」

「追加するなよ、そんな特技」

「安心しろよ。こっちの世界に来てから一度もそんなことはしていない」

おちよくりがいのある奴がないっていつのも一理だが。

「そうだよ。それが疑問だったんだ」

「ん？」

「時神クレイは今から約七年前、アンノウンと接触してそのまま行

方不明となった。彼の所属していた部隊も全滅し、真相は今も闇に包まれたまま」

「そんなこともあったな」

生返事をして、乱れ邪魔になった髪を払いのける。

「教えてくれるのは 虫がいいと言うものか」

「当たり前だ。阿呆め」

遵法精神なんて逆さに振っても出てこない俺が対価も無しに知識を授けるわけがない。

ここで一度尋ねてみる。さっきの全方位多重攻撃で決めたつもりだったので、戦意が若干冷めつつあった。

「で、力を示せてことだった。もう充分じゃないか」

しかし天乃川はかぶりを振った。

「せっかくだから決着をつけたいと思うんだが」

「最初に掲示した条件を覆すつもりか？」

「いいだろ。ここ最近滅多になかった接戦が展開されそうなんだ」

鋭い目の下にある口角が吊り上がる。

「このバトル中毒者が……」

気怠げに吐き捨てて、再度意志の力で精霊を召喚させると、その気配を察知した天乃川も剣化したデバイスを構えた。

「相性は最悪だが、それがいい」

なんて言ってる。

ベルカ式はクロスレンジからミドルレンジに特化された術式ゆえにロングレンジとアウトレンジに対応する術を殆ど持たない。

そして俺の主な戦闘距離はロングレンジとアウトレンジだ。一撃の威力は収束砲撃に遠く及ばないものの、キョ範囲の射程距離それも範囲内ならどの位置からでも指向性を持った攻撃を放てる。

両極な俺たち。なら相手の土俵で戦うのは愚行だ。

如何に戦いの主導権を握り、自らの攻撃が最大限に活かせる状態を維持して初めて勝機が見えてくる。天乃川の実力はクロスレンジとミドルレンジで真価が発揮されるだろうが、この勝負で披露させるつもりはない。

さっきの砲撃はロングレンジに対応していたので、次からはアウトレンジを中心に戦いを展開させる。

一体どうやって風の刃を消滅させたのか、見極める必要がある。

牽制攻撃を放ちながら距離を取ろうと風の刃を形成していると、

「んむ?」

風を扱う精霊術師の俺に、風の精霊が教えてくれる。

「どうした？」

天乃川が聞いてきた。

「街の方角から結界に気付いて近付いてくる奴がいる」

「やっぱり感知されたか。初めは軽く戦うつもりだったからすぐに解除すれば問題ないと思ったんだが」

「自業自得だな」

丁度いい。戦意は持ち直せてないんだ。

「勝負はお預けだな。力は示したからしっかり教えてもらおうぞ。騎士さん」

「く……分かった」

立場が逆転する。天乃川とは対照の愉快的な笑みを浮かべて俺は姿を消した。

「せっかくだからどんな言い訳をするか見届けてやるう」

そして弄ってやる。

「ちなみに相手はハラオウンだぞ」

「……そんなことまでできるのか」

「大気を操る俺に透明化なんてお手の物だ」

姿を消したというのは現場から遠ざかったのではなく、言葉通りの意味のまま。光の屈折率をいじれば対象を透明化させることもできるのだ。

「打破するには？」

「教えるわけないだろ」

サーチされれば即バレだが。

「ほら、くるぞ」

それだけ言って口を噤む。

俺の宣言通り、数秒の間を置いてハラオウンが空を駆けて天乃川と対面した。

彼女の手にはデバイスであろう黒の戦斧が握られており、いつもは真っ直ぐに流れている金色の長髪は左右に分けられていた。中等部が上がってダサくなったと一部から囁かれている平凡な制服も、黒の制服の上に白のマントを羽織った防護服へ姿を変えている。

……六年前に着ていた黒のレオタードに黒のマントという、自分はMです露出狂です私を見てー！ な衣装は流石に自重なされたか。

「刹那」

「F・セイエイ（ボソツ）」と、天乃川にだけ聞こえる位置に移動して茶々を入れる俺。ちなみにF・セイエイの元はfrom・聖永だったか

「黙っててくれ（ボソツ）」

「どうして結界を張ってるの？何かあった？」

「人を襲ってましたのー（ボソツ）」俺。

「クツ……。ちょ、ちょっと異変を感じて調べていたんだ」

「えー？まーじーでー？（ボソツ）」俺。

「異変？」

「胃、変？胃薬いる？持ってないけどねー（ボソツ）」俺。

「……（ピキ）！だが、誤解だったようだ……！調べてみたが何もなかったよ」

「五階で誤解を五回した（ボソツ）」俺。

「その割には凄く険しい顔をしてるよ。まるで激しい怒りを無理矢理押し殺しているみたい。やっぱり何かあったんじゃない？」

「その割には凄く険しい顔をしてるよ。まるでハゲしい頭を無理矢理隠し通しているみたい。やっぱり頭皮に何かあったんじゃない？（ツルリン）」俺

「ブチッ！」

おや？

斬ッ！

聞こえてくる声の方向から位置を割り出した天乃川は本気の殺意を宿した剣を振り下ろしてきた。

バシィィ！ と神業を発揮する俺。真剣白刃取り（風の精霊を集める時間がなかったため実はかなり危なかった）。

「何をする。危ないじゃないか」

「ああ、そうか。どうせならカートリッジも追加しておくべきだったな」

「さすがにそれは身体が左右に分裂するぞ」

「そのつもりでやったんだがな……!!」

「軽いジョークじゃないか。サラッと聞き流せよ」

「お前が局員全体から嫌われている意味がよく分かったよ」

「甘いな。以前の俺は更に魔法や畏も同時発動させていた」

「なお悪いだろうがッ！」

天乃川の手に力が籠り、剣が徐々に近付いてくる。その間に風の精霊を集めて風の結界を作って受け流すことに成功した。

危ない危ない。

距離を取って事なきを得る。まだだ！ まだやられんよ！

「ク、クレイ!?!」

「ん？ あ、姿見えてる」

ハラオウンの驚愕した声で気付く。どうやら天乃川の奔流した魔力に風の精霊が流されたようだ。

「どうしてクレイがここに!?!」

「あ、えー……あ、天乃川くんに呼び出されて！ いきなりガバツて襲われたんだ！ 僕はやめてくれて言ったのに天乃川くんは僕の穴にゴールデンボールが装填された巨砲を突っ込んで収束砲撃を

「嘘をつくな!?!」

「ん。下ネタは自重すべきだな」

素直に被った猫を脱ぎ捨てる。

天乃川は怒りに顔を赤くしていたが、ハラオウンは複数のナニが混ざっているような表情もあった。ナニがナニとは敢えて言うまい。

「クレイと会ってまだ全然時間が経ってないけど、人となりは大部分把握できたよ」

「俺もだ」

「そんなハッキリと質実剛健なんて言うなよ。照れたらどうする」

「いや、誰もそんなこと言ってないから!」

「分かってる。だから一々全力でツツコミいれんでいいぞ。おかゆみたいなツツコミで充分だ」

「どうすればいいフェイト。俺、今まで生きてきてここまで殺意を抱いた相手は初めてなんだが」

「人の神経を逆なでするのが凄く上手いんだよ、きっと。私も同じ気持ちだから」

「物騒な。局員が市民に向かって口にする言葉じゃないぞ」

「やれやれ。最近の管理局は教育がなっていないな。」

「もしお前に逮捕状が出たら真っ先に捕まえに行つてやる」

「俺がそんなへマをするわけないだろ。完全犯罪しかやらん」

「認めた! 犯罪をしたことを認めたよこの人!」

「残念、ハラオウン。証拠がありません。口から出まかせ言ってるかもしれないぜ」

「逆に俺たちが今こいつを完全犯罪で殺ったほうが世のため人のためじゃないか？ 明らかに他の犯罪者より凶悪な感じがするんだが」

「それは否定できんな。昔はよく悪意の塊と言われたもんだ」

「自分で認めた！」

「俺の話はもういいだろ。どう頑張ったってどうにもならないってそれより話を進めよう」

「流す理由が最悪だな。まあ、確かに納得できるけど」

「だろ。だから、吐け。そして一秒でも早く俺を帰らせる」

緋菜に会いたい緋菜に会いたい緋菜に会いたい。

いつもならもう帰宅して緋菜を全力で愛でているから禁断症状が現れそうだ。色んな奴から外道だ悪魔だ魔王だと呼ばれているが、あの子の前ではそんな要素はカケラもないぞ。シスコン素で全て塗り潰すから。

「何の話？ 私、まだ色々状況が飲み込めてないんだけど」

ハラオウンが純粹無垢な瞳をして小首を傾げた。

「なら空気になってる。すぐ終わる」

一刀両断に切り捨てる。俺が不意にときめくのは緋菜だけだ。

「酷いよ！」なんて泣きそうなハラオウンは置いて天乃川と向き合う。

「本当に知りたいのか？ 知らずに過ごしていれば転生者から無意味に命を狙われるなんてことはないと思うぞ」

「こつちも事情があんだよ。それに狙われたら返り討ちにするから問題ない」

精霊術師として、なぜ転生者と呼ばれる存在に精霊が敬遠しているのか、その理由くらいは知っておきたい。知的探究心から、莫大な魔力、ありえないレアスキルなど常軌を逸した彼らが果たして何者なのかも。

それに知っておけば、もしも場合の選択肢だつて増える。あの子を護るためにも、不安要素は排除しておきたい。ロリコンなんて出てきた日には 想像しただけで殺戮衝動が止まらない。

天乃川は何処か思い詰めた表情を浮かべて逡巡するが、意を決したように息を吐くと悠然とした様で口を開く。

「俺やゼロは元々は別世界の、いわゆる平行世界と呼ばれる場所の住人だつた」

「刹那、何を言って」

「

スツと手でハラオウンを制止させる。

「続ける」

「そこで俺たちは一度死を迎えた。子供を庇ったり、自殺だったり、殺されたり」

ん？

「何で三通りもある。お前たち二人じゃないのか」

「ああ。最初は数十人くらいいた。今となつては俺で最後だがな。一度死んだ。」

転生者。

このキーワードで大体の予想は立てられる。

「そして死んだ俺たちはその時の記憶を受け継いだままこっちの世界に転生した。赤子からだったり当時のままの姿だったり幼児化したり」

「原作というのは？」

そう問い掛けると、天乃川は居心地の悪そうな視線をハラオウンへ向ける。本人は「？」と少し間抜け面だが。

「俺のいた世界で、こっちの世界は個人が作り出した創作物だった。つまり漫画やアニメの世界に転生したんだ」

「は？ 頭は確かか？」

「嘘じゃない。それに、そう考える以外に原作キャラという言葉で仮説とか立てられるか？」

「……………」

俺はかぶりを振った。短時間で仮説を立てられる問題じゃない。

ゼロ・レオンハルトは原作キャラと接触した俺を殺そうとした。つまり俺はその原作に存在していなかったのだらう。そして俺と友好的関係を築いたのは八神はやたと月村すずかの二人。この二人のうちどちらか、もしくは二人ともが原作キャラということ。天乃川の態度からハラウンも原作キャラだな。

未来が分かっているかのよう　確か保健室ではやてがそんなことを言っていた。既に漫画やアニメで展開を知っていれば、先回りすることも可能、か。

なら、この世界は一体何なのか。その疑問は置いておく。これは一瞬でいくつも仮説が立ってしまった。

「転生した奴は皆、お前みたいな人知を超越した能力を持っていたのか？」

「ああ。時間を止めたり、未来を読んだり、他の漫画とかに出てきたような技を使えたり、能力だけ見ればSSSランクに相当する連中ばかりだった。だが皆死んだ」

「殺し合ったんだろ、どうせ」

「……………ああ」

重苦しく、天乃川は首肯した。

理解はできないが理由は分かる。

自分が大好きな漫画の世界に生まれ変わって、大好きなキャラクターたちと出会って、その物語を実際に目の当たりにできて。それはさぞ幸せなことだろう。

力があれば時には共に戦って、助けて、気に食わない展開は揶揄げて、あまつさえそのキャラクターから恋愛感情を向けられたりして。そういうのにヒーローのような存在に憧れて。

別に悪いことじゃない。理由はどうあれ、その世界に生まれたのなら自分の行動や未来は自分に決定権がある。BAD ENDが原作なら、それをHAPPY ENDに変えるのも自由だ。

だが その自由や憧れが愚かな結果を招いた。

自分と同じ存在が他にもいた。

それもたくさん。

その中には既に自分が望んでいた輪に属していた者もいて、好きなキャラと親密な関係を築きつつあった者もいて。そこから嫉妬と憎しみが生まれる。

それが刃に変わり、自らの欲を優先して他者を傷付けて殺す。自分こそがそこにあるべき存在だと主張して。

そうした結果、転生者たちは手を取り合うことをせず殺し合って、最後の最後まで妥協する手段を取れなかった。

「お前もその一人だったわけか」

「愚かだったんだ。本当に愚かだったんだ。退屈な日常が一気に非日常に変わって、好きだったアニメの世界に行けて舞い上がったんだ。救いたい関わりたくないなんて醜い劣情の混じった思いで原作に介入して、知ったかぶった知識を開かして　その結果、むしろ気味悪がられて裏目だったがな」

口角を吊り上げて自嘲の笑みを漏らす天乃川は何もかもが飽和しきったかのような、そこには一切の感情もなかった。

「ゼロ・レオンハルトが逆上した理由にそれが」

「こんなことなら力なんて与えられなければよかったんだ……。退屈な日常がどれだけ綺麗だったかを思い知らされて」

「与えられた？　誰に、いつ？」

偶然じゃなく、誰か手招きをする黒幕がいたというわけか。

「転生する瞬間だ。そいつは好きな能力を複数持たせてくれて、更に顔の造りも自由に変更可能にしてくれた」

「そいつは一体何だ」

「それは……」

天乃川は言葉を濁して視線をさ迷わせる。

ここまでできてそんないい加減なことが許せるものか。無理矢理目を合わせて訴える。

言え、と。

天乃川はグツと喉を詰まらせた後、それはともう一度口にして、

「か」

その先を聞くことは不可能だった。

「え………？」

横から、ハラオウンのそんな素っ頓狂な声が耳朵を打つ。

さっきまでそこにあつたものがなくなった。

さっきまでそこにあつたものがなくなっていた。

さっきまで首に乗っていた天乃川の頭がなくなっていた。

言葉を紡ごうとしたその口は頭部一緒に宙を舞って、クルクルと赤い液体をスプリングクラのように降らせている。

そして、思い出したように切られた首から循環していた血液が噴水のように吹き出る。

シャー、と。まるでシャワー感覚に。

「あ……ああ……あ……！」

「伏せる！」

蒼白の顔。身体を硬直させて動けなくなってしまったハラオウンの身体を強引に掴んで抱き寄せると、即座に身体の上下を反転させて頭から森へ突っ込む。

一瞬遅れて、ゆっくりと重力のままに落ちていく天乃川の頭と身体が攻撃を受けて砕け散った。

その肉片が、鮮血が、降り懸かるうとする。

風の精霊を召喚して受け流す。そして即座に風の精霊を使った捜索範囲を最高まで引き上げる。

「くそ、また俺が気付けない攻撃だ……！ 転生者はあいつで最後じゃなかったのか!？」

まるで手玉に取られたようで、非常に不愉快な屈辱が支配する。

数々の非常識が積み重なって遂に爆発してしまった。

こいつ 絶対殺してやる！

俺だって堪忍袋の緒は切れる。この鬱憤、この苛立ちは攻撃を仕掛けてきた奴の死で晴らさせてもらう。

苦虫を噛んだ表情を消せないまま、地面に落ちるスレスレでカーブして、地面と平行をキープしたまま森を降りて一番近く、人気の

ない自分たちの学校の校舎裏で停止した。

幸い攻撃は襲ってこなかった。天乃川一人を狙った犯行だったのか、とにかく助かったと思うのが筋だな。

ハラオウンを離して、地べたに腰を降ろす。

「一体何だっというんだ……」

一気に疲労が全身にのしかかった。意志を保ち続けなくなり、精霊の使役も不可能になる。風の精霊という中継が消えて世界が急激に狭まり、とうとう肉眼でしか世界を確認できなくなってしまった。

その視界にある唯一の人物はなおも顔色をなくしてへたりこんでいる。

「大丈夫ですかー」

「……………」

反応なし。

当然といえば当然か。どんな間柄だったかは分からないが、昔馴染みの同僚だったのは言葉から推察できる。共に戦った仲間が目の前で首を跳ねられ、矢継ぎ早に肉片に変えられたのだから悄然するのも無理はない。

それに唐突の惨劇だ。理性的に受け止めて状況の整理をするなど、十五の小娘があっさり取れる行動じゃない。

逆に俺は普通に冷静だ。精霊術師（以前は魔導師）という生業上、人の死に多く立ち会っている。それに慣れた俺が出会ったばかりの者に一々感情移入なんてするわけがない。

「風の制御が消える前に、奴の気配は掴んだ……。明日にでも狩るか」

逃げ切ったつもりかもしれないが、風の精霊が天乃川を殺った存在の気配を一握りていどながら掴んでくれた。一日休んで全快した状態なら感知できる。

いつから俺と天乃川の戦いを見ていたのか分からないが、ジョーカーはまだ切ってない。

散々意味不明な力を振り回されて溜まった鬱憤は晴らさせてもらう。

「さて、そうと決まったら帰って緋菜を愛でよう！」

消費した力を全快するにはお緋菜様を愛でて愛でて愛でて愛でまくるしかない。あのほんわかとした空気を堪能しなければ精神は回復しないのだ。

テヘーッと笑みを零して回れ右。

お兄ちゃん、今帰るよ！

「ま、待って！」

えー？ 空気読みなさいよ。俺、すっかり気持ち切り替えて帰宅

して至福の時を過ごすつもりだったのに何でやねん。

げんなりして振り向くと、まだ悄然とした調子が抜けないハラオウンがよろよると立ち上がる。

「……………何？」

「一体何が起こったの？ 刹那は……………」

「死んだろ。お前だって見たはずだ」

「！」

突き付けられた現実に言葉を詰まらせる。知っているはずなのに、一縷の希望にしがみつこうとするから。

「冷めてるんだね……………」

「どうでもいい人間の命はどうでもいいと切り捨てられる人種でね。で、もう帰っていいか」

「まだ」

強い口調のハラオウンに、俺は辟易の溜め息を着く。

「何が起こっているのか、その情報はクレイのほづが多いでしょ？
クレイの使っていた力も含めて色々聞きたいことがある 任意
同行してほしい」

「却下」

「お願いだから言うことを聞いて」

「任意って言葉の意味理解してんのか？ その手にある戦斧を使ったら、上っ面だけの言葉しか吐けない信頼性ゼロの人間に成り下がるぞ」

俺は皮肉の笑みを浮かべて、悔しげに顔を歪ませたハラオウンを はつきりと見下ろす。

そして数秒後、

「なんて言ったりしてな」

コロツと表情を変える。

「え？」

「無理なんだよ。お前が俺にそんな権利を持ち出す理由なんてどこにもない」

「何を言ってるの。刹那が殺されて」

「どうせいなくなってるよ」

「……どういう意味？ いなくなってるって何？」

「今日でも明日でもいいから『天乃川刹那って知ってる？』的な質問をクラスメイトにしてみなさいな。多分 誰も覚えてないよ」

そう言って歩き出す。いちいち質問に答えていたら切りがないし、そんな労力もやる気も残ってはいない。つーか、そもそも答える義理がない。

ハラオウンが後ろから制止の声と行動の音がしたが、突風（これくらいなら何とか可能だった）を起こし砂を巻き上げて、その隙に離脱する。

おっと、買物に行かんと……今日は出前でいいか。

前作9（前書き）

ずっと俺のターン

前作9

俺のターン。帰宅。疾走。緋菜発見。ダイレクトアタック。ぎゅ
っ。

「ただいま緋菜。お兄ちゃん帰ってきましたよ！」

「んー。おにーちゃん、今日は遅かったね。どうしたの?」

「モンハンのキャッチフレーズが如く、人狩り行こうぜっ、をやっ
てた」

「一狩り?」

「んーん。人狩り」

あながち間違いではあるまい。

「でも失敗したんだ。なんか途中から色々湧いてでてね、撤退せざるをえなかったんだよ」

悔しいです、と緋菜を愛でまわす。それにしても本当に緋菜って身長小さいし華奢だな。

「おにーちゃんが珍しいね。最近戦っていなかったからかな」

コクツと緋菜が小首を傾げる。大きな碧眼が揺れて煌めき、俺は

緋菜を強く抱きしめた。可愛いもん。

「そだねー。精霊術師になってから得意の戦いかたなんてできなくなっただし、妖魔も話にならないレベルばかりだったから総合的に鈍ってるのは否めないよねー」

魔導師だった頃の俺は刀剣と魔力強化の施したミドルレンジで相手を圧倒していた。クロスレンジじゃないのは刀剣の長さと多彩な魔法を扱えるから。

今の俺は全く戦法が違う。現理論では精霊を自らの意志で有機物に干渉させるのは不可能なのだ。水術師は水の精霊さえあれば中空で水を生み出すことは造作もないが、体内の水分を操ることはできない。だから身体強化も施せず超速戦闘もできない。

帯刀すれば面倒臭いことになるから刀も持ち運び不可。もう、できないことばかりだね！ 警察滅ぼしちゃうおっか。

「おにーちゃん？」

「ん。何でもないよ。緋菜大好きっ」

「んー。緋菜も！」

……………くのやろーっ。

癒しだね、癒しだよ、癒しですな。

もう、溜まった疲れが一気に浄化されたよ。闇に染まった俺の心（自覚あり）に聖なる光が舞い降りたね。

緋菜を抱き上げて、ソファに腰を降ろす。

いつものように膝の上に乗せて、弾力のある柔らかい頬をつんつんしながら問い掛ける。

「今日宿題は？」

「む。おにーちゃん、毎日聞いてくる」

不服そうに頬が膨らむが、俺が指先でつんつんしていたので一瞬でぷひゅつと口から空気が漏れた。

「聞かないと緋菜は隠し通して宿題やらないでしょ。お兄ちゃんには『緋菜の学校には宿題はないの』なんて嘘ついて、先生から『妹さんが宿題を全くしてくれないのですが』なんて連絡がきたときはびっくりしたんだよ」

緋菜から宿題がないと聞いた当初は不信に思いながらも領いて納得したのだが、蓋を開けて見ると緋菜は嘘をついていた。週二のペーイスで宿題は出されていたのだ。

教育熱心というわけじゃないが、だからと（知ってしまった以上）スルーするわけにもいかない。勉強について甘やかすのは育児放棄だ。

「うっ」

「そんなに勉強嫌いなのか？」

「ん」

緋菜はコクツと頷いた。

「おにーちゃんは嫌いじゃないの？」

「お兄ちゃん、頭いいから」

より強力な精霊術を使うには強い意志と精霊が送り込んでくる情報の奔流を的確に処理する必要がある（もちろん才能も必須）。風術はその技量が顕著に出る。探索に優れた風術は術者の脳が処理できる範囲全ての事象を同時に知覚することだつて不可能じゃないのだ。

ゆえに風術を扱う者に必須とされるのは柔軟な思考回路。物事の真理を見抜き、ときには隠し、自在に操る。

優秀な風術師は総じて才能と明晰な頭脳が伴っているのだ。

「そもそも局員だつた時代では散々狡猾な罫で同じ局員を苦しめていたんだから、学校の授業なんて朝飯前だよ。数学や物理なんて全世界共通のものはとっくに修学済みだし」

問題はこの世界の歴史とか古文なんだが、教師の話聞けば大抵は分かる。

「むー。羨ましい」

「ちゃんと先生の話聞いて、板書されたものを要領良くノートに纏めて、予習復習をしておけば自然と頭もよくなるよ。宿題なんて付属品だよ」

「おにーちゃん。それができなくてやりたいとも思わないからお馬鹿さんがいっぱいいるの」

「緋菜みたいなの？」

「緋菜馬鹿じゃないもんっ」

「2×9＝（にく）？」

「？ 緋菜はお肉よりケーキのほうが好き」

昨日とまるで同じ答えを。

「あはは、じゃあ緋菜はお馬鹿様だね」

「うー。何も変わってない」

「丁寧語が加わってより一層強調されたよ」

「酷くなったの？」

俺は満面の笑みで、深く頷いた。

「うん！」

「むー！ むー！」

密着状態から器用に身体を反転させた緋菜は向かい合った俺に膨れっ面を見せて、俺の首元に後頭部を押し付けてぐりぐりしてきた。

頭突きがしたかったのだが、手前でそんなことしたくないと思って、結果そうなったのだろう。緋菜のことなら何でもわかります。

「よちよち。いい子だから落ち着いて」

そんなご立派な緋菜をギュツと抱きしめ行動を制止させると、頭を撫でながらそう優しく述べる。

「緋菜、子供じゃないもん……」

そうは言いながらも心地好さげな吐息が耳朶を打った。

「そういう台詞を言ってる内は、まだまだ子供だよ」

「言わなかったら大人なの？」

「一概には言えないよ。でも敢えて言うなら、多くの人に頼られるようになれば大人の仲間入りじゃないかな」

「一概？」

「細かい違いを無視して判断することだよ」

「ん〜……難しい」

頭を捻って必死に考えている緋菜を見て、クスツと笑う。

「焦らなくていいよ、緋菜。まだ九年しか生きてないきみが子供なのは当たり前のことなんだ。ゆっくり知っていけばいい。大人になるために必要なものは、自然と過ごしていれば自然と身につくもの

だから」

「……ん」

きつと言葉の真意が全て伝わってはいない。でもそれでいい。焦って何もかも理解しようとするのは成長の妨げになる。

まだ甘えても我が儘を言っても全然構わない。子供に一番必要なのは、きつと愛されているという自覚だから。そうしながら家族の背中を見て確固たる自分を築いていく。大人というのはそれを築き上げた人間のことを言うはずだ。

「おにーちゃん」

「ん？」

「頭、なでなでして……」

俺はもう一度満足げに笑みを浮かべて、

「了解」

膝に頭を乗せて仰向けになって寝転んでいる緋菜は食後ということもあってか少しうとうとしている。両手に持っている読書中の本は胸元に伏せられているが、内容が面白いのかハツとしたように目

を見開いて再読を開始する。しかしすぐにうとうととして本は胸元へ伏せられる。さつきからずっと繰り返し返していた。

そんな緋菜の頬を撫でながら、放送されているドラマを漠然と眺めているとガラス張りのテーブルに置いた携帯電話が鳴り出した。

その音に、うとうととしていた緋菜が「にゅ」と反応する。閉じかけていた目を開いて本を読み出した。

やんわり笑って携帯を取って開く。見たことのない電話番号だった。

一瞬出ようか出まいか逡巡したが、結果出ることにしてボタンを押す。

「もしもし」

『あ、クレイ？』

「人違いです」

キツパリと述べて通話を切った。

しかし間を置かずして再び携帯は鳴り出す。

チツ。

「もしもし。私の名前はクリムゾン田中四世Mk - 2改ですが？」

何かパツと出てきた単語を繋げてみた。

騙されないかな？

『クレイでしょ！』

騙されなかったかー。しかも怒ってるぜよー。

これはもう油を注ぐしかないじゃないか。

「俺がクレイだという証拠はどこにある？」

『しよ、証拠？』

「そうだ。どうしてお前は顔も確認してないのに俺をクレイと断定した？ 声が少し似ているお茶目な少年な可能性も否定できまい」
分かってやってるけど、これ言われたらかなりムカつくな。

事実、怒気を孕んだ呼吸が受話器越しから伝わった。

『……はやてから聞いたんだけど？』

「はやてという人物が嘘を付いたかもしれないな」

『はやてはそんなことしない！ とは言い切れないけど』

流石だよ、はやて。言い切れないんだって。

「大方、慌てふためいてかけ直してくるお前を楽しもうという魂胆だな」

『じゃあ本当にクレイじゃないってこと？』

「ああ。弟のフレイヤ丸だ」

やばい笑いそう。誰だよフレイヤ丸って。

『クレイに弟がいたの？ 妹がいるのははやてから聞いてたけど』

「俺、兄貴の影武者だから……」

声のトーンを落として現実味を見せる。受話器から息を呑む声が
耳朶を打ったが まさか本気で信じているとは。

『影……武者……？』

「言葉通りだよ。兄貴はほら、性格的に色んな人から敬遠されがち
でたまに陰湿な嫌がらせを受けるんだ。そういう時に限って俺が兄
貴と入れ代わってその嫌がらせを……」

『そんなことが。で、でもどうしてフレイヤ丸は』

吹きそう……！

『 それを受け入れているの！？ 嫌なことは嫌だって言うべき
だよ！』

「む、無理だよ。時神家の後継ぎは兄貴で、俺は万が一があった場
合の代用品なんだ。兄貴のために存在することでは、俺に価値な
んて」

『違う！ それはフレイヤ丸が自分の家の世界だけに縛られているからで、本当の世界はもつともつと広いんだよ！ そこでなら貴方だって自分のために生きていける！』

「ハ、ハラウオンさん……！」

「大丈夫だよ。ちゃんと自分の気持ちを家族の人達に伝えれば、きっと分かってくれるから」

「わ、分かりました。僕、ちゃんと真実を伝えます！」 ハラウオン”さんに！”

「え？ 私じゃないよ。クレイたちに」

「いいえ、ハラウオンさんに伝えなければいけないんです。実は僕……僕……！」

感極まったような涙声を、一気に氷点下まで下げて、

「クレイというオチでした」

「え？」

ピシリ！ 時が硬直した音が聞こえた。

長い沈黙が訪れる。ハラウオンは状況が理解できてないのか息遣いも止まっていた。

ずっと爆笑するのを堪えていた俺は寝転がり、受話器を離して声

を殺した笑いを上げる。ちよつとしたお茶目がここまで面白くなるとは。

「おにーちゃん、どうしたの？」

また眠そうな目になった緋菜が俺の上に寝そべって抱き着いてきた。

「んー？　ちよつと緋菜並みに騙されやすい女の子をおちよくつてたんだ」

「むー。緋菜騙されやすすくないもん……」

睡魔も限界に来ていたのか声に迫力（元々舌足らずな口調の緋菜に迫力なんかないけど）がない。むしろ甘えたそうに頬擦りなんかしてきたので、空いている左腕で緋菜を抱きしめて頭を撫でてあげた。

「にゆう……」

心地好さそうな声を上げるととうとう緋菜は眠りについた。この子の寝付きの早さは尋常じゃない。

笑いも落ち着いたきたところで受話器を耳に添える。まだ返事がこないのて緋菜を撫で撫でして至福の時を過ごしていると、

『……クレイ？』

「おーいえす」

『さっきまで私が励ましていたお方はクレイ……?』

「おーいえす」

『冗談じゃなくて?』

「おーいえす」

『二重人格って』

「違う! それはフレイヤ丸が自分の家の世界だけに縛られているからで、本当の世界はもっともっと広いんだよ! そこでなら貴方だって自分のために生きていける!」だったか?」

『……………!』

ハラオウンが羞恥のあまり顔を真っ赤にさせる様子が簡単に想像できた。

一生懸命自分の気持ちを伝えた相手が、実はでっちあげで空回りの挙げ句、その一部始終をずっと聞かれていたのだから当然とも言えるが。我ながらあくどいぜ。

にやにやしながら様子を伺っていると、

『う……………あ……………うう……………』

か細い、震えるような声を上げて、

『うばぁぁぁぁぁー……っ……!』

漫画の世界ですら聞いたことのない奇声を豪快に放ちながら通話が切れた。

「おちよくりすぎたか？」

局にいた頃の悪戯に比べると全然可愛いレベルだったんだが。

暫く緋菜の写った待ち受け画面を眺めて様子を見ても再度電話が掛かってくることはなかった。

「何を伝えたかったのかは分かっていたけど……結局それ言わずにおちよくられただけって面白いな」

携帯を閉じてテーブルの上に置き、両手で緋菜を抱きしめて起き上がる。

お眠り中の緋菜は俺が抱きしめている限り大音量の音楽が流れようと微動だにしない。天使のような、いや、天使すら上回る、比較対象が存在しない可愛らしい寝顔は簡単に崩れないのだ。

頭を撫で撫で〜としつつ、このリビングルームにある階段を上がって寝室のドアを開ける。

寝室にはキングサイズのベッドが大半を占めて、クローゼットに小型テレビと小型冷蔵庫くらいしか設備はない。俺と緋菜の二人ともが大きいベッドを求めた結果、それくらいしか入らなくなったのだ。

幽寂な色の布団を捲って緋菜を寝かすと俺も続いてその中に入る。

暑くもなく寒くもない丁度な温度。収納してある扇風機を出そう
と思っていたが、繰り越していいだろう。

時間帯はまだ十時すら越えていないが、普段から緋菜と一緒に寝
ている俺はすんなりと眠れる。一息着いてから、緋菜に腕枕をして
抱き寄せるで、ゆっくりと目を閉じる。

明日は狩りだ。

確実に仕留める。

フェイト・T・ハラウンは怒りを腹の内に抱えて廊下を歩いていた。執務官という立場上、感情の制御に心得のある彼女はその怒りを他の者に曝すなんて愚行はしない。表面上はいつも通りの表情を貼付けて目的地へ向かう。

(全くもう、本当にクレイは、もう)

思い返すと怒りという烈火に油が注ぎ込まれる。

その人物がのうのうと出現したら一瞬で戦斧を振り下ろしてしま
いそうだ。

昨日、フェイトはクレイが消えると即座に行動に移った。不信に
思われることを承知でクレイが言った通り、校舎から出てきたクラ
スメイトに『天乃川刹那って知ってるよね?』と問い掛けたのだ。

フェイトは「何を言っているの? 当たり前じゃん」という返答
を予想していた。そして変な問い掛けをしたクレイに真意を問い質
すつもりでいた。

しかし返ってきた言葉は彼女の思考を停止させた。

「誰それ? 変な名前」

フェイトの記憶が正しければ、彼女は『学園のアイドル』なんて

呼ばれている刹那に淡い恋心を抱いていた一人だったはずだ。いつも積極的に刹那に話し掛けてコツコツと親睦を深めていた彼女がそんな台詞を吐いた。

驚愕に目を見開いて硬直するフェイトに小首を傾げながら、彼女は去っていく。

(ちょっと、待って……。何？ どういうこと?)

いくら悩もうが鈍った頭が解決策を見出だすことはなかった。いや、例えばいつも通りの回転力を保有していようと、こんな現実味から離れすぎた事態を明察することはできないだろう。

気を取り直して　とはいかなかったが、フェイトは他のクラスメイトにも聞いてみた。校内を回って部活中だったのを失礼しても問い掛けた。

だが、返ってきたものは最初の彼女と同じものばかり。

果ては幼なじみのなのはたちとハラオウン家。彼女たちなら、魔導師である者ならば覚えている可能性もある。

メールでは時間が掛かる恐れがある。電話を掛けて全員に問い掛けた。

「天乃川刹那って知ってる……よね？」

そんな一縷の希望は、やはりあっさりと切り捨てられた。

フェイトは溜まらず身体が崩れ落ちた。

覚えていない。誰も覚えていない。

おかしいのは自分で、皆の反応こそが正しいのではないか？ 自分の記憶が、”また作られた”ものではないのか？ 気が狂いそうだった。いや、既に気が狂っていたのだろうか？ だから天乃川刹那なんて空想の存在を他者に問い掛けていたのか？ そんなことまで考えてしまった。

そういった面での心は、彼女は幼き頃の出来事から取り分け弱かったのだ。

壊れそうになる理性がギリギリのところまで、フェイトはクレイをようやく思い出せた。

自らが壊れそうになるほどの謎を知っているであろう、唯一の人物。

彼を頼るしかなかった。彼から真実を聞くしかなかった。

だから、八神はやてからクレイの電話番号を聞いて 結果はご覧の通りである。

散々おちよくられて玩具にされて、もう自分から通話を切った。情けなさど羞恥と悔しさで顔が真っ赤になった。

だがこれでよかったかも、とその後で小さく笑った。

友達の死。

その友達の存在が忘却された世界。

それによるトラウマの表れ。

あまりにも衝撃的なことを目の当たりにしすぎたため、フェイトの精神回路は異常をきたしていたのだ。もし、そんな状態でクレイから真実を聞けば、といっても彼自身、真実を知っているわけじゃないが、本当に狂ってしまうかもしれない。

クレイにそんな意図があったわけじゃないが、結果として良き方向へ傾いてくれた。

翌日。一睡もすれば歪みつつあった精神も回復した。奔流していた感情に折り合いをつけると、引き換えに目覚めたのは彼に対する怒りである。だがそれは敵意や殺意のある怒りでなく、悪戯を仕掛けた友人に向ける怒りだ。だからと許せる問題ではないが。

(絶対に教えてもらわなきゃ！)

その権利はあるはずだ。確かな決意を宿して六組のプレートが掛けられた教室へ入る。

「え？ クレイくん。今日はお休みやで」

ズゴッ。

出鼻を挫かれてフェイトは盛大に転倒した。

「おー！ フェイトちゃん、ナイスズッコケや。とうとうお笑いの道へ手を出してくれたか。こうなったら私と一緒に新たな境地”笑い式魔導師”を目指すしかないなあ」

「目指さないよ！ お笑いの道に手を出してもないから！」

「なん……だと……！？」

はやては目を見開いて絶句した。

「それよりクレイが休みって何で？」

「む……。ブリーチ顔に反応せんとは。先生が言うには『時神は今日、未来を切り開くために月へ向かった。おそらくは純粹種へと進化を果たして帰還するだろうが、皆、だからといって時神を差別するのはいかんぞ』やって」

「え？」

初心者には辛すぎる現実だった。

「深く考えんといてや。ハム先生は頭のネジが外れとるんや。ハイハイ、ワロスワロスって流すのが大人というもんや」

反面教師とはまさしくこのこと。常に暴走するハム先生（山田）と毎日顔を合わせていれば馬鹿をあしらう術も身につく。クラスメイト全員がハムの言動を、達観と諦観の入り混じった無に近い表情で受け流していた。精神年齢の高さなら六組が抜きん出ている。

「ハム先生はそれだけ言うて踵を返してしもつたからな。でも、どうせクレイクんのことやから仮病に決まっとるわ」

「どうして？」

「あれが病気にかかるなんて想像できん。原爆を側に落とされても絶対『俺じゃなかったら死んでたぞー』とか言うて炎の中から現れるわ」

「それもう人間じゃないよね!？」

と、ツツコミを入れておきながらフェイト自身「確かにそうかも」と思ってしまう。あの飄々とした人格破綻者がそう簡単に死ぬなんてありえない、と。

「クレイが仮病を使うのって珍しいの？」

「そやな。クレイクん、緋菜ちゃんにとって良いお兄ちゃんであることを第一に考えとるから基本学校も毎日キチンと登校しとるし、成績も良い。……私らとは大違いやな」

「そ、それは……」

フェイトは苦笑いをする。局の仕事が入れば度々学校を早退する彼女たちは、端から見ればただの不良娘だ。

「たまに地域主催のボランティアにも参加しとる言うてたし」

「嘘だよ!?!」

反射的にそう答えた。

「本当や。さっきも言ったけど、緋菜ちゃんにとって良いお兄ちゃんであるためやで。内心はきつとヤバいもんが渦巻いとるで」

二人がクレイをどう思っているのか手に取るように分かる。

(なら)

学校を休んだ理由は？

『明日にでも狩るか』

「！」

素早く組み立てられた道筋の先にあったもの。

フェイトは堪らず走り出した。

緋菜を小学校に送り届けた俺は制服姿で、しかし学校には行かず空をふよふよ浮いてゆっくり移動していた。高度はせいぜいビル二つ分の、肉眼で充分確認できる位置にいるため光の屈折率を変えて姿は消している。

右手を天に掲げて手首を一回転させると、俺の意志に応えて召喚された精霊は天候を変える。朝刊の天気予報には晴れマークが占領していたが、その予報には外れてもらう。

精霊は意志によって召喚され、術者は意志によって精霊に力を貸してもらおう。その力は、術者の意志の範囲と感情で左右され、手動で操れば精密さも上昇する。要は人間の全てを抜群に発揮できれば一流の精霊術師というものだ。

晴天の空が時を経るに従って曇天になる。風の精霊が森林以上に存在する天空を操作するなんて人を陥れるくらいイージーな作業だ。

曇天にしたのはもちろんただの気分でもなければ悪戯でもない。

戦前に戦場を有利に整えるのは勝利への布石だ。

真っ向勝負なんて愚かな振る舞いは、もうしない。

俺は、常に後手に回り続けるしかない馬鹿な主人公一行とは違う。先手が取れる確率があれば武力行使で もぎ取る。

昨日は疲労から精霊の使役が不可能になって行動停止はやむを得なかったが、今なら天乃川刹那を殺った男の気配を探るなんて造作もない。

常人とは比べものにならない情報が脳に書き込まれる。解像度が上がり、視野が広がる。視覚、焦点が消えて全方位を同時に知覚できる広大にして緻密な風の世界。

空気のある場所で俺から隠れることはできない。

その男は隣町の一軒家に住んでいた。

高級でもみすばらしくもない至って普通の一軒家。誰の目に止まることのない平凡な家　だが。

「あの二人と同じか」

二百メートルほど離れた場所から知覚する俺は想像通りだ、と風の精霊を手元に凝縮させる。

あの家付近にはあるべき精霊の姿がない。風も地も水も火も、なにもない。家を中心に、精霊術師が理解不能な出来事が起こっていた。

だが、攻撃するに問題があるわけじゃない。

精霊が畏怖している存在の討滅をするつもりだから、むしろ積極的に力を貸してくれた。

あの男がどういった理由で天乃川刹那を殺したのか気にならない

と言えは嘘になるが、最優先は抹殺。

動機は……念のため？ 最初はプライドの問題だったが緋菜を愛でたら落ち着いたし。何が念のためというかと、こっちに被害が及ばないと断言できないのだ。予想していたのに決定的証拠が見当たらない事情から後手に回り、結果奇襲されるなんて馬鹿すぎる。

俺はいざという時には……いや、常時殺る（誤字に非ず）男だ。奇襲される前に奇襲して、仕留める。相手にそんなつもりがなかったとしたら、その時はドンマイです。

初手で決まれば楽でいいのだが、と余裕な心持ち、しかしキッチンと気を引き締めて攻撃を仕掛ける。

容赦はしない。意識を研ぎ澄まし、己の感覚を精霊と共有させて、風の刃を全包围から走らせる。

計四つ。当然、一つ一つのタイミングと高低差は変えている。

普通なら家は五つに輪切りされるはずだったが やはりというべきか、その普通は実現されなかった。

刃の一つがベクトルを真逆に逸らされた。何かに弾かれたように外へ逃げていく。

他の刃は問題なく家を輪切りにしてくれたのが、

「追加攻撃つと」

その家の中心に竜巻を発生させて木っ端みじんに吹き飛ばす。大

黒柱を一瞬で引き裂き、あらゆるものが螺旋を描いて空へ消えていく。ちなみに刃も竜巻も、高位の術師なら対象のみを攻撃できるので他の家は無傷だ。この摩訶不思議な現場は流石に隠せないが。

「あー、局地的竜巻？」

深く考えないことにする。この手の事件を担当する警察が何とかしてくれるだろう。

俺は眉根を寄せてその様子を知覚する。

「また、か」

刃のベクトルを変えた位置から上の螺旋が逆回転をしていた。一つの竜巻、その上と下が右回転と左回転に別れている。

確かに俺なら物理法則を無視して、現実に体言することも不可能じゃないが、俺はそんな意志を組み込んでない。

「……裏の世界ってこんな摩訶不思議なわけ？」

そう呟きたくもなる。精霊術や妖魔など秘匿されるべき神秘に初めて触れた時と同じ感覚だ。

底知れぬ畏怖と恐怖。

禁断の果実をかじったような狂喜。

きっと魔法が明文化された管理内世界でも、そのような存在が影に潜んでいるに違いない。

薄い笑みを浮かべて、これ以上在り続ける意味のないであろう竜巻を消す。

一瞬で全てが破片に帰したその瞬間を目撃した人々が顔面を蒼白にして硬直している姿が見受けられたが

「んむ」

そこから透明感のある四角形の箱が広がり、その中に巻き込まれる。知覚していた一般人の姿と気配が消えた。

「結界」

魔導師？ ああ、ゼロ・レオンハルトも天乃川刹那もそうだったな。

垂らした右手の平に精霊を凝縮させていつでも威力ある攻撃が放てるように準備して待ち受ける。

転移魔法を使ったのか、間を置かずして俺と対峙するように現れたのは抹殺対象。さつきまで家だった場所に居座っていた二十歳過ぎの男。

そいつは自分の家が破壊されたというのに何事もなかったかのような表情で、

「きみは……昨日、天乃川刹那と戦っていた者だったな」

「どうやら俺のことも認識していたらしい。」

「途中、お前が奴を殺してくれたがな。おかげで貴重な情報源を失ったよ」

あくまで飄々たる態度を崩さず、あらゆる方向から相手を観察する。

「それはすまないな、謝るよ。彼が私の決めたルールを破ろうとしたものだからね」

「ルール？ 是非とも聞きたいな」

天乃川刹那よりも細い線の身体は萌やしっ子の印象を受ける。社会の荒波に上手く乗ることのできない社会不適者の称号、THE 引きこもり。That is sune kajiri?

「いいだろう。きみは原作キャラではないことだし、ネタばらしをしてあげよう」

上から目線にイラツときたが、我慢。

「あざーす」

「転生者の概念は刹那から予め聞いていたな？」

「前世の記憶と超越した能力を持って生まれてきた。しかも生まれた場所は前世で漫画やアニメとして存在していた世界。数はそれなりにいたらしいが、様々な事情から、今はもういなくなった。これでもいいか？」

天乃川刹那の言葉を簡略して伝えると、男はそうだと頷いた。

「その者たちを超越した能力を賦与して転生者とさせたのがこの私というわけだ」

「」

僅かに目を見開いて、俺は一瞬動揺した。それに従い収束させた精霊の制御が乱れたので、すぐに邪魔な感情を振り払う。

「不可能だ。死者を操り、別世界へ召喚するなんて人間のできる芸当じゃない」

いくら強靱な意志を持つとと変えられない現実はある。死者の魂を憑依させるならまだしも、それを蘇らせたり、別世界に召喚するなど。

もし死霊術師（文字通り、死霊を操る者の総称）が冥界の王と契約を交わしたなら可能性も出てくる。だがこいつからは死霊術師特有の陰湿な死のオーラは感じられない。

「それができる。この私、クロード・アリオスなら」

手を広げ、拷岸不遜な態度を見せ付けるクロード・アリオスと名乗った男は魔力を膨張させた。奔流する不明な力を宿す魔力を受けて精霊の制御が僅かに乱れる。

俺は意志でやや強引にその乱れを押さえ付けて、

「まるで神にでもなったような物言いだな」

「いや、神そのものだよ。その証拠が転生者たちだ」

「神は個体を持たない」

精霊と同じだ。世界の何処にだって存在している。人の及び付かない膨大な知性と創造の力を兼ね備えているが、決して個体は持たない。

不可視で、何処にだって存在しているから神秘なるものとして人々から信仰される。信仰されなき神は意味も力もない。わざわざ現世に個体を作って神秘さを無くし、信仰の力を減少させる必要なんてこれっぽっちもないのだ。

「お前は所詮、特殊な力に酔いしれて勘違いをした、神を気取るただの馬鹿だ」

「その挑発に私が乗るとでも？」

「すぐに化けの皮剥がしてやるよ」

先手必勝。攻撃を仕掛ける。

右手に収束させていた精霊を解き放つ。

高密度に収束された風が唸りを上げて弧を描き、アリオスの背後を一秒も経たずして取った。乱れず突き進む風の刃は、アリオスの半径五十センチ以内の距離まで走って 反射された。

「私に戦う理由はないのだが？」

平然と、何事もなかったかのようにアリオスは首を傾げた。

「残念。こつちにはあります」

自分の能力に絶対の自信があるらしく一瞥すらしない。

「復讐か？」

「いや。存在が目障り。あと俺が不機嫌」

「そんな理由でキミは神を殺めるのかい？」

「神様を殺していきませんなんて習わなかったものでね」

神　いちいちツッコミを入れる気にもならない。それより、ともう一度風の刃を全包围に形成して走らせる。しかし、やはり刃たちはアリオスの一定距離に踏み込んだ途端に反射された。

「無駄ということに気付かないのかい？　人間風情がこの神を殺そうなんて、本来なら思っただ時点で断罪ものだよ。尻尾を巻いて逃げれば、今なら許しておいてあげよう」

「そういう台詞を吐く奴に限って最後は無様に命乞いをするんだよ」

不敵な表情で鼻で笑ってやると、アリオスは眉根を寄せて、

「いいだろう。そこまで吐くというなら、遠慮はしない。神に逆らうことが如何に愚行か　その命を持って思い知るがいい！」

「厨二乙」

風の刃を連射しながら距離を取る。

余裕な発言と飄々とした態度は常にキープしているが、実は内心かなり焦っている。みっともなく感情を吐露するなら底知れぬ恐怖が全身に蔓延していた。

神を自称するだけあって、外へ炸裂された魔力の量は天乃川刹那すらも凌駕して津波の如く荒れ狂っている。

不気味に波打つそれを全方向から感じる。まるで大蛇に巻き付けられ、毒を持った牙をまさに突き付けられようとしている感覚だ。

自らの感情を意志で鼓舞させて制御は乱させない。怒りや恐怖で力を賦与されるのは炎術であって風術は逆効果だ。

飄々と、冷静で、それでいて全てを抱擁するように。

「フウ……」

溜まった空気を吐き出して、次の行動に移る。

アリオスは余裕のつもりか魔力を炸裂させたまま佇んでいる。

だからと攻撃を催促させたりはしない。肉眼で確認出来ない距離まで到達すると、旋回しながら風の刃で一閃。

アリオスの位置から近く、なお最も質量の多い高層ビルを下から

突き上げるように輪切りにして、その中心に竜巻を発生させる。

数十トンある高層ビルが外壁や物資を崩壊させながら、下から巻き上げられる螺旋に飲まれて天へ昇る。無用になった竜巻を消すと高層ビルは重力のままアリオスの元へ落下した。

これほどの質量は流石に反射しきれないと踏んだのかアリオスは舌打ち一つして落ちてくる高層ビルへ手を差し出す。

アリオスの足元に光り輝くミッド式の魔法陣が展開させ、その手に光が集う。

「シューティングバスター」

光は高層ビルを包み込むほど大きな光芒となった。瓦礫になるとすら許されず、塵と消える。

その瞬間に風の刃を真下から走らせる。

「ッ」

アリオスが顔を憎らしげに顰めて、自分の身体に薄い膜を張った。それは一瞬の間で、すぐに知覚不可能になったが、その膜が反射のキーだろうと直感する。実際、膜が張られた場所で風の刃は反射させた。

おそらく攻撃する際に反射の能力を紐解いたのだ。

つまり攻防は共有不可能ということ。

貴重な情報を手にした俺は一旦、光の屈折率を操って姿を消す。だが熱源までは消せないの、念には念を入れて風の結界で身を包んですぐ後ろにある海へ身を隠す。

「さて、どうするか」

手札はまだ残ってある。切り札は二枚だが、問題は使い所。

常に先手を取り続けるのは無論良いことだが、だからと調子に乗って早々と手札を使い尽くせば、逆転の一手が起きればどうしようもなくなる。ピンチだが、それ以上に恥ずかしい。

絶対に崩せない牙城ではないことは確認できた。やはり牽制をしながら隙を突くオーソドックスな戦い方が吉だろうな。

しかしその場合、相手の手札も知る必要がある。

精霊の結界を操りながら深く深くへ進みながら様子を伺っている、アリオスは静寂の時に痺れを切らして行動を起こした。

「天光満つるところに我は在り」

町一帯に環状の魔法陣が描かれる。

「黄泉の門開くところに汝在り」

同様の環状の魔法陣が大小様々な大きさに天に向かっていくつも展開されていく。

それは、まるで天と地を繋ぐ柱のようだった。

最上に位置する魔法陣に莫大な魔力が収束され 光と音響が幾度となく弾ける。

「おいおい、これは……！」

放電。曇天の空に雷光が集う。

俺はギョツと目を見開いて緊急上昇を始める。

「確かに雷雲は呼んであるけど」

広域雷撃魔法を天候操作も無しに発動させるか？ 馬鹿魔力め。

「いでよ、神の雷」

詠唱がおそらく完了した。

魔法は俺が海中から飛び出した瞬間に発動された。

「インディグネーション！」

最上の魔法陣に集った雷光が地面に刻まれた魔法陣全体目掛けて落とされた。

その環状の魔法陣に入っていた俺は自分に向けて降り注ぐ雷を分解させる。雷は風の支配下だ。

拡散して落ちる幾多の落雷はあらゆるものを抱き抱え、焼き払う。山河は砕かれ、町は崩壊され瓦礫の平野となる。

まるで被災地のような現状に俺は呆れた声を上げた。

「結界が無かったら最悪だったな」

あちこちから火の手が上がる。

アリオスはそれを平静の様子で俯瞰していた。あれだけの魔法を放っておきながら、魔力が消耗して様子もなく、呼吸も乱れていない。

だが、この一撃で仕留めたつもりでいるのか次の行動に移る気配は見えない。念のためにサーチ魔法で探りは入れているものの、瓦礫から上がる火の手が熱源感知の疎外を果たしてくれていた。

取れる。

風の精霊を収束させれば風の流れて気付かれる。それに威力は必要ない。ただ速く、鋭利であればいい。

アリオスの死角に風の刃を形成し、一瞬の躊躇いなく解き放つ。

背後で反射の能力が起きたことにアリオスは驚愕の表情を浮かべて振り向く。

反射の膜に触れて風の刃が跳ね返ろうとした瞬間に 刃を引っ込める。

斬ッ！

すると予想通り、風の刃は反射の膜を障害とせず擦り抜けてアリオスの腕（首をやるつもりだったが咄嗟にかわされた）を斬り飛ばした。

「う……あ……あああああー！ーッ！」

自称神は激痛のあまり悲鳴を上げる。噴き出した鮮血に押し止めようと切断部分を掴んで悶え苦しむ。

なぜ攻撃が通ったのか。その原理は呆気ないものだ。

反射の膜に触れた瞬間、風の刃の起動を逆方向に転化すれば反射は働いて膜の向こう側へ突き抜ける。絶対無敵の定石などありはしないのだ。

その原理で風の刃を何度も走らせてアリオスの身体に次々と引き裂いていく。その度に情けない悲鳴が上がる。

この男はゼロ・レオンハルトと同じだった。自らの能力に過信するあまり技術を身につけることを怠った強者の皮を被った、ただの弱者。

「天乃川刹那のほうがよくばど強かったな」

思わず脱力する。恐怖を抱いたのが馬鹿みたいだ。不意を突いてあいつを殺った超遠距離攻撃は文句の付けようがないものだったが、高い能力ゆえ傲慢や油断という致命的な隙が露呈されていた。

実際こうしてアリオスと天乃川刹那が対峙すれば、天乃川刹那が突破口を見出だして完勝しただろう。

「あんな戯れ事を吐いたわりに呆気なかったな」

いや、だからこそか。

血まみれになり激痛で俺の存在なんてすっかり忘れたアリオスを冷めた目で見遣り、とどめを刺す。

形成し解き放った風の刃を膜に触れた瞬間、逆転させて胴体に斬閃が走る。上半身と下半身が真っ二つに分かれたアリオスは、結局何者だったのか不明のまま絶命した。

アリオスの正体は転生者だった。

”魔法少女リリカルなのは”という作品が存在する世界で生きていた、何処にでもいる平凡な青年だった。

平凡な顔立ち、平凡な学力、平凡な運動神経、平凡な体格、平凡な思考回路。可もなく不可もなく、が正解な青年だった。

きっとこれからの人生も平凡に家庭を持って波乱のない、それなりの幸福感を享受して生を終えることを自分でも理解していた。反感もなかったし、それで全然構わない、寧ろ喜ばしいことじゃない

か、と。

しかし彼はそのこれからを謳歌せず死を迎えた。それは平凡な彼らしくない行動がきっかけだった。

それは眼前で起こった光景だ。

大型トラックの運転手がつい眠りこけてしまい、ハンドルを切ったのだ。車道から大幅に進路を逸らして歩道に突っ込んできた。

普通なら近くにいっても死の恐怖を我が身のように感じ取って身動きなんてできるわけがない。思わず身体を引つくるめて目を閉じるのが当然だった。

それなのに彼は身を抵して直撃コースにいた少女を突き飛ばし、代わりに自分が大型トラックと衝突したのだ。

酷い有様だった。数トンあるトラックに衝突し、そのまま建造物に挟まれた彼は原型を留めることすら叶わなかった。

享年、二十歳。

彼はその世界での生を終えた。

次に彼が目を覚ましたのは闇に包まれた世界だった。ハッキリと見えたのは自分の姿だけ。それ以外は何もなかった。

そこで彼は自らを神と呼ぶ存在と対面し、数々の能力を付与されて今の世界に転生した。

莫大な魔力。

あらゆるものを反射する能力。

死霊を自在に操る能力。

存在を操る能力。

人を超越した絶対的なる力を手に入れたことで、彼は歪んだ。

それは恥じることではない。責められることでもない。変な言い方をすれば正当な歪みだった。

人間は金や権力、力に憧れ、強く渴望する生き物だ。欲に限界はない。より強く、より多くを常に求め続ける。

その結果が今の彼だった。

禁忌を犯すことへの罪悪感すら消え失せる。

自身を転生者と刷り込ませた無数の死霊の存在を操り、お互い醜い殺し合うを行うように演出した。敗北して死亡した者は存在を操って元々その世界にいなかったものとされる。

そうして楽しんだ。時には自身も混じって殺戮に興じた。

仕方ないともいえるが、その振る舞いは因果応報となる。償い…
…断罪の時は訪れる。

アリオスにとって何気ない行為が時神クレイの怒りの琴線に触れ

た。溜まっていた鬱憤が不運にも彼の場面で爆発した。

アリオスは莫大な魔力と強力なレアスキルを保有していたが、実際の戦闘力はそれほど高くはない。当たり前だ。彼は片手で数える程度しか戦闘を行ったことがない上に反射の能力で慢心していた。熟練者なら彼を打ち倒すことは容易だったのだ。

人の命を散々弄んだ結果、彼は、どうでもいい人の命はどうでもいいと言える人の手によって葬られたのだ。

前作11（前書き）

Main Event? 10と共に更新しました。

当初の目的ではアリオスをもっと掘り下げるつもりだったのに
技量不足なり。転生者の設定を上手く活用できませんでした。

前作 11

異変に気付いたのはアリオスを殺つてから。まー酷いもんだ、と瓦礫の山となった町を散策していてハツとなる。

「結界解けないな」

張った人間をデスったら魔力維持なんて不可能だから普通は解けるもんだが。いつに経っても解けるどころか揺らぐ気配すら見えな
い。

「ふむ。ぶち破るか」

破壊は風術に向いてないが不可能じゃない。

掌の上に、台風の風力をそのまま収束させたような球体が出来上がる。

これを結界の端で解き放てば結界はもちろん半径二百メートルの空間をお掃除（更地）にできるはず。結界が解けたら元の世界に、この廃墟の影響が出るんだけど、まあ俺がやったわけじゃないし細かいことは気にせんでいいか。

収束した風を解き放とうとした瞬間、別の気配が突如現れて行動を停止する。

「おやまあ」

手に取るようにそれが誰かを認識すると、俺は収束させた精霊を散らして、呆然と佇んでいる彼女の元まで身体を運んだ。文字通り風に乗って。

快適な空の旅（下は廃墟）を数十秒続けると金色の長い髪を二つ分けにした長身の女性の後ろ姿を捉える。

「よー。ハーさん」

気軽に手を挙げて挨拶すると、気配を消しての完全なる死角だったためかバツと身体を反転させる。

「ク、クレイ!?!」

「おーいえす」

目を白黒させるハラオウンに軽く頷いてあげる。

ハラオウンは俺の身体をまじまじと見つめて安堵の息を着いた。

「無事だったんだね。でも、この惨状は……」

戦慄の表情を浮かべて廃墟と化した町を眺める。

「俺は何もしてない。そう、敵さんが勝手に広域雷撃魔法を使って廃墟にクラスチェンジさせたんだ。俺は止めようと思ったんだが……クッ!」

「本音は?」

「自分を護ること以外考えなかった。ぶっちゃけどうでもいいし」
あっさりと白状して他所を向く。例え、どうしてもよくなってもあの状況じゃ護れないし。

「どうしてかな？ 出会って三日して経ってないのに、そんなことだろうと思った　なんて思える自分がいるよ」

ハラオウンは悲しげに頭を振って額に手を当てる。昨日もそれっぽい台詞を聞いたな。

「でもクレイがここにいて、これほど静かだったことは、もう終わったこと？　刹那を倒した犯人は？」

殺した、とは言い難いか。

少し焦燥とした様子で視線を戻してきたハラオウンにキツパリと答える。

「殺った」

「！」

顔を盛大に引き攣らせ硬直する彼女に、

「はずなんだが」

と、続けた。

「……どういう意味？」

「腕を斬り飛ばして胴体を真つ二つにしてやったのに結界が解けないんだよ。結界は術者の意識が途切れたら解けるもんだろ？ 永続結界なら話は別だが」

「気にしちゃ駄目なのかな？ 物騒な発言は気にしちゃ駄目なのかな？ そもそもクレイって魔導師なの？ でも魔力は感じられないって……。なら管理局の法は適用されないわけで、日本の警察に頼らなければならぬわけ。でも信じてくれるかな？ 頭痛い子として病院に連れて行かれないかな？」と小声でぶつぶつ呟いたが深く考えないことにしたのか、

「永続結界って何？」

正しい判断だ。俺を逮捕なんて不可能なり。

「条件を満たさない限り自動的に解除されない結界のことだよ。つか現局員のハラオウンが知らないってことはまだそこまで開発されていないってか？」

俺が開発したの結構前だったというのに。全く常識に囚われて進化を諦めた、重力に魂を引かれた者たちは全く。相手の精神が崩壊するまで脱出不可の結界は未使用のまま終わったのは残念で仕方がない。

「クレイって魔導師……なの？」

「元、な。リンカーコア喰われて魔力無くなったし」

「喰われたってどういこと!？」

全く予期せぬ発言だったのだろう。現、魔導師のハラオウンは掠れた声で問い詰めてくる。

答えてもいいんだが、俺は天を仰いで逡巡する。

「んー。聞いても正直信じられる話じゃないぞ。俺も当初は混乱したしな」

「それでも構わない。そんなものが実在するならちゃんと理解すべきだと思うから」

一瞬も躊躇うことなくまっすぐに見てくる真摯な瞳に迷いは無かった。

別に意を決して話すような内容でもないので、坦々と語り出そうする俺に風の精霊が伝えた。

妖魔の存在を。

「ちょうど良かったかもな」

「え？」

「俺のリンカーコアを喰らった奴と同じ括りに存在する化け物の」
登場だ」

鼓膜を刺激するほどの轟音と共に、漆黒の雷が天へ逆流した。

「な、何!？」

ハラオウンは耳を押さえて雷を見上げる。

黒い雷。それはアリオスの放った神の雷と真逆の、禍々しい魔力の塊だった。

身の毛の弥立つ邪悪な妖気にまみれた魔力はしかし、そのアリオスから発せられたものだ。

取り憑かれた？

「この廃墟の中に妖魔を閉じ込めた社でもあったのか？ 確かに雷は郊外の森まで破壊し尽くしたけど」

その予想は見事に的中した。

風の精霊を森へ運んで探査すると、黒焦げになった社が見付かった。祠には何枚も貼付けられていた札（もち黒焦げ）もある。

「妖、魔？ それがクレイのリンカーコアを……？」

「おーいえす。でも俺が遭遇した奴が特殊なだけであって、基本妖魔は肉体もぱつくんぐちゃぐちゃするから安心していいぞ」

「果たしてそれは安心していい基本なのかな？ むしろ危機増大？」

冷や汗を流すハラオウンの肩をガツシリと掴んでニッコリと笑う。

「旅は道連れ世は情け。頑張って妖魔を討ち倒そうじゃないか」

ちゃんと理解するべき、とも言ってたし。

「それはいいけど」

いいんだ。俺なら即逃走だぞ。

「応援を呼ぶべきだよ。あの魔力、普通じゃない」

莫大な黒い魔力光の中に流れる妖気がハラオウンに戦慄を与えていた。霊視能力のない人間ですら感じ取れる本能の恐怖。

その気持ちは分かる。

取り憑いた妖魔の階級はともかく、アリオスという素体が強大過ぎるのだ。

妖魔に、人間の持つ傲慢さや嗜虐心なんて存在しない。野生に生きる獅子のように、どんな相手だろうと全力で狩り取る獰猛な魔獣なのだ。

そんな意志を持つ奴がアリオスに取り憑いた。

「下手に呼ぶと死者が出るぞ」

最悪としか言いようがない。死体をもっと斬り刻んでミンチにして海に放り捨てるべきだった。

……俺のミスだ。湧き上がった怒りに唇を噛み締める。

「お前は雷の変換資質だったな？」

悔やむ間はないな。起きてしまったことを否定するのではなく対処しなければ。

「そうだけど。それと死者が出ることに何の繋がりか？」

「雷なら俺との相性は抜群だ。他の連中を呼んで連携やサポートを複雑にすれば逆に身動きが取れなくなる」

雷は風の精霊の支配下だ。魔力で生まれたとはいえ変換資質によって紛れもない雷なのだ。干渉できないわけがない。

「私とクレイの二人だけの方が勝率は高いってことなんだね」

「ああ。お前はいつも通り戦ってくれるだけでいい。俺が完璧にサポートする」

「……信じていいんだよね？」

疑問ではなく、確認だった。

「どつちかが死ねばもう片方も死ぬんだ。信じないわけがない。難しいだろうが、今回だけでいい」

そう、今回だけでいい。ここで退けば隣接する俺たちの町も妖魔の襲撃を受ける。お互いの護るべき存在の命がかかっているのだ。全力を出さない理由なんてどこにもない。

「俺もお前を信じる。だからお前も俺を信じる。フェイト」

静謐な、だが明確な意志を宿した瞳でフェイトを正面で捉える。

フェイトは数秒、その視線を受けて、深く頷いた。

「分かった」

こうして一日限りの急造凸凹コンビが誕生した。

そよ風がこれほどまで恐ろしいと感じたのは初めてだった。強大な妖気と魔力が混成した風は正面から吹き抜けてフェイトの行動を停止させる。

黒い雷が徐々に近付いてくる。それは極めて遅いスピードで、こちらを威嚇してくるようだ。

妖気に当てられた身体が戦うことを拒絶した。理性でいくら命じても、本能がそれを否定する。彼女の愛機、閃光の戦斧バルディッシュも未だ振るうことができずにいた。背筋の凍るような恐怖が跳ね退けられず、膝の震えが止まらない。

フェイト・T・ハラオウンは非常に優秀な魔導師だ。魔力保有量、マルチタスク、戦闘技術、状況把握力、空間認識力。十五という若さにして戦人に必要なスキルはおおよそ会得済みだった。自分と同

等以上の敵と戦ったこともある。戦闘の駆け引きや恐怖を克服する胆力だつて心得ていた。

しかし今回の相手は話が違う。

人間でもなく、巨大生物でもない。ただ存在するだけで世界に死を撒き散らす混沌の使者。

霊視能力を持たない彼女に妖気を克服する術はなかった。

凄絶な黒き風雷に引き込まれつつあったフェイトが吞まれるより早く。

光り輝く風が流れた。

対抗するようにフェイトの背後から生じた空気の流れは清らかで、蒼く煌めきながら周囲の妖気を浄化する。

消滅した圧力に気が抜けて足に力が入らなくなった。ふらついて、慌てて足に踏ん張りをきかせる。

「クレイ……？」

三步下がった場所に佇む青年に目を遣った。

「妖気は俺が浄化する。気をしっかり持て」

それだけ言うと、クレイはしっかり敵を見据えた。

今までとまるで雰囲気が違う彼にフェイトは戸惑った。

飄々とした軽い空気が完全に消え失せて、まるで別人のようだ。鋭い眼光を宿した眼は、存在感の桁が違うことを如実に現している。「いけるな？」

トーンの落ちた清音がすんなりと耳朵を打った。それが溜まらなく心地よく、フェイトの恐怖を幾分和らげた。

頷いて、フェイトは飛翔する。

標的はまだ肉眼の認められる距離にいない。だが、攻撃準備はしておくべきだ。

小型の魔法陣を足元に展開する。呼応するように環状魔法陣に包まれ、放電する光球が形成された。

プラズマランサー。

高速に打ち出される射撃魔法で、その速力で戦場の流れを作るのに彼女が多用する。

全く未知の妖魔に、それが通用するのか疑問を抱いたが、だからこそ応用の利く基本を忠実に守ることにした。

魔力ダメージのみを与えて比較的傷付けず敵を捉えるスタン設定は解除してある。

アレを見れば、そんな甘い行動ができるわけがなかった。

身体中の全てが警告を鳴らすのだ。存在してはいけないと。

冷や汗が流れる。それを拭う暇も生存本能が許さない。フェイトは戦斧を正眼に構える。

「来るぞ！ 上昇しろ」

クレイが言った。

僅かに遅れて黒い雷が横に薙いだ。視界の隅から弧を描くように走った稲妻は触れるもの全てを溶解させた。

二人は高く舞い上がって回避に成功する。

（なんて威力なの）

フェイトは、ドロリとした赤い液体に早変わりさせた電力に背筋が凍り付いた。

「雷は絶対に回避しろ。防御魔法は多分役に立たん」

「わ、分かった！」

即座に理解する。防げる可能性がカケラもないとは言えないが、だからと試すことはできない。

先手を取った攻撃は止まらない。

「上ー！」

「！」

太陽に重なるように、遙か上空に転移したアリオスが急降下しながら周囲に放電させていた雷を放出する。

クレイはその雷を操ろうとして、しかし断念した。

(妖気が強すぎる)

無理に制御しようとするとう精霊が狂うか死んでしまう。対等な位置に存在する精霊を捨て駒に使用するのには精霊術師としてあるまじき背徳行為なのだ。

勝率の低下にクレイは顔を顰める。強烈な上昇気流を起こして、雷を相殺した。そして肉眼で見ると、紅く濁った瞳と凶悪に吊り上がり歯を剥き出しに笑うアリオスの風貌を。そこには狂気しかなかった。

クレイが相殺した雷はただの牽制に過ぎない。アリオスの狙いは自身の常人を越えた腕力から繰り出される拳。振りかぶり、身体から吹き出る黒い雷が拳に収束される。

重力も加算された一撃は高層ビルをぺしゃんこにすることもたやすい。狙われたのはフェイトだ。

クレイは風の精霊を収束させる。援護ではなく、次の攻撃の補助のため。

これくらい一人で対処してくれないと勝敗の行く末は決まったも同然なのだ。

その期待にフェイトはあっさりと応える。

彼女の専売特許は雷の如く速力を誇るスピードだ。一瞬に近い超
速移動でアリオスの背後、より高い位置を取る。

「ファイアツ！」

杖を振り下ろし、射撃魔法が発動する。

発射すると同時に槍杖に変化し、高速に打ち出された魔法は真っ
直ぐ突き進む。

速力はあるても直進しかできない光の槍は、アリオスが軌道を垂
直に折れ曲げることによって回避された。しかしその場合の対処も
備えている。光の槍はクルリと回転して方向転換をして再度発射さ
れた。

クレイも同時に攻撃を仕掛ける。光の槍と逆の位置からアリオス
の挟み打ちを狙った。

高密度に圧縮された空気の塊がアリオスの顔面を捉える。

ゴキヤツ！

鈍い音が響き、アリオスの整った顔が無残に砕かれ、首がありえ
ない方向に曲がった。

間を置かず光の槍全てがアリオスの身体至る所に突き刺さる。首、
腕、胴、足、一切の容赦もしない。

傷口から流れたのは黒い液体だった。障気にまみれたそれは果たして血液だったのか。

戦闘はまだ終わらない。相手が人間なら即死して張り詰めた緊張を解き放てたが、妖魔にそれは期待できない。

フェイトもそれを知覚して、

「バルディッシュ」

《イエス サー》

主の声に、寡黙な戦斧が答える。

バルディッシュの刃が角度を変え、そこから金色の魔力光が溢れて光の刃を形成する。

漆黒の機体は槍から、死神の鎌を彷彿させる形態に変化した。バルディッシュの近接攻撃専用形態だ。

空中で加速を付けてフェイトはアリオスに追撃を行う。

予想通り、アリオスは力尽きていなかった。それどころか大したダメージを受けた様子もなく迎撃行動を取る。

黒い雷を牽制として連射し、ときおり掌から威力の高い雷が狙い澄まして迸らせる。

フェイトの空域に黒い雷が殺到する。

この状態で距離を詰めるのは不可能だと踏んだフェイトは軌道をカーブさせて一定の距離を旋回しながらそれら全てをかわし続ける。当てるのは不可能と判断したのかアリオスは黒い雷たちに追尾効果を持たせた。

どこまで翔けようと食いついてくる。

だが、これもかわせないものじゃない。追尾効果を持たせればフェイトを狙って雷の軌道は自然と集約する。そうなれば紙一重のターンで（フェイトにとっては）容易にかわしきれた。

この均衡は簡単に破れる。

斬ッ！

風の刃がアリオスの両肩を斬り飛ばした。

それを知覚した瞬間、フェイトは旋回を止めて急速接近する。雷を舞うようにかわしながらバルディッシュを振り上げる。

「はああああーっ！！！」

気合いを入れて袈裟斬り。すれ違い様に一回転してもう一閃入れる。斬り裂くというより焼き斬る斬撃はアリオスの肉体を分断させた。

（硬い……）

しかしフェイトの手にはまるで金属に切り掛かったような痺れが残った。

六つにアリオスの身体が離別する。

これなら流石に、と一旦攻撃を中止してフェイトはクレイの側に翔けた。

「どっ!?」

「……………駄目だな」

見ろ、と促す。

地に落ちていく斬り飛ばされたそれぞれの肉体が黒い靄が吹き出し、お互い引かれ合う。まるで合体ロボのように身体は接合され、数秒後には傷痕さえ消えて完全に癒着した。

二人を見据え、ニタツと粘着質な笑みを見せる。

するとアリオスを中心に黒い電撃の膜が膨れ上がる。それは二人の想像を上回る速度で、

「フェイト!」

「……………!」

回避不可能と悟った二人は咄嗟に身を寄せ合う。

クレイが迫り来る雷の妖気を浄化して、フェイトが二人分のバリ

アを展開する。

お互い、自分たちにしかできない役割を果たして打開策を見出しました。

しかし妖気を浄化して防御可能レベルまで落としたといっても雷自体が高威力なのは変わらない。

フェイトは魔力を込めてバリアの強度を高めるが、全ての電撃を流し切ることはできなかった。二人を僅かに流れ込んだ強烈な電撃をその身に向けた。

「ああああ！」

「グッ……！」

全身の皮膚が爆ぜるような痛撃に意識が飛びそうになる。

クレイが慌ててバリア内に流れ込む電撃を大気に還す。落雷と同等の電圧を受けてまだ意識を保っているのは二人の雷耐性が常人より遥かに高いからだ。優れた風術師や雷の変換資質を持たない者ならこの時点で黒焦げになっていた。

電撃の膜が消える。

クレイはすかさず痺れの残った身体に鞭を打って上空の空気をまとめて叩きつけた。圧倒的な風圧の鎖に縛られ、アリオスは地面に這いつくばる。

「バインドは使えるか？」

人体を挽き肉にできるほど螺旋する風圧もアリオス相手には長く足止めはできない。フェイトと二、三は会話を交える時間が欲しかった。

「うん。任せて」

局地的な竜巻で視界が遮られても、魔力反応で探れば詳細な位置を割り出すことも容易だ。フェイトはリング状のバインドを起動してアリオスの四肢を縛る。

アリオスの抵抗力が若干弱まり、少しの時間が生まれた。

「あれを倒すには身体を完全に滅する必要があるな」

「大技をかますってこと？ でもそんな時間」

「ないな。この時間を大技の溜めに使っても単体では間に合わない。だが二人ならいける」

「でもどうやって？」

フェイトの不安を吹き飛ばすようにクレイは引き締めた唇を緩めて小さく笑った。

「言っただろ？ 相性は抜群だと」

片手を天に向ける。手首をクルクルと二、三回転させると曇天は雷雲に変わり、雷が鳴動を上げた。

これは、とフェイトは目を見張る。

脳内に瞬時に浮かび上がった魔法名はサンダーフォール。天候操作と遠隔攻撃の儀式魔法は高い威力を持っている。十分に大技と呼べる代物だ。

しかし長時間の詠唱と集中、魔力が必要なため大きな隙が生まれる。空戦機動や未知なる相手に対してあまりに不向きな魔法だった。

だが、フェイトは迷わず起動する。儀式魔法の大幅な時間と魔力を持っていく天候操作はクレイが軽く行ったため高速起動が可能となったのだ。

（確かに、相性抜群だよな）

クレイの扱う術が一体何なのかまだ不明で、知りたくないと言えば全くの嘘になる。だが、彼の能力が自分に有利な舞台を瞬く間に整えてくれる事実には完全な信頼を置いた。

雷は風の支配下。おそらく自分の放つ魔法に風を介入させて威力を増減できることもフェイトは薄々気付いていた。

だから同時に、生まれた心の余裕からもしクレイが敵だったらというパターンを考えてみた。無理だ。風を操る彼に空戦は愚かで、雷も放てばあっさり制御を奪われてしまう。フェイトにとってクレイは最も敵対するべきではない天敵なのだ。

味方で本当によかった。安堵の息を吐いて、心地好い心境の中で意識を研ぎ澄ませる。

足元に大型の魔法陣を展開。バルディッシュのリボルバーユニットが今戦いで初めて使用される。ドヒュンツと重低音が響いてカートリッジシステムが作動する。

魔力が一気に膨れ上がった。

遙か頭上に形成された金色のスフィア体が互いに放電して激しい音響が轟く。

天候操作のプロセスをなくしたことで数十秒も早く術式展開が終了する。

「いくよ、バルディッシュ」

金色のコアが呼応して煌めくのを確認して微笑み、フェイトは大きく振りかぶる。

「サンダーッ！」

気合一閃！バルディッシュを振り下ろす。

アリオスが風圧の鎖とバインドを引きちぎるが、回避、防御、共に間に合わない。

「フォールッ！」

落雷が無防備なアリオスに向かって幾筋も落ちる。落ちる最中に風の精霊が雷に介入したことにより、威力がおよそ二乗化された。落雷が落下地点を焼き砕き、追隨する風の衝撃波が周囲に散らばる残骸ごと蹂躪した。

前作12（前書き）

読んでいて気付いた方も多くいると思いますが、設定は『風の聖痕』を拝借しています。あれは漫画やアニメを入れたとしても私の中では不動の一位。神作でした。

前作 12

（俺も……多分フェイトも化け物級の実力者と恐れられていただろうが 井の中の蛙だったか）

辟易の表情が表にハッキリと現れる。

深い溜め息も着きたくなかったが、フェイトの不安を煽るわけにもいかなかったので止めておいた。

詰んだ いや、詰みかけ状態か。

莫大な風力を込めたサンダーフォールを受けても、アリオスは消滅しなかった。致命傷を負わせたが、それもすぐに回復する。

今の、有利な状況ですら勝利の道筋が見当たらない。このまま長期戦に持ち込まれると勝ち目がないのは明白だった。妖魔は人間とは違って、意志一つで体力の限界を克服できるのだから。

（打開策は……だが）

あるといえはあある。妖魔に取り憑かれる以前のアリオス戦に用意していた最強の切り札。しかしそのカードを切るには、それこそ時間がかかってしまう。そうなればフェイトは一人で俺を護りながらアリオスを捌かなくてはいけなくなる。間違いなく無傷ではいられない。

(なら逆でいくか?)

フェイトだって最強の切り札はまだ残していよう。彼女がその準備に取り掛かる間、俺がフェイトを護りながらアリオスを捌く。

しかし、これは不安要素が否めない。

高速起動ができない俺はフェイトのように黒い雷をかわしきるには速力が足りないのだ。接近戦もダメージを与えて怯ませるくらい力がないと、人間の構成を無視した動きで返り討ちになってしまう。

俺を殺れば次は大技を放つため集中しているフェイトが獲物になる。

どう考えても、アリオスの相手をするのはフェイトが適任だ。

しかし

「いいよ」

唐突にフェイトが優しい声音で言った。

俺の表情を見て、

「何か策があるんだよね？ なら私、時間稼ぎするよ」

「危険だぞ」

「うん」

「死ぬかもしれない」

「うん」

「なぜ？」

「信頼してるから」

淡々と紡いだのは投げやりではなく、本当に俺に信頼を寄せているのだと伝わってくる。悠然と、しかし生きること諦めていない強い瞳は印象的で。

どうでもいい人間の命はどうでもいい。赤の他人の生に何の執着も持たない俺だが、どうやらフェイトはどうでもいい存在ではなくなったようだ。付き合いをしてみると案外面白い。

「二分だ。二分間俺を護ってくれ」

「任せて」

「死ぬなよ」

フェイトが返答したかもしれないが、既に俺の意識は深い集中状態にあり、耳に留まることはなかった。

『彼の者』の力によって秘匿、封印された、右手の中指にある遊色効果を持つオパール指輪の指輪が姿を見せる。

それは契約の証。『彼の者』に認められた者だけが託される無限

の風。

深々と意識を沈め、どこまでも鮮やかに澄み渡りし蒼穹の世界に足を踏み入れる。

そうすることで世界の全てに鎮座する『彼の者』と繋がる。人間風情でありながら、全ての風を統制する上位者として、君臨することを許される。

全ての風とリンクする。風のある世界全てがこの矮小な掌に収まったような気がした。精霊たちが喜んで、知覚した情報を俺の脳に送り込んでくるのだ。

半径数百キロ内の全ての事象を同時に知覚するが、今この場に世界の情報は必要ない。不要なものは全て受け流し、自らが望むものだけを的確に探り出して手繰り込む。求めるものは力と

俺の援護を失い、俺を護る戦いを強いられたフェイトは防御力の高いバリアジャケットごと引き裂かれて血まみれの状態にあった。肩で息をして、停止することなく高速起動を維持してアリオスを自分に引き付ける。かなり危険な容態である。紙一重でアリオスの雷や格闘技をかわし、防ぎ続けるがあと数十秒持つかどうか。

それでもフェイトの瞳は力を失ってはいなかった。むしろ絢爛たる輝きを見せて果敢な己の生き様を示し続けている。

空を翔けるフェイトとアリオスは、まるで金色と漆黒の尾を引いた流星がもつれあいながら舞踏しているかのようにだった。ときにか

すめ、ときに弾けあつ。放たれた光芒が交差するたびに、炸裂する激しい音と魔力が散る。それが二度、三度、四度、何処までも繰り返し行われる。その拮抗は二人が正面から激突しあつてもなお終わらない。

フェイトは力を受け流し、距離を取ると再度弧を描きながら激突する。

「あああつっ！」

自らを鼓舞するように声を絞り上げて、大鎌と拳が火花を上げた。そして納得する。アリオスは攻撃を受ければ受けるほど、その攻撃の耐性が跳ね上がっていくのだ。だからサングダーフォールを受けても消滅を免れた。前に雷攻撃を受けたから。

ここにきて拮抗が崩れる。フェイトの身体に限界が訪れた。

一瞬身体がグラリと揺れた。その隙を突いてアリオスが拳を放つ。

《ディフェンサー》

バルディシュが咄嗟に防御魔法を展開することによって直撃はなかったが、しかし衝撃までは緩和できず吹き飛ばす。

俺はその彼女の身体を優しく抱き止めた。

既に虫の息のフェイトに喋る余力はない。だから俺は耳元で感謝の意を込めて囁く。

もう充分だ。よくやってくれた。

引き締められた唇が緩む。フェイトの身体が糸の切れた人形のように力を失った。

左腕一本で彼女を抱きしめて、俺はアリオスを正面から見据える。

アリオスは本能的に俺の異変に気付いて行動を止めていた。蒼く輝く気流は緩やかな舞いを踊るように振り撒かれた妖気を浄化する。その莫大なるエネルギーを畏れて弾けていた黒い雷は畏縮した。

そして、初めてアリオスが、アリオスに取り憑いた妖魔が俺の右手中指に嵌められた指輪を見て、言葉を紡いだ。

「『コントラクター契約者』……」

遊色効果だった宝石は莫大なる力を授けられた証として蒼穹のごとく鮮やかな色に変化している。

それはまさしく風の大精霊　シルフと契約を果たした何よりの証明。超越存在と契約を交わした者を裏の世界では『契約者』と謳われている。

「充分楽しんだろ？　もう死ね糞餓鬼」

風の精霊、蒼い粒子が集束して陣を描く。

記憶を頼りに陣を復元させる。無数の環状の魔法陣が大小様々な大きさを持って天と地を繋ぐ柱のように展開。今の俺なら大気中の

魔力素さえも思いのままだ。精霊と魔力。水と油のように混じり合
うはずのない間柄を、俺という中継を置くことによって完全同調を
させる。

確か詠唱は、こうだったか？

「天光満つるところに我は在り。黄泉の門開くところに汝在り」

アリオスが使用した広域雷撃魔法。極限まで圧縮させて殺傷力を
高める。

「いでよ、神の雷」

肉眼を焼き尽くす熱を持った雷撃が暴れる。魔力と同調を果たし、
莫大な力を宿した風の精霊が解き放たれるのを今か今かと待つよう
に。

俺はその願いを叶えた。

「インディグネーション」

圧倒的な雷撃が何もかもを抱え込み、無へ還す。妖気も、アリオ
スも、取り憑いた妖魔も、一瞬の抵抗すら許さない。蒼い輝きが存
在の痕跡そのものを始めからなかったかのように消滅させた。

今度こそ、揺るぎない勝利を掴み取った。

「…………ッ」

勝利の余韻に浸る間もなく、脳に激痛が走る。内側から弾け飛ぶような痛みにバランスを崩してしまい、緊急着陸を試みる。傷痕が一面に広がり、一息付ける場所すらもなかった地面の一部を風の力で無理矢理整理させ、フェイトを抱き留めたまま壁に背を預けて座り込む。

所詮は人間。風の大精霊シルフと契約したといえ無敵の力を保有したわけじゃない。力こそ永遠に尽きることはないが、制御できる量は永遠の切れ端程度が限界なのだ。アリオスは自ら神を自称していたが、人間はひっくり返っても人間以外の何物にもなれない。

早くも脳が悲鳴を上げている。解放した契約者の力を即封印したところだが、まだ一仕事残っている。

全身傷だらけで、そこから侵入した妖気が彼女の生命を喰らい尽くそうとしているのだ。管理局の医療技術でも妖気を浄化することとはできない。精霊術師がいたとしても裏の事情を知ったフェイトを助ける可能性は高くない。

俺がやるしかなく、幸いその力は持っている。

力を集わせる。薄く蒼い光を呼び込むと、それでフェイトを包み込む。傷口から精霊が優しく入り込み、妖気を浄化して崩壊した細胞を清廉なる力で癒していく。

完治は流石に不可能だが、歩ける程度までフェイトの傷を癒した

俺は、ここでようやく契約者の力を封印する。

蒼く輝くオパール指輪は光を失って遊色効果を持ったただの宝石に変わる。

はぁ、と深い溜め息を着いて全身を弛緩させる。身体のダメージこそ無いものの、激しい頭痛と疲労感に死にそうだった。

「一時の感情による迂闊な行動は自重しよう。いや、まじで」

もう少し強い奴と戦いたい、なんて思うのも止めよう。緋菜と緩やかな時を謳歌することに全てを注ごう。

「バルディッシュ。この結界を維持したまま、局に連絡をしてくれ。修復作業の無いままだと影響が出るからな」

フェイトの愛機から寡黙なイエスの返事。

「局員が来たら俺は帰る。この事件は適当にごまかしといてくれ。正直に話すと精神病院直行だからな」

難しいかもしれないが、妖魔や妖気なんて単語が報告に飛び出ると、フェイトの将来に関わる。

一方的にまくし立てて全てをバルディッシュにプレゼントした俺は喋ることも億劫になってただ局員が到着するまで目を閉じて休んだ。

宣言通り局員が到着と同時に場を離れた俺は学校など行くわけもなく、サッサと帰宅してベッドに倒れ込んだ。緋菜には『ごめん、出前をとって』と書き置きをして、そのまま意識を落とした。

翌朝、逆に寝過ぎてまた気怠げな負担を背負いながら、しかし体調はそれ以外何も悪いところはないのでいつも通りのスケジュールに戻った。朝食と弁当を作り、緋菜を起こしてご飯を食べて、僅かな空き時間はニュース視聴で潰して登校。

高校と小学校の登校時間は違う。小学校が二十分ほど早いため緋菜の登校時間に合わせる俺は早い時間帯で高校に到着するわけだ。

高校生になると親の束縛は緩くなり、少しでも惰眠を貪ろうとする怠け者の数が増えるので、こんな時間帯に登校する物好きは少ない。朱く長い髪を揺らしながら人が疎らな通学路を歩いていると、背後から金色。

なぜか抜き足差し足で徐々に距離を詰めて来たので、振り向いて、

「わっ！」

「きゃん！」

金色の長髪をくせ一つなく流した少女　フェイトはびっくりして尻餅を着いた。そんな様子を冷めた目で見下ろす。

「な、何するの!？」

「それはこっちの台詞だ馬鹿。足音を消して迫って来たってことはこつするつもりだったんだろ」

あっさり看破されてフェイトはうつゝと顔を背けた。立ち上がり、砂をポンポン叩きながら俺と肩を並べて歩き出す。

「どうして気付いたの？」

「俺に死角はない。それより傷の具合はどうだ？普通に登校して大丈夫なのか？」

外見からは傷は見当たらないが。

「優秀な医療スタッフがいたから。小声は言われたけど傷の方は、激しく動かない限り問題ないって」

それは問題あるのでは？とコメントは控えておく。

「クレイの方は？バルディッシュが、かなり辛そうにしていたって」

「ん？俺は全然大丈夫だ。脳が危うく焼き切れそうになったけど、一日寝たら痛みも引いて今のところ正常だし」

起床した当初、異常がないか少し恐々しつつ思考を重ねてみた。問題があるようなら学校を休んで病院に行くつもりだったが、その心配は杞憂に終わった。

「ま、でも念には念を重ねて学校が終わったら病院で検査受けるつもりだけど」

「うん、それがいいよ。何が潜んでいるか分からないもん。あ、不安なら私も着いて行くよ?」

「お前はおかーさんか」

子育てでもしてんのか? 変に気が利いている。

呆れたように肩を竦めて苦笑する俺は、数歩足を進めながら言わなければならぬと思つてたことを口にする。

「悪かつたな」

「え?」

「昨日、あいつとの戦いに巻き込んだ上、あれだけの傷を負わせて……反省しているよ」

何も感じていないわけじゃない。俺にだって負い目という感情はある。

俺の油断が、アリオスの死体に妖魔が取り憑くなんて真似を許してしまった。結果、人間の弱点と呼べる部分が消えた化け物を相手することになり、一人では勝てないとフェイトを頼った。何と云うていたらしく。

風術では完全に消滅させるのは難しいんだが致し方ない。次から、

敵対する奴は斬り刻んだ後、大気を圧縮させた大砲のような打撃を連打して液状化するまですり潰そう。それなら妖魔に取り憑かれる心配もないはずだ。

反省は活かす。敵は刻んですり潰す。

うむ、完璧だ、と頷いた俺は「そんなことか」とふんわり笑うフエイトを見た。

「全然気にしてないよ。そもそもあの場所まで向かったのは私の意志だし、例えばクレイが協力を申し出て来なかったとしても、私は戦ってたよ。それで、多分死んでたよね？ だってその場合だとクレイと信頼関係は結べなかつたし、恐怖心に身体を食いつぶされていた。だからクレイが協力を申し込んでくれたことには寧ろ感謝だよ」

「そっか」

それだけ言っただけで会話を打ち切る。

彼女の言ったことは確かに一理あった。だからと感謝をせびるなんて下衆な振る舞いはしないが、無理にこっちが感じる負い目を払拭しようとは何かできることはないか、と模索するのも止めた。

フエイトは十分に満足をしている。あれこれするのは所詮こちらの自己満足他ならない。それに今はこの距離感が心地好い。きっとフエイトもそうだろう。

「では学校に到着するまでの間、俺が使う力と妖魔について語るとしよう。皆様、ご静聴を」

感謝や償い、共闘して敵を打ち砕いた記念というわけではなく、ただ場を盛り上げるネタとして、

「おーいえす」

人の口癖（というか気に入ってるフレーズ）で返す乗り気な彼女に語り出した。

Main Event? 風の祈りと閃光と END

後書きという名の雑談会

前作12（後書き）

クレイ「はい、というわけではいかがでしたでしょうか？ 設定を手く活用できていませんでしたね。時神クレイ役を務めさせていた
だいた、フェイト・テストロッサ・ハラオウンです」

フェイト「もう、変なこと言っていないでちゃんと自己紹介しようよ。
皆さん始めましてフェイト・テストロッサ」

クレイ「緋菜、おいでー」

緋菜「ん！」

フェイト「聞いてよ」

クレイ「だってお前が大人な対応したから、イラッと来たんだよ。
ポジションは弄られなんだからキャンキャン吠えとけばいいもんを」

フェイト「酷い言い草だ……ぐすん」

クレイ「あ、ごめん言い過ぎた。反省する」

フェイト「……本当？」

クレイ「とでも言っとけば機嫌も直るだろ」

フエイト「カケラも反省してなかったー！」

クレイ「おっと口に出ていたか。悪い悪い、謝　あ、靴紐解けてた」

フエイト「私への謝罪、靴紐に負けた!？」

クレイ「謝罪がほしけりや金出しな。二千元」

フエイト「リアルな数字！　そこまでして謝罪は欲しくないよっ」

クレイ「ちっ、余計な茶番に付き合わせるなよ。謝罪を要求する」

フエイト「あ、ごめんなさい……………あれ？　おかしくない？」

クレイ「頭？　あはは、元々だからそんな気にすんなって」

フエイト「お、おかしくないもんっ」

クレイ「まあそれはおいといて」

緋菜「おにーちゃん、お腹空いた」

クレイ「ん、じゃあ打ち切ろっか」

フエイト「え？　もう?？」

クレイ「だって緋菜がお腹空いたっていうから。とりあえず次回予告しとけば？　あばよです」

フェイト「あ、ちょ。うう、えと、次回は短編を二つ挟んで始まりませう。他の精霊術師とかも登場して白熱したバトルを繰り広げるそうです……絶対嘘だよ、クレイが熱いなんて。焦点が当たるのはまずいから私は……え？ 脇……役……？ マジでか」

前作短編（前書き）

オオカミさん風な地文。勢いでやりました。

前作短編

Sub Event クロノさんご乱心

フエイトさんは窓際の前から三列目にある自席に座って声なき呻きを上げていた。目を前に向ければ苦手な古典の授業が繰り広げられていて 正直お手上げ状態だった。

国というか出身の星すら違うフエイトさんは現代文や古典の成績が非常に残念で、たびたび注意すら受けるくらいだ。真面目に聞いても、まるで理解できずショートする思考回路に休息を与えようと窓を挟んだ外の世界で繰り広げられている六組の体育の授業を眺めることにする。

女子は体育館で別の競技をしているのだろう。グラウンドには男子しかおらず、ときおりハム先生の喝や金属が弾ける高い音が耳朶を打つ。

男子はソフトボールをしていた。学費が高い私立（ようは裕福なお坊ちゃん）に通う少年たちは部活動に熱を入れる者は少なく運動能力は平々凡々である。見ているとポテンヒットや打ち損じが多く、気持ちの良い当たりがなかなか出てこない。

（あ……）

次の打者がバッターボックスに入る。

数日前知り合っただけの、しかし確かな信頼関係を結んだ男子。時神クレイ。

学校生活では気まぐれで掴みどころのない飄々とした性格ではやと共にお笑いコンビとしてちょっとした知名度を誇っている少年だが強い。戦いになると傲岸不遜な態度を見せ、強者の風格と圧倒的な存在感を露にして敵を振り伏せる実力者。

風を自在に扱うクレイさんは、雷の変換資質を持つフェイトさんとコンビを組むと彼女の力を二乗化させるくらい抜群の相性を誇っている。無駄の一切ない綺麗な風がフェイトさんの雷を半チート化させてしまうのだ。

思わずフェイトさんは注目する。

遠巻きなのでクレイさんの表情までは伺えないが、彼は今、非常にあくどい笑みを浮かべております。

ピッチャーが第一球を投げる。下投げのコントロールを求めた投球はふんわりと重さのない、パワプロでいうと超スローボールです。

ストライクゾーン、それもかなり打ち所に向かってきて、クレイさんの瞳が怪しく輝いた。

強く踏み込み、足、腰、腕の順に身体を動かし、全身のバネを完璧に使った一振りには綺麗なフォームで、

カキーンッ！ と授業が始まって初めて心地好い音が響いた。

あ、とフェイトさん笑みを零します。が、それも束の間、真芯を捉えた一打は振りが早く、打ち出された弾丸は人数合わせのため一塁の守備についていたハム先生の顔面に吸い込まれるように

「ぬお……!」

ハム先生、間一髪のところまで避けます。

「チツ……。仕留め損なっただか」

クレイさん、マジ殺る気です。

「時神！ 今、ワザと狙ったであろう!？」

ハム先生は冷や汗を流して直訴するがクレイさんは取り合わない。

「へい、一塁びびってる（棒読み）」

それどころか挑発してます。教師を殺る気で挑発までするなんてマジパネエです。

「よかろう！ そこまで言うならこの私、グラハム・エーカーも純粹に闘いを望もう!」

全く話が噛み合っていないが試合は再開される。補足しますと第一球はハム先生を通り越してから横に逸れてファールです。避けられた場合も計算済みですね。

少し置いてきぼりを食らったピッチャーが戸惑った様子で第二球。

今度はフェイトさんにも聞こえる音量でクレイさんが叫ぶ。

「死ねっ！ クソハムツ！！」

「敵に向かって弾を打つとは ナンセンスだな！」

当然のごとく飛んでくることを予測していたハム先生は口角を吊り上げてボールをひらりとかわす。ええ、かわしましたよこの人。

ナンセンスというなら、

（（捕球しろよ！！））

クレイさんを除いた全員の叫び。六組の皆さんはハム先生に振り回されて精神面がかなり強化されているので態度には表さない。

これにはフェイトさんや、気持ち良い高音が鳴ったことで同じく外に注目していた生徒たちも苦笑する。

（そつえばクレイとハム先生がただならぬ関係にあるに違いない
つてはやてが言ってたなあ）

クレイさんがその事実を知れば、関西弁の有望な魔導師が行方不明になるに違いない。

ピッチャーが第三球を投げる。

「フッ。このグラハム・エーカー！ その稚拙な弾丸など何度でも受け流してくれよう！」

捕球する気ゼロ。クレイさんが球を打つ前で、ハム先生が盛大に叫ぶものだからクレイさん、チラッと一瞥するだけで、

バットが真芯を捉える直前で手首を捻り、綺麗に受け流す。

「なっ!?!」

ハム先生驚愕。

真逆に飛翔した球は高い弾道となってレフトへ　その先にある簡素な柵を楽々と越えてホームランとなる。

「やった!」

フェイトさん、思わずガッツポーズ。

しかし、重大なことを忘れています。今は授業です。

「ハラオウンさん?」

教壇辺りから聞こえた絶対零度の声でハッと我に帰るフェイトさんは自分がクラス中から注目を集めていることに気付き、パフッと顔を真っ赤に染める。

「私の授業、そんなに分かりづらかったかしら?　授業を放棄して男子の体育を眺める方が有意義だった?」

「あ、いや、あの……す、すみません!」

立ち上がり、バットと頭を下げて萎縮する。曝され者になってクス

クス笑われて、さすがにグラウンドに目を向ける度胸はない。

「と、ととととと時神いーいーッ！！ 謀ったな！ 謀ったな時神いーッ！」

「（ニヤッ）ぞまあ」

風が一刀の元に切り捨てる。地面がバターのように斬り裂かれ、先にいた巨大な百足が真つ二つになる。続いて、以前の反省を活かした追加攻撃が入る。一センチ角に細切れにして大気を圧縮させた拳打が液状化するまですり潰す。

こうして名も知らぬ妖魔は三秒にも満たない間に屠られた。

容赦なく、それでいて手際のいい一連の動作をクレイさんは欠伸をかきながら行った。殺る前から殺った後まで、彼は終始妖魔に目をやることはなく、

「さて、帰るとするか」

何事もなかったかのように身を翻し、後ろで見学していたフェイトさんに促す。

「凄いね、精霊術師って」

改めてクレイさんの術を観察していたフェイトさんは素直な感想を漏らした。あまりに卓越した力を前に、それしかでてこなかった。

「凄いのは俺だけだな」

腰に手を当てて不敵に笑む。

「風の精霊は、風の変換資質と変わらない。他に比べると威力は弱いし攻撃は軽い。後方支援が唯一の存在価値レソソレイトルというのが常識なんだ。もし風術師が最大の質量と破壊力を持つ炎術師に勝つには相手より数段優れた意志と制御力が必要になる。だから風術師は弱者として蔑まれる傾向にあるが、俺は弱者じゃない。つまり凄い」

その傲岸不遜な物言いに、フェイトさんは苦笑するしかない。実際彼は超越存在、風の大精霊シルフの契約者コソトラクターなのだ。凄いという枠に収まりきるレベルではないのだ。

「精霊術師全員がこんなにできるわけじゃない。本気になったフェイトに勝利を収める奴なんて十指いるかいなかだ」

「そ、そうかな」

少し照れた様子のフェイトさん。魔導師としての実力を褒められるのは嬉しいようだ。

クレイさんは頷く。

「精霊術師も魔導師も根源は一緒。基本的にも究極的にも才能が幅

をきかせる分野だ。例え技術や理論を組み立てようと、それを現実に具現化させるといふ行為は非才な者には身に余る。『できる者』と『できない者』との境界線は、残酷なまで明確に線引きされているんだよ。凡人は、いくら頑張ろうと天才には敵わない。非才な者は報われない。それが俺たちの立つ世界の構造だ」

淡々と、冷酷に、精霊術師と魔導師が舞台に立つための必須条件を語る。

風術師で例えるなら、『できる者』は天候操作も軽々しく行い、高層住宅だろうと輪切りにできるが、『できない者』は肉体に切り傷を与える程度の鎌鼬しか放てず、長時間飛行も不可能だ。

魔導師で例えるなら、『できる者』は切り札を幾つも保有し、飛び抜けたジャンルも持つ。『できない者』はそもそも初級魔法の生成に苦難する。

努力で補えるレベルを超越したのが、その世界だ。

「そんなこと」

とフェイトさんが庇おうとするが、

「あるぞ。間違っても伸び悩む若者にそんな無神経な言葉は使うなよ。アンタには分からない、と情けない不興を買っただけだ。そういう輩は俺のように対処すればいい」

「クレイのように?」

クレイさんは腕を組み、思い切り見下した表情で鼻で笑う。

「ざまあ W W」

「刺されるよ！ 夜道に背後からサクツて躊躇いなく刺されるよ！
本当にそんなことやってたの！？」

「まさか」

「ですよ。さすがのクレイさんでも、敏感なお年頃にそんな残酷な物言いは

「まだまだ序の口だ」

「……………」

「社員時代のクレイさん、マジ悪魔です。社員を苦しめることに何の躊躇いもありません。一体何が彼を駆り立てたのか。」

「真っ白い目を向けるフェイトさんだが、クレイさんはまるで動じない。軽薄で掴みどころのない表情は鋼のごとく硬かった。」

「とりあえず足を進めよう。こんな鬱蒼とした森に立ち止まる理由はない」

「その筋からの依頼は終わったのだ。多額の報酬が出たとはいえこんな町外れの郊外まで歩かされてクレイさんは少しご機嫌ななめ。この言葉の真意は緋菜ちゃんに早く会いたいー！だ。」

「あ、待って」

サツサと踵を返したクレイさんの後を追って隣に並ぶ。

視界が悪かろうと風の精霊が送り込んでくる情報で最短ルートを知覚するクレイさんは寸分の狂いなく来た道を戻る。フェイトさんが何かに躓いてクレイさんに寄り掛かるなんてラブコメ展開も起きない。その場合クレイさんはサラツと避けそうですが。

「クレイは局に戻るつもりはないの？ 昔は局員だったんでしょ」

「ない。局には二度と入らん」

濁いた声でキツパリと述べる。

「どうして？ クレイの予想では管理内世界にも精霊術師はいるんでしょ？ 需要は充分だと思っただけど」

クレイさんが妖魔に遭遇して部隊を壊滅させられ、自身も魔力を奪われるという絵に書いたような転落人生を味わったのは管理内世界だ。

妖魔在るところに精霊術師在り。どこの次元世界でもこの二つの単語は秘匿されるべき現実なのだ。

フェイトさんの言ってることは最もだ。彼ほどの術者なら、どの次元世界の精霊術師も高い評価をするだろうし、グループで活動する者にとってまさに喉から手が出るほど欲しい逸材だ。辺境の星の小さな町を護るだけでは、あまりに勿体ない。もし、局が密かに精霊術師のみを結集させた対妖魔用部隊があるのなら、そこで遺憾なき才能を發揮して多くの人間を影から護るべきではないのか？

その選択が何より有意義ではないのか？

クレイさんは違った。

「興味ない。精霊術師なんて俺にとっておまけでしかない。自分と大切な者の現在を護るための手段でしかないんだ」

声が若干重くなる。

「不幸になりたくないから力を求める。失いたくないからその力を研磨する。今を無くしたくないくせに誰かに守ってもらい安穩と暮らすような連中が、強者に踏みにじられるのは当然の報いだ。俺のは、そうならないための力だ」

それは過去の傷跡だった。いくら年月が流れようと決して癒えることもない、心に深く突き刺さり、えぐり取られたような傷跡。

だからクレイさんは思う。どうでもいい人間の命はどうでもいい。誰かに守ってもらうことを端から当然のことと受け止め、強くなることを諦めた人間なんて、いっそ死んでしまえばいい。

フェイトさんは言葉を避けました。垣間見たそれは安易に踏み込んでいいものではないと踏んだのです。

沈痛な面持ちで見上げるフェイトさんを認めて、クレイさんは「らしくなかつたな」と頭を搔く。

「仕方ない。心機一転だ。フェイト、おにーさんに合わせてくれ」

クレイさんは辛そうに苦笑した。

のも束の間。フェイトさんに案内されたマンションの前に立つ頃には、

ニタア……。

非常に陰湿で粘着室なあくどい笑みを浮かべていた。心機一転というか、もう人間と悪魔が入れ代わってます。

フェイトさんは引き気味で今更帰れなんて言えない。先行き不安になりつつ自動ドアをくぐり抜ける。

ハッキリ言うと嫌な予感しかしないフェイトさんは何かクレイさんの興味を引けないかと脳をフル回転させる。

「あ、ここからならなのはの家族が経営してる喫茶店も見えるんだよ」

「モブキャラ興味なし」

「モ、モブ……」

確かに友達の友達なんてそんなものですね。クレイさんがなのはさんと知り合い、共に新たな傷を負ってしまうのはもう少し後になります。

エレベーターを使い、フロアを進む。ハラオウン家の表札があるドアをフェイトさんは開いた。

「ただいま」

いつもは柔らかい、帰宅を知らせる声はやはり調子が悪い。

「おじゃましまーす」

対照的に悪魔さんは朗らかに礼儀を口にする。

もうここまで来れば腹を括るしかない。煮え切らない自分を切り捨てようとしながらクレイさんを迎え入れてリビングへ向かった。

（いるのかな？ クロノ、家にいるのかな？ 今日は珍しく休日だったけどエイミィとデートときに行ってくれてないかな？）

ニタア……

（あ、いるんだ……）

背後を歩くクレイさんの笑みが粘着質を持ったことで、一縷の希望は切り捨てられたと悟る。

「……………はあ」

これ以上ないくらい深い溜め息を着く。かつて友達を招くのにここまで心労が重なったことはない。

リビングに足を踏み入れると、センスよく統一された家具が目に入る。キッチンと掃除もしてあるようで床に埃は見当たらなかった。

「おかえり、フェイト。お友達か？」

ソファに座る青年が読んでいた雑誌から目を離してフェイトさんに顔を向ける。泰然とした物腰の彼はクロノ・ハラウンさん。フェイトさんの義理の兄です。

普段はバリアジャケットを身につけて艦長席に座りの確な命を下すクロノさんは、今はその皮を脱ぎ捨てて休日スタイルを取っている。

「あ、うん。そんなところ」

歯切れの悪い妹にクロノさんは首を傾げる。

「どうかしたのか？ 僕のことは気にしないでいい。ここを使いたいなら僕は自室に戻るから」

読み掛けのページに人差し指を挟み、雑誌を閉じてクロノさんはソファを立とうとする。

「違うの！ その友達がクロノに会いたいわって」

「僕に？」

待ってましたと言わんばかりにクレイさん、颯爽登場！

「よ、久しぶりクロ」

「ぎゃあああああああああー！ーっ！ー！」

泰然とした物腰が一変。耳をつんざくような絶叫を震わせてクロノさんは、とにかくその存在から逃げようと訳も分からずダッシュする。

ガンツ。

物を避ける判断すら失うくらい錯乱状態のクロノさんはベランダを隔てる厚いガラス張りのドアに直撃して転んだ。

「ぎゃあああああああああああーっ！っ！」

即座に立ち上がり、また駆け出す。側の観葉植物に躓いて、また転倒。やることなすこと裏目ですね。

「ぎゃあああああああああああーっ！っ！」

リビングから逃げ出す正攻法な道は現在クレイさんが壁のように突っ立って満面の笑みを浮かべており、

「ぎゃあああああああああああーっ！っ！」

とうとうクロノさんは頭を抱えて絶望に打ちひしがれるように倒れ込んだ。

兄の威厳が一瞬で打ち砕かれる様を見せ付けられたフェイトさんは、予想の斜め上をいく展開に呆然としている。いつも冷静沈着な兄がブチ壊れた。

「クレイ……一体何をしたの？」

クレイさんは飄々と答える。

「遊び？」

「なぜ貴方が生きていますか？」

何とか落ち着きを取り戻し、ソファに座り直したクロノさんは、やや憔悴を浮かべつつだがテーブルを挟んで正面に座るクレイさんに問い掛けた。

兄として大切な物を無くしてしまった気もするが、クロノさんはこちらを優先する。

フェイトさんが煎れたての珈琲を差し出してクロノさんの隣に腰掛ける。ぶっちゃけかなり興味津々です。

「貴方が行方不明になった事実が流れた瞬間、管理局は軽いお祭り騒ぎになっていたというのに」

「マジか。これはもう、もう一度局入りして局員を恐怖のどん底に」

「やめてください！」

妖魔を狩った後に言った台詞を思い切りひっくり返した冷酷な発

言はクロノさんに制止される。当時を知る局員が知れば勇者登場！
と大いに湧いていたでしょう。

「貴方は相変わらずですね」

「結構変わったほうだぞ。人に優しくできるようになった」

「二十代後半の男が言う台詞じゃありませんから！」

「あ、そんなこと言うんだ。へー。……………あれは十年前の真夏日
だったかな？ 海水よ」

「素晴らしい進歩だと思います！ お願いですから消し去りたい過
去を掘り返すのはやめてください！」

遮るように強く懇願するクロノさん。一体どんな弱みを握られて
いるのやら。

しかしフェイトさんが反応したのは別のところだ。

「クレイが二十代後半ってどういうこと？ それにクロノが敬語を
使っているし……………」

フェイトさんはクレイさんが局員だったことしか知らない。かや
の外にいるような気がして横槍を入れた。クロノさん的には大喜び
です。

「そーいや言ってなかったっけ」

聞かれなかったし、言う必要性も感じられなかっただけで隠して

いたつもりはない。

「リンカーコアを失った時、理由は分からんがその反動で身体が縮んだんだよ。幼児化とでも言えばいいのか……まあ、なってしまったものはなってしまうたから仕方ないと割り切って今ここにいるわけだ」

「じゃあ実際の年齢は」

「クロノの言った通り。こいつの先輩だったから敬語を使ってるんだよ。あーゆーおーけー？」

「な、なんとか」

信じられない出来事だが、フェイトさんは辛うじて処理に成功する。だが考えてみれば、あれほどの風格や威圧感を十五年しか生きてない餓鬼が出せるわけがない。

「……敬語使ったほうがいいかな？」

「気にしなくていい。あ、クロノ。お前は駄目だぞ」

「そついうと思ってました」

投げやりするように答える。

「リンカーコアが無くなったというのは？」

「ググレ」

ピキツとクロノさんに青筋が浮かぶ。

「言つつもりはないということですか？」

「お願いしますって頭下げてみな」

不遜な態度でニヤリと笑う。

「クツ……お、お願いします」

「嫌だ」

局員には容赦がないクレイさんは本当に悪魔です。角や黒い翼が生えていても何の不思議もないでしょう。

「さて、そろそろ帰るか。夕飯の支度もあるし」

珈琲を一気に飲み干してクレイさんはソファから立ち上がる。おちよくったクロノさんなんて完全に眼中にない。

我が道をひたすら突き進む彼はリビングから出て行く瞬間も、やはり悪魔でした。

「あ、俺明日から局に復帰するからよろしく」

「んな……!!」

「馬鹿は騙されるー」

「……………」

数秒後、パタンと扉が閉まる音を最後に音が途絶えた。

俯いてすっかり沈黙したクロノさんはむしろ不気味で、フェイトさんは恐る恐る様子を伺う。

「ク、クロノ……?」

するとクロノさんは、

「フフ……フフフ……」

引き攣った笑みを浮かべてゆらりと立ち上がる。

次の瞬間、その手に握られていた水色のカードをフェイトさんは認めて驚愕した。

「デュ、デュランダール!? どうしてそんなものを」

「どうして? そんなの決まっているじゃないか。あの悪魔を永久凍結させるんだ。毎度毎度毎度毎度毎度毎度毎度毎度 会う度におちよくって馬鹿にして遊び道具にして嫌がらせばかりして……フ、フフ……フフフ……フヒヤヒヤヒヤヒヤ!」

過去の傷跡が一気に蘇ったのでしょね。完全に頭のネジが飛んでイッチちゃってます。焦点も合っていません。

「お、落ち着いてよクロノ! クレイには明日ちゃんと言っておくから!」

前作短編2（前書き）

勢いとノリだけで執筆したやつなので期待はしないでください。
まじで。

これを書いていた時の私は楽しかった。けど冷静に考えると「ヤバいだろ、これは」と冷や汗ダラダラ。しかしせっかく書いたので投稿しましたが、本当に期待はしないでください。これはネジが飛んだただの暴走小説です。きっと批判パないです。

あと、精霊王ではなく、シルフにしといたのは、書きはじめ当初、テイルズのシンフォニアのシルフ三姉妹を登場させようかな、と検討していたからです。これに関しては今も検討中ですが。

もう一つ、シルフではなくマクスウェルと契約してミラ様登場も考えてましたが、これは没。

あ、この短編本当にご注文ください。ただの思い付き小説です。

P・S 画像投稿してみました。クレイとフェイトさんです。
携帯版に直せばパソコンからも見れると思います。

前作短編2

クロノさんへの残酷な仕打ちから分かるように、クレイさんは良心というものがなかなか働かないドSさんです。優れた観察眼で他者のコンプレックスを見抜き、慰めではなくより深い傷を負わせ、追撃とばかりに塩を塗り込むとんでもない鬼畜野郎ですが、彼にも弱点というものは当然存在します。

Sキャラはサディスティック性が深まれば深まるほど皆さんに強い印象を与えるのですが、その印象を植え付けるためには犠牲になるキャラが必要不可欠。犠牲キャラが見せる苦痛や悔しさといった反応の度合いが大事なのです。

つまり苦痛や悔しさ。そういった負の感情を与えることができないければSキャラは栄えないのです。所詮その程度か、ハッ、といった間にかSキャラからツツコミキャラへとジョブチェンジしてしまうのです。

今回はそんなお話。クレイさんの弱点が彼の精神をズタズタにするお話。言わば因果応報なお話なのです。

Sub Event? クレイさん、天罰です。悔い改めなさい

「思わぬ収入だったな」

海鳴市の繁華街　高層ビル二つに挟まれた薄暗い路地からひよっこり姿を現したクレイさんは嬉しそうに呟いた。

新学期を迎えてそろそろ一月が経とうとするこの日、時神クレイさんは片手に収まる複数の財布から有り金全てを抜き取って気分は上々。

相変わらず捉えどころのない飄々たる笑みを浮かべ、ペイツとダ イエットに成功した財布を後ろに投げ捨てる。軽くなった財布が当たったのか路地からは「うっ」とか細かい呻き声が聞こえた。

季節は春。冬の名残である冷たい風も暖かなそよ風に変わり、数週間前は当然のようにあったコートも過ぎ去りし産物になりつつある。そんな日の休日は人の心を緩やかに解放させるのか良からぬことを企む輩もいる。

群れを為して借り物の強者を語り、弱者から金品を巻き上げようとする連中が。

クレイさんは標的だった。緋菜ちゃんがお友達と遊びに出掛けて暇を持て余したクレイさんは一人繁華街に繰り出した。白のＴシャツに黒の長ジャージという比較的簡素な服装だが学生の身分なら部活動の帰り道という建前を利用できる。

欠伸をかきながら人込みをゆったり歩くクレイさんは端から見れば平凡な、それでいてただの弱者だった。見た目もいいから成人前の悪ぶった男の子たちのひがみも入って、まさに格好の的だ。

クレイさんは基本隙を見せない。精霊術の操作力とマルチタスクの向上も兼ねて半径五十メートル内にいる風の精霊と意識を通わせて全方向を常に知覚しているのだ。暗殺規模になれば風の精霊が事前に知らせてくれるので裏の世界の人間ですらクレイさん暗殺は容易ではないのです。

そんなクレイさんは前から歩いてくる四人の若者を、その胸の内まですつぱり見抜いて薄い笑みを浮かべた。それは間近で見なければ分からない明確な嘲笑。

少し横にずれるなんて救済処置も施さない。悠然とした足取りで真っ直ぐ進む。その場合でもクレイさんと四人組の若者がお互い直進のみすればぎりぎり当たらない距離なのだが、

トン……。

すれ違う瞬間に軌道を僅かに逸らした若者とクレイさんの肩が触れ合った。

結果は言うまでもない。くだらない因縁を付けられて路地に連れ込んだ若者四人は瞬殺された。

一般人相手に精霊術を使っではいけない　そんな遵法精神なんてクレイさんは知ったことではない。ええ、そうですね、クレイさんは精霊術を使いました。大気を圧縮させた風の拳打でタコ殴りして重傷を負わせました。

その上、若者四人が目的としていた金品強奪をして　そして冒頭に戻る。

クレイさんのHP　4360 / 4360

(緋菜にケーキでも買ってあげようかな)

奪った金の使用に何の抵抗もない。さすが悪魔です。

ちょうど目の前の信号を越えた先に『喫茶翠屋』と看板が飾られた建物がある。雑誌やクラスメイトの会話の中で話題になったことのある喫茶店。確かケーキと珈琲が高い評価を得ていたような、と思いついたクレイさんはそこでケーキを幾つか買おうと決意した。

信号が青になり、足を進めようと一歩踏み出したところで、

「時神。こんなところで会うとは奇遇だな」

彼の天罰が始まりました。

精霊術を私欲のためだけに扱ったからか、風の精霊がちよつとした罰としてある男の存在だけはクレイさんに知覚させなかったのです。

まさか、ありえない、冗談だとクレイさんはギギギと顔を回し

て五年ぶりに生まれた死角を認めます。

現実には彼を突き放す。

「ハム……貴様」

そこには爽やかな笑顔で軍服を着こなした担任の教師が。風の精霊がわざと知覚させなかった唯一の存在。

「ここで会ったのも何かの縁だ。少し私に付き合え」

「却下」

「では参るぞ」

そう言ってハム先生は信号を渡らず左折する。

「一人だな」

クレイさんは目的通り信号を渡ろうとしたが、風の精霊が上位種風の精霊シルフの命を伝えた。契約者だからこそクレイさんとシルフはお互い通じる権利を持っている。

ピタッと足を止めた。

（俺についていけというのか……！？ ハムの後についていけというのか！？）

当然ながら自業自得です。自らの行いを悔いる日が来たのでしよう。

「……………はあ〜」

深い深い溜め息を着いてクレイさんは渋々とハム先生の後を追った。

クレイさんのHP 4360 / 3896

翠屋から徒歩十五分の距離にあるジムにハム先生はすなりと足を踏み入れた。行きつけなのか慣れた手つきで受付を済ませると、

「少しここで待ってる」

そう言っつて奥へ消えていく。数分して戻ってきたハム先生は軍服からランニングTシャツとハーフパンツに着替えていた。

「時神は既にトレーニングができる服装だから問題ないな」

チツ。洒落た服を着ておけばよかった。

クレイさんは顔を顰めつつハム先生の後ろを歩く。案内された場所はベンチプレスやランニングマシンなどのトレーニング機材が豊富な部屋でたくさん男性が利用中だ。

筋肉隆々な男や華奢な男、中肉中背な男など様々な種類の男が汗水流して己が身体を鍛えている。

流れる汗。

吹き出る汗。

ほとばしる汗！

「止まらないなあ……。ワ・ク・テ・カ・が 止まらないあー！」

ハム先生は雄叫びを上げてその輪に加わる。フン、フンと鼻を鳴らして腹筋を開始した。

「……………帰りたい」

沈痛な面持ちでクレイさんは歎いた。

クレイさんのHP 4360 / 3106

ハム先生のトレーニングはおよそ二時間で終わった。汗をシャワーで流して再び軍服に着替えた彼はクレイを巻き込んでバスに乗り込む。

「何処へ行くつもりなんだ？」

「ふっ、行けば分かる」

ハム先生はクールに笑うだけだった。

バスに揺られて数時間。たどり着いた場所はお台場。

そこにはハム先生の大好物がありました。

等身大のガンダム RX-78。とにかくガンダムと名のついたものに目がない彼は何度もこの場に足を運んでいたのだ。

(そういうことか)

納得したクレイさん。彼は等身大のガンダムにそれほど興味はなく、頭の中にはサツサと帰りたい思いが詰まっていた。

時間帯を考えればこれがラストミッションだろう。クレイさんは壁にもたれて等身大のガンダムを一瞥すると天を仰いだ。

すると、こんな声が聞こえてくる。

「会いたかった 会いたかったぞ、ガンダム！」

タラリと冷や汗が流れる。警報が脳内で鳴り始めた。

クレイさんは完全に引き攣った表情でハム先生を見る。

彼は童心に返ったかのように実に楽しそうな表情で、懐からデジカメを取り出した。

「やはり私とキミは運命の赤い糸で結ばれていたようだ！」

それを振りかぶり、

「そつだ。戦つ運命にあつた！」

パシヤッ。

シャッター切る効果音が虚しく響きました。

クレイさん、何とも言えない表情です。

敢えていうなら、マジか？

「ようやく理解した。キミの圧倒的性能に、私は心奪われた。この
気持ち……まさしく愛だ！！」

パシヤッ

「だが愛を超越すれば、それは憎しみとなる。行き過ぎた信仰が内紛を誘発するように」

そう言っつてハム先生はクレイさんに熱い目を向ける。言葉は不要だった。ハム先生が何を求めているか、手に取るように分かった。

(言えというのか？ この茶番に付き合えと？)

ああ、もう！ とクレイさんは自棄になった。これさえ終われば帰れるのだ。

「それが分かっているがらなせ戦うー(棒読み)」

クレイさんのHP 4360 / 2460

「軍人に戦いの意味を問うとは ナンセンスだなあ!!」

パシヤッ。

「貴様は（色んな意味で）歪んでいる！」

「そうしたのはキミだ。ガンダムという存在だ！」

パシヤッ。

「だから私はキミを倒す。世界などどうでもいい……己の意志で！」

「貴様とて世界の一部だろうにー（棒読み）」

「ならばそれは世界の声だ！」

「違う。貴様は自分のエゴを押し通しているだけだ。貴様のその歪み、この俺が断ち切るー（棒読み）」

「よく言ったガンダム！」

「うああー」

「うおおおおー！ーっ！ー！」

パシヤッ。

なぜか息も絶え絶えになったハム先生は、

「ハワード……ダリル……仇は」

満足な笑みを浮かべてパタリと気絶した。

……本当に、なぜ？

風の精霊がハム先生を知覚して情報をクレイさんに渡す。つまり、もういいということだろう。

ようやく罰から解放されたクレイさんでしたが。

クレイさんのHP 4360/0

ハム先生の茶番に付き合わされた結果、魂が口から抜けています。ほわほわと。

その後、彼らの行方を知る者はいない。

ということはないんですけどね。とにかく今回はそうだったお話です。

クレイさんの苦手なもの。

DMの快樂主義者 ハム先生。

魔法使い召喚しますた（前書き）

すみません、Main Event?を完結させてからの予定でしたが、やはり戦闘描写ができず挫折しました。「気」の設定を使わなかったのが痛手。ヒュンヒュン飛び回る魔導師との戦わせ方が全く思い付きませんでした。

新しく始めるに至ってタイトルも変えさせていただきましたが、主人公は引き続き悪魔さんにやってもらうつもりです。

魔法使い召喚しますた

三国の世界にトリップするところから始まる某ゲームの鳳統さんそつくりの容姿をした幼女は言いました。

「最強の魔法使いになるためにここ百年前後から検索掛けて最強の魔法使いを召喚しましょう。それから魔法を教えてもらって私TUEEEE！状態になります」

そんな欲望にまみれた幼女の隣で、同じく幼女が応えました。

「雛里ちゃん、雛里ちゃん。なのは、大人になった自分を見てみた
い！」

純粹無垢な子供らしさを持った少女はペカーツと明るい笑顔を浮かべています。隣の陰険幼女とは大違いです。

雛里と呼ばれた陰険幼女はやれやれと肩を竦めますが、

「仕方ないですね。どうせ大人なのはなんて今と変わらず無駄にお人好しでつまらねーそうですが、今の私はおおらかなので認めてあげましょう」

早い話が『うん、いいよ』ということ。棘のある言い方をしますが、彼女はなのはと呼ばれた少女が大好きなのです。しかし陰険幼女は素直に感情を表に出すことはできません。だって陰険ですから。

「やったー！」と喜ぶのはさんを横目に苦笑を漏らし、雛里さんは足元に広げた分厚い本をもう一度見て最終確認をしました。

コクリと頷いては首に巻いてある鈴付きの黒いチヨーカーに触れます。するとチヨーカーは清列な薄く蒼い輝きを放ちながら解けました。

チロリン。

鈴が透き通る高音を奏でて鼓動を刻みました。

「フォーチュンベル」

光が雛里さんを覆う。

チロリン……チロリン……カラン……カラン。

安物のベルが放つか弱い音がいつの間にか強く逞しい鐘の音に変わります。野太い振動と低い音は、しかし人の心をしっかりと惹き付けて離しません。まるで門出を祝う祝福の鐘のようです。

大人の拳ほど大きくなった鐘を中心に、空間に生じた金属の部品は組み立てられて杖の形を取りました。杖の頭には純白の翼が左右に広がり、柄には天使の輪のように金色のワツカが浮かんでいます。

同時に雛里さんの白い制服がはじけ、黒を基準にした新たな衣服が身を覆いました。

最後に真っ黒なトンガリ帽子が頭にポスッと乗っかって出来上が

り。

なのはさんが締めにあります！

「魔法少女マジカル雛里！ 参・じよ」

「前にも言ったはずです。黒歴史を暴く真似をすれば……」

ワカリマスネ？

ノリノリな気分のなのはさんに陰険幼女は杖を突き付けました。

” 幸せな鐘” を脅し道具に使ってますこの人。

いつでも大親友の顔を吹き飛ばせる目をした雛里さん。なのはさんは大量の脂汗をダラダラ流しながら必死に首をブンブン縦に振りました。

「全く、なのはは全く」

プクーツと頬を膨らませながら雛里さんは突き付けた杖を引き戻して、地面に末端を軽く叩く。

雛里さんが杖を離しますが、杖は倒れません。水面を打ったように光の波動は輪を描いて広がります。

キン！

弾かれたような高音と共に杖を中心に五芒星の魔法陣が敷かれま

「よし、できました」

準備完了。雛里さんは両手を腰に当ててその光景を満足げに眺めます。

「雛里ちゃん、早く早く」

「急かすんじゃないです」

なんて言いながらも雛里さん、口元は緩んでいます。待ちきれないのは彼女だって同じなのです。

真つ直ぐと魔法陣を敷いて立つ杖を見据え、雛里さんは手を掲げて魔力を更に注入します。

そして言葉を発して魔法を完成させました。

「サモン　　！！」

溢れる薄蒼い輝きが全てを飲み込みました。

時神クレイは小難しい表情を浮かべて空を飛んでいた。

「ん……珍しく俺ピンチかも」

しかし脂汗一つ浮いておらず、とりあえずそんな顔を取り繕っているように見える。目の奥に宿る怪しい光は自らが口にしたピンチを楽に乗り切る自信に溢れていた。

後方から、まるで大群の弓兵が一泊の休みも取らず矢を放ち続けるように殺傷力のある光が襲い掛かってくる。風を切り、クレイの身体を何としても貫かんとする光芒は確実に距離を狭めつつあった。

「緋菜、ちゃんと掴まってるんだよ」

「ん」

控えめな返答が胸の辺りから届く。

クレイの両腕にしつかり抱きしめられ、その小柄な身体を密着させているのは彼の義妹である時神緋菜。ふんわりと優しいウェーブを描いた長い金髪はとても瑞々しく、枝毛一つ見当たらない。今はギョツとつぶられている瞳は大きな碧眼だ。

新雪のように白い肌、柔らかな身体がギョツと抱きしめてきたのを感じ取ってクレイはクスツと笑い、緋菜の頭を一撫ですると、翼を羽ばたかせた。

多少のファンタジックさを感じる礼装を着用する彼の背中　実際は背中より拳二つ分距離を置いた中空　には大きな翼があった。

右翼は純白。

左翼は漆黒。

魔力で精製された両翼は爆発的な速力と精密な飛行機能、更に強靱な護りを持っており、彼の嗜好により羽ばたくと本来散るはずのない魔力精製された羽根が綺麗に舞い散る仕様だ。

そして双肩にはそれぞれ一振りの剣が　これもまた少し距離を置いた中空に　浮いている。聖剣と魔剣。そう例えてもおかしくないくらい白と黒の対を為していた。

翼を飛行の補助に置いたクレイの身体が空を踊る。

遂に光芒が彼を捉えた。

「まだだ！　まだやられんよっ」

軽口を叩きながら、直進するしかない数々の光芒を回避する。風に乗るようにしなやかな運動は柔らかで、たまに襲い掛かる優秀な光は身体をスピンさせて遠心力のついた翼で受け流す。

彼の後方には大軍が横に陣を広げている。百を超える魔導師たちがたった一人の男を殺すために結集したのだ。

「イジメすぎたかねー」

我関せず。その理由を認知しておきながらクレイは他人事のように薄っぺらく呟いた。

大軍の傍に飛ばしたサーチ魔法が連中の怨嗟の声を拾う。

『遂にこの時が来た。遂にあの悪魔を打ち倒す時が！』

『毎度毎度我らを玩具にして嘲って……我らの痛みを知れ！』

『時神クレイ！ お前が父さんを殺したんだ！』

『何で市民は気付かない！？ 英雄？ あれは魔人だ！』

『お前は生きていちゃいけない人間なんだ！』

『クヒヒ……ウケケケケ……！』

脳に再生されたそれを聞いて、

「うぜっ」

鬱陶しそうに顔を曇め、サーチ魔法を消した。怨嗟の声は彼の心に少しも響かなかったようだ。合掌。

（さて、どうしたもんか）

かなりの速力を出しているから追い付かれる心配はない。相手の魔力が切れるまで光芒を回避していれば逃走は容易なのだ。転移魔

法を起動すればそれこそ一瞬で逃げれる。

問題はその後。

連中はこの世界の法の守護者だ。クレイも今まで　という現在も　書類上在籍はしていたのだが、如何せん遊びがすぎた。『市民から圧倒的な評価を得つつ、如何に局員を遊び道具にするか』という腐りきった縛りプレイに興じていれば、反抗もされる。

この状況を打開するのも面白そうだが、緋菜を巻き込むのは彼の矜持が許さない。

おそらく逃走劇を終えたあと、連中はクレイが情報操作や隠蔽をしてきた事実を世界に公表する。世界的に『英雄』と謳われている彼の本性を暴露して居場所を無くすつもりだ。

クレイは薄く笑った。

「舐めるなよ。その程度を覆せない無能じゃないんでね」

名誉挽回の逆転劇を瞬時組み立てる。そういう生き方がすっかり身に馴染んでしまっていた。

「緋菜、ちょっと逃走生活続けなきゃいけないけど我慢してね」

「ん」

ふわふわの金髪に頬擦りをしてクレイは転移魔法を起動させた。

(適当に人気のない森でいいか)

次元を越える必要はない。数百キロ先くらいに移動できれば充分。
そんな軽い気持ちで彼は光に包まれた。

それが次元を越え、時間さえも越えることになるとは思わずに。

平凡な一日（前書き）

活動報告にあった通り、新作にさせていただきました。

前作を楽しみにしてくださっていた方々、勝手なことをして申し訳ございません。

”魔法使い召喚しますた”の続きは生存風に短編をいくつか挟んでにしようと思います。

平凡な一日

曇り一つない空の下。ミンミンと蝉時雨の音が庭の木々から響いてくる。

「なあ、殺していい？」

快適な空間を唯一疎外するはた迷惑な求愛行動に苛立った俺は指先から小さな魔力球を出す。放出すれば俺の思念操作によって空を自在に駆け、耳元を騒がせる蝉たちを打ち抜いてくれるに違いない。

しかし対面のソファに腰を落とす金髪の女は「駄目」と力強く反対した。その隣の栗色の髪をサイドにまとめた少女の意見を聞いてみる。

「なのははどう思う。鬱陶しいと思わないか？ 殺っちゃいたいと思わないか？ 思うだろう。そうだろう。仕方ない。殺ってよし」

「意義あり！ 私はそんなこと思ってませんっ」

「建前はいいから。ほら、本音を言っちゃいな。You 殺っちゃいなよ」

「ジャーニーさん風に言っても乗らないから。これが私の本音だから。蝉に対してそこまでの殺意を抱いているのはクレイクンくらいだよ」

「いや、そんなはずはない」

俺と彼女たちの間にあるテーブル。そこに乗る、もえぎ野という和菓子箱からクッキーを取り出して口に運ぶ。やはりかぼちゃの種とアーモンドが神作だ。

テレビから流れるニュース番組をBGMに、咀嚼を終えた俺は続きを紡ぐ。

「夏休みの宿題に追われている少年少女は一度くらい蝉に『うつさい！』と叫んだことはあるはずだ。つーか先週の夏休み最後の日にチビなのはが『うるさいのっ』ってブチ切れて集束砲撃放ちそうだったのを忘れたのか？ おとなのは」

「その区別はやめてくれないかな！？ 大人なのはドッキングさせておとなのはって質素すぎるよ！」

「ジャイアントなのは」

「ごめんなさい、おとなのはでいいです」

「弱いなお前」

「うう……まさか過去にタイムスリップすることになるなんて。しかもフェイトちゃんにヴィヴィオまで巻き込んで」

もう一枚クッキーを咀嚼しながら、ガクリとうなだれたおとなのはを眺める。

「気にしないでよなのは。突然光に包まれたなのはに私とヴィヴィオが飛び付いて勝手に巻き込まれただけだから。でも、まさか過去

に飛ぶことになるなんてね」

フェイトは苦笑する。

「雛里ちゃん。本当にとんでもない魔法を使ってくれたよ」

「過去、もしくは未来から召喚対象を連れてくる……確かに規格外だな。頭の中のほうも」

「クレイクンも人のこと言えないでしょ」

なん……だと……！

「ブリーチ顔はいいから」

「俺はまだマシな方だろ。使う魔法も分類分けできるやつばっかだし」

「頭のことを言ってるの。ちなみに心の方も」

「言っじゃないか、ジャイアントなのは」

「だから馬場みたいに言わないでって」

俺たちはこの世界の住人ではない。この世界を視点に置くなら平行世界や未来から玖蘭雛里という欲望にまみれた幼女の手によって召喚された別次元ではなく別世界の人間だ。

俺は義妹の緋菜と、

おとなのはは親友のフェイトと二人の娘のヴィヴィオと。

雛里とこの世界のなのはの願いによって召喚されたのだ。

召喚したはいいものの帰し方が分からない。そんなありがちな反応を雛里がしてくれたので、この世界には長らく居続けることが決定した。

そうなるとう当然俺たちは路頭に迷うわけで、銀行強盗でもしようかと考えていたところ、召喚した雛里が「ウチに済めばいいのです」と言ったので、この玫瑰蘭家に異世界人五人は住まわせてもらっている。まー当たり前なんだがな。

ちなみに緋菜に雛里にヴィヴィオの三人は現在学校で勉学に励んでいる最中だ。異世界だろうとやることは変わらない。皆同じクラスだから緋菜も結構気に入っているはずだ。

しかし、それに比べて俺たちは……。

「暇だな」

「暇だね」

「うん、暇」

学校に通うような年齢ではないので、家で駄弁って食っちゃ寝して、たまに模擬戦で身体を動かすくらいしかやることはない。

「駄目人間まっしぐらだな。いい加減、職を探すか」

そう呟くと、二人はピクツと反応した。

「意外だね。クレイはこういう生活気に入っていると思ってたけど」

「一日中だらけて緋菜ちゃんと甘々な空気垂れ流すのが一番の幸せなんじゃないの？」

こいつらは俺を何だと思っている。否定はせんけど。

「兄として、敬愛対象で居続けるのは当たり前のことだ。お前ら、ヴィヴィオに『はあ……まあ、なのはママにフェイトママ……うっ、なのはさんにフェイトさんだもんね』なんて悲しげにかぶりを振られたらどうよ」

「はぐうあっ！」「」

ザシュツ！ 改心の一撃。

おとなのはとフェイトは胸をギュツと抑えてテーブルに倒れ込んだ。衝撃を受けてもえぎ野が飛んでくる。

「これは全部もらっていいということか。いただいておこつ」

「駄目ッ」

フェイトがすかさず奪い取って自分の分とおとなのはの分を傍に置く。

「でも働くって心当たりあるの？」

ピリツとビニールを破いてフェイトはハムスターのようにカリカリカリとちまちまクッキーを食べる。成人女史のやる行動ではないが、スルーしておこう。あ痛たたた。

「なのはの家族が経営している喫茶店が人手不足らしいからな」

「え？ 私、そんなこと言った？」

「お前じゃない、おとなのは」

「にゃー！ 紛らわしい！」

だからおとなのはと呼んでいるんじゃないか。

「ウェイター？」

「厨房。高校生や中学生なんて糞餓鬼に愛想振り撒くなんて死んでも御免だからな」

俺は自分より能力の低い人間の下についたり、敬語を使うのは嫌いなんだ。

「『あのー、これー。髪の毛入っちゃってますけどー？ どういうつもりですかー？ 謝ったって済む問題じゃないっスよ。飯代タダっしょフツー。みたいなー？』なんて言われた日には一族郎党皆殺しにしかねん」

「うん。是非とも厨房でお願い」

フェイトは深々と頷いて賛同してくれた。

「で？ お前らはどうするわけ？ ニートども」

「私は……どうしよっかな。こっちの世界の管理局に入隊しようかな」

「そうしてお前はこっちの世界のフェイトと出会ってめでたくあだ名が着くわけだ。おとフェイト……ジャイアントフェイト……ジャイト？ ジャイフェイ？」

「私も翠屋で働く！」

即決。今までの逡巡が嘘のようにマツハだった。そんなにあだ名は嫌か？ おとクレイ……おとクレ……確かに嫌だな。おとなのは変更せんが。

「ウェイトレスも何だか面白そうだし、実は一度やってみたかったんだっ」

後付けなのが見え見えだな。無理矢理取り繕っている感が否めない。

「おとなのはは？」

「おと もういいや」

突っ込むのを諦めたおとなのはあだ名を受け入れることにしたようだ。沈んだ様子でかぶりを振った。

「二人が翠屋で働くなら、私もそうしよっかな。一通りの仕事はで

きるし」

「昔からお手伝いしてたもんね」

「そうなのか？」

魔導師一筋だと思っていたから少し意外だった。

おとなのはは苦笑混じりに頷いて、

「囑託だった小さい頃はよくやってたよ。盛り付けとか掃除とか」

「たまに私も手伝ってたんだ」

「懐かしいよね〜」

ほのぼのと甘い雰囲気を通して、おとなのはとフェイトは、あんなこともあったねーと昔の語らいを始めた。

色んな話がほいほい飛び出てくる。

皿を割ってしまったたり、注文のミスをしてしまったり、客に粗相な真似をしてしまったり。そんな話はいつの間にか年少期まで膨らんで、

「そういえばなのは、運動会のかけっこでスタートと同時に転倒してアリサを巻き込んだんじゃったよね」

「フェイトちゃんだって音楽祭で、歌い終わって退場する時に『へう！』って大声出して転んじゃったよ」

「あ、あれは緊張してて」

「私だって同じだよ。緊張つて言えば中学の文化祭ではやてちゃんに無理矢理お笑いコンビ組まされて舞台上げさせられたよね」

「それは多分一番触れちゃいけないこと……」

「……恥かいただけだもんね。あの後浴びるように空を飛んだよ」

「はやて、その様子を録画しながら大爆笑してたよね」

「それは大丈夫。空を飛んで落ち着いてからブレイカーで葬ったから」

「パソコンとかにデータ入れてそうだけど。はやてのことだから」

「……………」

「……………」

「未来に戻って一番にやることが決まったね」

「うん。武力を行使してでも破壊しなきゃ」

いわゆる黒歴史隠蔽のために握り拳を作つて意気込む二人はかなり険しい表情だ。最悪はやてという人間を殺り兼ねない。

「……時に」

俺は会話を阻んだ。

二人の視線が俺に向く。

「ずっと気になってたんだが、お前たちは二十一年の人生の中で一度足りとも恋愛をしたことがあるのか？」

「(サツ)」

刹那の内に顔ごと背けられた。

思いつ切りの射たのだろう。だらだらと冷や汗を流して表情を硬直させている。隠し事がばれた子供のように身体は震えていた。

「二人ともさ。身体のめり張りは充分あるけど、あれだよな。色気が全くないよな」

トドメに核心を突く。

おとなのはは成人女性の平均的なそれで、フェイトは平均的を越えるスタイルを誇っている。容姿も全く言って良いくらい問題ないのだが、致命的なものが欠落している。

それが色気。

若さで勝負が出来ない成人女性は少女時代で培った経験を元に男を惹き付ける技量を開花させなければならんというのに、こいつらは未だ青臭い匂いが残っている。

恋より仕事を優先した成れの果てが 俺の目の前に二人。

「残念過ぎる……。その様子じゃファーストキスもまだなんだろうな……。強く生きるよ」

「やめてええ！ そんな可哀相な子を見る瞳で私たちを見ないでええー！！」

「出来るよ！ 私たちだってその気になれば彼氏の一人や二人くらいきつと！」

女としてのプライドがまだ残っていたのか、フェイトが噛み付いてくる。絶叫するおとなのはもそれに便乗した。

「そ、そつだよ！ 私たちの手に掛かれば……。もう、とにかくすいよ！」

見事なまでにテンパっているのが分かる。

俺は口角を吊り上げて、

「なら、実際に試してみよう」

「え？」

「だから、これから町に行って逆ナンでもして証拠を見せてみなさいよ。『その喫茶店で軽くお茶を飲みませんか？』って社会人を誘ってみなさいよ」

頭の悪いチャラ男や高校生では駄目だ。知性のある瞳や仕種、ちよつと硬派だったりお固い奴を誘うことができれば、

「もし成功したら土下座でも何でもしてやる」

その賭けに乗るように、足と腕を組み、わざと不遜な態度で二人に不適な笑みを向ける。

神経を逆なでする小馬鹿にした仕種に、獲物はあっさり引っ掛かる。

「いいよ！ やってあげる！」

おとなのはが勢いよく立ち上がり、

「さっきの言葉、忘れないでよね！」

フェイトが俺に指を差してくる。

更に言葉を合わせて、

「首を洗って待っててよ！！！」

数時間後。

「ただいま」

「ま

「です」

日が傾き出した頃に子供組が帰宅する。

リビングで寛いでいた俺は腰を上げて出迎えた。

「おかえり」

玄関に出ると小学二年の三人が靴を脱いで上がってくる最中。

にこやかな笑顔を浮かべて両手を広げると、吸い込まれるように
緋菜が飛び付いてくる。

ポス、ポス。

効果音が一つ多いのは、なぜか一緒にヴィヴィオも飛び付いてきたから。

まー、いいか。ペカーツと無垢な笑顔を浮かべられると拒絶もできない。二人揃ってギュツと抱き上げて愛でる。その横を雛里が年不相応のクールな表情を浮かべて通り過ぎて、リビングに入った。

「じゃあ二人とも、冷蔵庫にケーキ作ってあるから手荒いうがいを先に済ませてらっしゃいな」

「はーいっ」

「んっ」

両手から解放してあげると二人は小走りで洗面所に向かった。仲

良いな。

そんな微笑ましい光景を見送った俺は踵を返す。

同時に雛里がリビングから出てきた。

「クレイさん。何でおとなのはさんとフェイトさんが真っ白な灰になっちゃがんですか？」

「まあ、色気は大切ってことだ」

灰色ですって

『容疑者の家にはアニメのフィギュアや漫画が大量に置かれてあり
』

そんなニュースが流れて、俺は思わず読書を中断する。

「家宅搜索してそういう系のものが見つかったらメディアは結構注目するよな」

「そうだね。元凶ってわけじゃなくても、とりあえず放送してアニメや漫画にはまり込んでいる人の数を減らすつもりなんじゃない？」

パソコンのキーボードに指を走らせていたおとなのはが顔を上げて言う。

「今すぐってわけじゃなくて、将来性を見越して。親がこういうニュースを見れば子供に注意するのはおかしいことじゃないもん」

「お宅の方針は？」

「特に注意はしないかな。そんな偏見や先入観で人を判断する子にならないでほしいから」

「理想像だなー。でもそんなおおらかだと悪い奴に騙されるぞ。連帯保証人になってくれーって」

「もしヴィヴィオにそんなこと知る人がいたら　ね？」

ニツコリと微笑んだ表情は暗影としたものがあって迫力がある。子供に見せていい顔じゃない。

「クレイクンだつてそうでしょ？　緋菜ちゃんが騙されそうになつたら」

「そいつバインドで縛つて家族知人友人全てを目の前で殺す。まだ正気を保つてたら、死ぬこともできず発狂することもできない加減で徹底的にいたぶる」

「あはは、クレイクンらしいね」

突っ込まず、世間話をするような仕草で受け入れた。元局員さんはどうやら俺と同じくらい、娘に対して過保護のようだ。

「でもオタクつて識者から相当な偏見をもたれているようで　案外そうでもないよな」

「うん。漫画とかの創作物じゃ嫌悪感を露骨に描かれているけど、普通に受け入れられる人つて多いよ。私も気にしないし」

「むしろ若干そつち寄りじゃないか俺とおとなのはに離りは」

ブリーチ顔やめるとか突っ込んで来たし。

「そんで、ちょっとマイナーなネタを使つたら、そつち方面に詳しくない連中にキョトン顔されて説明を入れるという恥をかかされる」

「あ、分かる。この前体調崩した時、フェイトちゃんに『かゆ……うま……』って伝えたら『おかゆ？ 美味しい？ なのは、いつおかゆ食べたの？』なんて切り返されて危うく一食抜かれるところだったよ」

「純粹は怖いな。そっぴや、そのフェイ党は？」

「そんな集団名みたいな言い方しないで。フェイトちゃんはお買い物に行ってるの」

珍しく定位置にフェイトがいないと思ったらいつの間だ。

俺は携帯を開いて『ケーキの材料買つといて』とメールを送る。今日の分は作ってあるが、材料は切れてしまったのだ。

「まー、オタクも自身によりけりっことだな。社交性のある人間ならオープンにしても問題ないだろうし、社交性の無い人間は溝を作って漫画とかの露骨な描写が相俟ってより溝を深くする」

「まさしくカオス」

台無しだ。

「あるある的なことを言えば私たちと漫画のキャラたちの温度差って凄いよね」

温度差ありすぎて風邪引くわ！ だつたか後藤さんよ。

「例えば？」

「一人のキャラが奇抜な行動や発言して、私たちが笑っているのに対して他のキャラたちはツッコミ入れたり冷やややかな視線を向けていたりで、読者や視聴者みたいな反応をするキャラって見たことないよ」

「あるな。普通にあるな。これが定石みたいなもんだし、その温度差も笑いの一つに組み込んでいるんだろ。小説じゃ鬱陶しいだけだしな」

『あははははは！』だけの文章の何が魅力的か。

「ラノベとか殆どの作品が『平凡主人公』『超絶美少女ヒロイン』『鈍感』の三つの要素を含んでいるけど、ああいうのイラツと来ないか？ 学園物だったら分かるぞ。でも戦闘有りの作品で無能で優しいだけな主人公の優柔不断っぷりが俺の神経を刺激する。そして、それにコロッと惚れ込む安っぽいヒロインも」

ギャルゲとかもそうだな。

「そうかな？ 私は感情移入しやすくって良いと思うけど」

「ありがちにもほどがあるんだよ。少年誌に出てくるような格好良い主人公が少なすぎるんだ。剣心やトレイン、ナルトみたいな芯の通った主人公のほうが俺は好感が持てる。屈折してる奴でもオーケー」

「それこそ漫画で王道的なものだからラノベで少ないんじゃないかな？ じゃあクレイクンが今まで読んだ中で気に入った主人公のラノベは？」

「伝勇伝、ミスマルカ、聖痕、オオカミさんシリーズの四つ」

「オオカミさんシリーズも？」

「問題ないだろ。最初から最後まで一人の女を愛して成長しようと努力してんだ。あれは好感が持てる部類のはずだ」

「一人の女の子の為だけっていうのがいいよね。私もそんな人ないかなー」

「ねーよ」

「どうして即答しちゃうのかなあクレイクンは！？ 淡い夢くらい見させてくれてもいいよね！」

「成人女性の言う台詞じゃないだろ。あと四年若けりゃ許容範囲内だがな」

残酷だけど未成年と成人の間に引かれた線は大きいのだよ。

「うう……。仕事一筋に生きてきた自分が憎い」

おとなのはは頭を垂れてズーンと重い雰囲気を漂わせる。

「本当に……。本当に色恋沙汰の何もない人生だったな……。灰？ そうだね、きつとこれは灰色なんだ。回想シーンとかが流れるとセピアどころか灰色だけで彩られるんだ。きつと私の立ち位置なんてこれから先も灰色なんだ。灰色キヤラ担当になるんだね。分かるよ。自分のことだもん。クレイクン、これからは私のこと灰なのはと呼んでいいよ」

凄い。達観している。

自らに課せられた使命を果たした人間だけが醸し出す悟った表情で、パソコンの隣に置いてある冷めているコーヒーをずらずと啜った。ほう、と小さな吐息をして顔を上げると、窓から丁度光が差し込んだ。

灰色にしわしわが追加された。思い残すことは何もないとばかりに縁側に腰を降ろす婆さんみたいだ。

これは……限りなく素晴らしい退化。年齢という城塞を攻略できず挫折してしまった証だ。

そこまで気にしていたか。いや、俺がそれを言ったから気付いてしまったのか。

どうやら俺がコンプレックスを追加してしまったようだ。他者のコンプレックスを探し出すのは良いところを見付けるより簡単なのだ。

急展開を迎えるくらいおとなのはにとって年齢と色恋の話はタブーらしい。

何を言っても聞く耳持ちませんよーと大仏みたいな顔をするおとなのは。

俺はボソツと呟いた。

雛里はとんでもない召喚をしてくれたのだ。彼女の魔法なら、

「雛里なら年齢退行魔法くらい作れるんじゃない」

「小学校行ってくるねっ」

唐突に元気を取り戻したおとなのはは転移魔法を起動するかの如く速力で消えた。俺の横を擦り抜けたことにより長い朱髪が突風にさらわれたように乱れる。この時の速力はおそらくフェイトのソレを凌駕していたに違いない。

手櫛で軽く髪をとかしながら、空いて片方の手で起動中のパソコンを反転させて画面を覗く。

『色気ある女になれる108の方法』

「……………」

何も言わず、俺はパソコンを閉じた。

「雛里ちゃん！ 年齢退行魔法を作って！」

「なのはママ、どうしたのいきなり!？」

「学校に不法侵入してまで何ほざいてやがんですか、帰りなさい」

「後生だから!」

「ヴィヴィオ、連れて帰りなさい」

「あ、うん」

「放してヴィヴィオ! 私は取り戻すの! こんなはずじゃなかった世界を!」

「落ち着いてなのはママ。世界はこんなはずじゃないことばかりだよ!」

「そうだった。あと一年までばジュエルシールドが落ちてくるからそれを使えば」

「……………未来のなのは本当に残念ですね」

「にゃ〜! 私はあんな風にならないよ〜!」

第一次スーパー黒光り大戦G（前書き）

硬くて大きくてテカテカ光ってて素早くて嫌な臭いを放つ奇妙な生物。

第一次スーパー黒光り大戦G

第一次スーパー黒光り大戦G

～襲来のG～

しんどい学校がようやく終わり、待ちに待った休日が遂に訪れました。

しかも今日は大人組が喫茶翠屋の面接に行ってるので不在。つまりやりたい放題です。やっほー。

注意する人間が誰もいない以上、私は止まりません。なのはさんやフェイトさんが帰ってくるまで全力で趣味に没頭します。

リビングの隅に設けているデスクトップパソコンの電源を入れて、スプリングの効いた椅子に腰を掛けます。パソコンの隣に置いてあるヘッドホンを装着。

外の世界の音をシャットダウンします。

いつもは夜に一人プレイしていたのですが居候が出来たせいではばらくお預けを食らっております。

マウスを動かしてゲームを起動させます。

『これが私の本性です』

” 18禁” と片隅に記載されていましたが知ったこっちゃねーです。

このゲームはサディスティック星からやって来た主人公、朽木（逆から読むと？）太郎が美少女ヒロインたちを襲い、そのネタを脅迫して調教するといういわゆる抜きゲーと呼ばれるやつです。何を抜くかは言いませんよ、えっちい。

なぜ私がやっているのかと言うと……フ、一言では語れねーぜ、です。

ロードを押して、始めましょう。

秋菜『わ、私、もう駄目ですご主人様ああーっ！』

主人公『あん？ 誰がイッていって言ったよこの雌豚が！』

カチ（停止）

「……………むう」

なんてところでセーブをしゃがったんです過去の私。心の準備が出来てなかったので照れたじゃねーですか。

ふう、と一息着いて改めてスタート。

ポチツとな。

「きゃああーっ！」

……何か聞こえたような？ まあいいです。

秋菜『そ、そんなご主人様っ、私もう限界なんです！』

主人公『うるせえ！ 俺の命令が聞けねーのか、あん！』

「雛里、雛里、雛里〜！」

「なんですか、もうっ」

ヘッドホンを首に掛けて振り返ります。

廊下から声の主であるヴィヴィオが飛び込んできました。

「で、出た！ 出た！ 出たんだよ〜！」

滝のような涙を流しながら、悲鳴を上げるその姿に若干引きましたが角にいる私に逃れる術はありません。

「出たって何がですか？ 快便だったですか？ よかったですね、だからのきやがれです」

しかしヴィヴィオは離れません。

「違うよ！ 快便だったらこんなに泣いてなんていないよ！」

「じゃあ人生ゲームで良い目でも出ましたか？ ハリウッド俳優と結婚とか？ 別に夢を見るのは構わねーですが、あまりのめり込むとリアル世界との落差に絶望しますよ」

「むしろその棘のある言い方に泣きそうなんですが！？」

「ヴィヴィオは泣き虫ですからね。名前みたいにヴィ〜ヴィ〜泣いてそうです」

「はうあつ！ ……否定できない……。でもそれは昔の話だよ！ 今は泣き虫じゃないもん！」

「じゃあその目から出てるものはなんですか？」

「こ、これは……汗っ！ 実は私、目に毛穴があるんだ！」

実に残念すぎる発言です。さすが年齢と色気の話になるとキャラ崩壊を起こすのはさんの娘なだけではありません。

「その取り繕いはボタンの一番上と一番下を掛け間違えるくらいに無理があると気付かねーですか？ 貴女の目には皮膚でもついているのですか？」

「じゃあおしっこー！」

「キモいです近付くなですエンガチヨ人間」

「ごめんなさい冗談です！」

「じゃあとか言ってる時点で丸分かりですけど」

「悪戯に暴言吐かれたただだった！」

「早く用件を言ってください。私はエロゲの続きがしたいのです」

「雛里が散々小道に逸らしたんだよ！」

辟易とする私。ヴィヴィオが何かほざきましたが無視します。

ヴィヴィオはパソコンの画面に興味を持ったのか結局本題に入らず、

「ねー雛里。この女の人と男の人はどうして裸でくっついてるの？」

「大人になれば分かります。なのはさんはまだ未経験らしいですが」

フェイトさんも。

クレイさんは……テクニシャンなイメージがありますね。緋菜と出会う前は相当やってたに違いねーです。とっかえひっかえです。とっかえひっかえ。

「なんか顔赤いし泣いてるよ？ 大丈夫なの」

「快樂の証です」

「かいらく？」

首を傾げるヴィヴィオ。

「だからいずれわかります。貴女が魔法や友情を優先せず適度に男子と親交を築いていれば、ですが」

その二つを優先したあまり悲惨な人生を現在進行形で歩んでいるのが貴女のママ二人です。

お相手がいるとしたらクレイさんですか？ でもあの人緋菜にしか全幅の信頼寄せてませんから攻略は難しそうですね。フラグを最低五十は立てないと結ばれそうにありません。緋菜なら「おにーちゃん。緋菜、おにーちゃんのお嫁さんになる」で、無条件に結ばれそうですが。

「こっちはもういいです。ヴィヴィオが安易に踏み込んでいい世界ではありません。だからいい加減、なんで騒いでいたのか吐きやがれコノヤローです」

「そつだよつ。もう、雛里が変なことばかり言うから」

責任を全てなすりつけますか。

「出たんだよ！ 出たんだよ！ あれが出たんだよ！」

「だから出たつてなになが」

「G……！」

……………え？

ピキッと私の思考回路はエターナルフォーสบリザードをくらい
ました。

頭の中が凍り付き、時が止まり、無の世界に満たされます。

「今………なんて言いましたか？」

硬直した私の思考が自ら答えを弾き出すことはできず、痴呆のよ
うな間抜けな言葉が出てしまいました。

私の耳は間違いなくヴィヴィオの一言を認めていたはずですが、
精神がそれを拒絶したのでしょうか？

嘘だと思いたい。

嘘だと言ってほしい。

もう冗談をほざく余裕すら無くなった私はヴィヴィオから放たれ
る言葉に一縷の希望を求めます。

嘘の「う」を願う。最初の文字がそれであるように、生まれて始
めて神に祈ります。

しかし、現実には残酷でした。

「Gが出たんだよっつ!」

エロゲのことなんてすっかり頭から離れてしまいました。

凍り付いた思考が氷解した私ですが、それは回路が熱暴走を起こしてしまっただから。

「G!? Gつてあれですか、奴ですか!? あの黒くて大きくてテカテカ光つてて速くて臭くて奇妙な声を上げる生物のことですか!?!」

「そうだよ! 黒くて大きくてテカテカ光つてて速くて臭くて奇妙な声を上げるあの生物だよ!」

「なんでそんなものがこの家にいるんですかーっ!」

今まで出たことなかったんですよ!? 週末はいつも何時間もかけてすべての部屋を清潔にしているというのに!

ああ! そういえばヴィヴィオたちを召喚してからそんな暇なくて、そ、それが原因だと言いやがるんですか!?

「ヴィヴィオ! 責任を取ってGを駆逐するです早く!」

「無理だよ! 責任つてなに!? 私なにもしてないよ!」

「なにもしてないのが原因なんですよーっ!」

掃除しなけりやでもしますっ。

「わっ、き、来たああーっ！」

ヴィヴィオが力強く抱き着いて来ました。

き、来た？ 来たってまさか……。

私は戦々恐々としながら廊下に視線を向けます。

すると、ここリビングルームに床を這うように現れたのは
！

カサカサカサ ！

「ひなあああ！」

思わず奇声を上げてしまいました。

出ました！ 出ました出ました出ました出ました！ 黒
くて大きくてテカテカ光ってて硬くて速くて奇妙な声を上げる生物
ーっ！

「ヴィ、ヴィヴィヴィヴィ、ヴィヴィオなんとかするですーっ！」

「だから無理だよ！ 怖いよ気持ち悪いよー！」

「ひなっ！？ こっち来たああー！」

なんで？ なんで！？

普通逃げますよね！ Gとか虫と違って普通逃げますよね！？
なんで立ち向かってきやがんですかコノヤロー！

「糺里、殺虫剤置いてないの！？」

「キッチンの棚に置いていますが、Gが立ち塞がっています！」

リビングとキッチン。目に届く距離にあるはずなのに接近してくるGが丁度そこで止まりました。

『フフフ……この先へ行きたくばこの私を倒していくがいい』

そう言ってるように聞こえます。

無理ゲーですよ。貴方を倒すためその先にある道具を入手しなければならぬのに、その貴方が立ち塞がるってクリア不可能のクソゲーじゃねーですか？

「ひ、糺里、今なら回り込めば廊下に逃げられるんじゃない？ とりあえず二階に逃げてママたちが帰ってくるの待とうよ！」

「そ、それが賢明ですね」

椅子から立ち上がり、私たちは身を寄せ合ってゆっくり、ゆっくりと物音を立てないように移動を開始して……

ギューン！ カサカサカサ！

「ひなああああっ！」

「きゃああああっ！」

なんか先回りしてきたーっ！

狙ったように進路を変えて私たちの前まで素早く移動したGに私とヴィヴィオは成す術もなく元の位置まで逃げました。

「マ、ママあ……」

涙混じりにヴィヴィオが情けない声を上げる。その気持ちには激しく同意致します。

肝心な時に役立たずです大人組……！

ガタガタ蒼白な顔で怯え震えるしかない私たちはまさに蛇に睨まれた蛙。ただの餌でしかありません。

餌って、私たちGに食われるんですか……？ ………………（想像中）
い、いやあああああ！

首を必死に振って浮かび上がった最低の思考を追い払う。その最中にパソコンに繋いでいたヘッドホンのプラグが外れてしまい、

秋菜『あ、ああ！ ご、ご主人様！ 気持ち良い！ 気持ち良いですっっ』

うるせーです、秋菜！ 気持ち良いですって？ 私たちは今絶賛

気持ち悪い事態に陥っている最中というのに。

しかもオートになっただけなのでテキストが自動送りされる。止めたくとも身体の震えが止まらなくてマウスがまともに動きません。

秋菜と主人公の淫らなやりとりが大ボリュームでリビングに響きます。大人組が帰ってきたら大事です。こちらもなんとかしなければ。

二つの事象の対処に追われ、完全に詰み状態の私に救済の一言が掛かった。

「雛里ちゃん、呼んだ……？」

控えめな声。風が吹けばあっさり消滅しそうなボリュームでしたが、私は確かに聞き及ぶ。

「ヴィヴィオ、Gから目を離してはいけませんよ」

「う、うん」

釘を刺してから私はGから目を離して廊下を見る。

金色の緩やかなウェーブを描いた長髪。清冽に澄み渡る綺麗で大きな碧眼。西洋人形のように均整の取れた容姿の少女が、ひよっこり顔を出していた。

「緋菜！ いいところに来ました！」

私の表情が徐々にパツと明るくなる。

本当にナイスタイミングで二階から降りてきてくれました！

「雛里ちゃんが緋菜を呼んだんだよ……？」

何を言っているの？ と小首を傾げられた。

いや、それは私の台詞でござえますが？

「さつきひなああつて大声が聞こえたもん……」

「それは私の悲鳴です！」

それくらい察知しやがれです。まるで乙ゲーの主人公のように鈍感な緋菜に私はサッサと用件を伝える。

「緋菜！ キッチンにある殺虫剤を取ってくださいっ」

「殺虫剤……？」

小首を傾げてトテトテ可愛らしい足音を立てながら、緋菜は不用意にリビングに足を踏み入れた。私としては念には念を込めて廊下から直接キッチンに行つてほしかったのですが、まあいいでしょう。キッチンとGの場所は真逆にあるのですから

「緋菜！ 危ない！」

「……………？」

ヴィヴィオが唐突に叫び、私はまさかと彼女の視線の先を慌てて

みます。

ギョーン！ カサカサカサ！

ま、またかコノヤローオオオオオ！！

Gは再び方向転換をして瞬く間にキッチンの行く手に塞がりました。

……………。

なんですかなんなんですかあのGは！？ 通常の三倍のスピードは誇ってやがります！ 心なしか若干羽羽に赤みがさしています！ Gの世界の彗星ですか奴は！？

「緋菜！ 早く廊下に戻って隣の扉から直接キッチンに向かうです！」

しかし人間という生き物は悲しきか、パニック状態に陥ると適切な行動が取れなくなる。ましてや他人の言葉なんて聞き入れるはずがありません。

「……………」

緋菜はGを直視したあと二歩、三歩と後退りして、

「ん……………！」

私たちに飛び付いて来ました。

「まー予想はしていましたがね。ならどうしろと言いますか？
この状態でアレをなんとかできますか？」

「離里ならできるよ！」

「緋菜、今からこの他力本願なお馬鹿様を盾に廊下へ逃げます。行
けますね」

「ん」

「ん、じゃないよ！ ごめんなさい！ 私も頑張って考えるからそ
れはやめてください！」

チツ、仕方ねーです。

「そもそも、どうしてゴキブリ」

「緋菜、本名はいけません。三十五禁です」

「そつだよ三十五禁だよ。Gだよ、ジー」

「……Gさんは緋菜たちを足止めしているの？」

緋菜の疑問はもつともで、私たちもとっくに答えを導きだそうと
していますが、

「変革でも果たしたんじゃないですか？」

「オリジナルのGNドライブ無しで？」

「Gさん凄い……」

「いや、赤い彗星ですからニュータイプですか」

「あ、ほんとだ。ちょっと赤い。しかも三倍速だったし」

「安室さん探さないと……」

「緋菜、それだと探し人は安室奈美恵になっちまいます。見つければ私はサインを要求して即座にオークションに載せます」

「フィン・ファンネルが撃てる人だよ。でもヤムチャはいらない」

「……ヤムチャのことかー……?」

「いいえ、クリリンです」

「もしくはリボンズでも可」

と、言っただけでヴィヴィオは口を閉ざしてお互いを見合つ。それは決して友好的なものではなく、不満をぶつけるためだ。

「突っ込みです!」

「突っ込んでよ!」

ヴィヴィオがポケに回るから收拾が着かなくなっていたじゃねーですか。突っ込みが不在な現実ほどカオスなものはありません。

「ねーねー。どうしてこのパソコンの画面、男の人と女の人が裸で

抱き合ってるの?」

この子はマイペースですし。

ちなみに私たち、心に余裕があるのではなく破綻しかかっています。あまりの恐怖感に精神がおかしくなっています。頭のネジが緩んでしまっています。

「そうです!」

そんな私は名案だ、とばかりに声を張り上げてポケットに入れた携帯を取り出します。

ピッポッパと素早く番号を打ち込んで数秒後、

『もしもし。どうしたの雛里ちゃ』

「今すぐマイホームに来やがりなさい!」

『ふえ!? ど、どうしたの雛里ちゃんっ』

ネジが緩んだ私の名案はこれ 高町なのはの参戦です。もう藁にも縋る思いでした。

「出たんです! あの硬くて大きくてテカテカ光ってて素早くて臭い匂いを放つヤツが! 黒光りのGが!」

しかし、なのは野郎は姑息でした。

『……………』

数秒沈黙すると、

『あ、あの………で、電波が……何言ってるか聞こえ……い。こめ……また、あし………学校で………』

ブチッ。ツー、ツー、ツー……

「……………」

あの野郎おおおおー！！

私は溜まらず携帯を床に叩きつけました。

あの野郎裏切りやがったです！ 電波が届かない？ 私たちの家はそう離れていないうえ電波マークは三つキッチンと立っていますか！？

やっぱりなのはです。頼りにした私が愚かでしたっ。

秋菜『ご主人！ わ、私、幸せです！ もっとください！ もっと、もっとおー！』

秋菜あああ！ テメエも覚えてやがりなさい！ 私たちが不幸のどん底にいる中に幸せを叫びやがるなんて、到底許せる行為ではねーです！ ディスク叩き割ってやるです！

ぐぬう………と唸る私は助けが来ないことを理解しました。

「仕方ねーです。こうなったら私たちだけで殺るしかありません」

「でもどっちやって」

「我に秘策あり。です」

「ほ、本当に大丈夫？ 私、嫌な予感しかしないよ。自ら死地に向かっているようにしか思えないよ」

「心配ねーです。奴は彗星であって悪魔ではありません。緋菜も、用意はいいですね？」

「ん……」

「うう、本当にやるんだ」

「いい加減、腹を括りなさいヴィヴィオ。他に策はないのです。貴女はこのままGにやられるおつもりですか？」

「それは嫌だよ……」

「ならやるです」

「……うん。緋菜、神様に祈ろっか」

「ケーキ食べたい……」

「欲望捨ててー！」

「さあ、いきますよ二人とも！」

「もう、なるようになったちゃえ！」

「頑張る……」

「せーのっ」

「「「ジェットストリームアタアアアック……」」」

ブーン……。

「なに？ 私を踏み台に って、ぴなああああ……？」

「マ、ママー……ッ……！」

「……ふえっ」

薄れゆく意識の中で私は思いました。

あ、魔法使えばよかったんじゃない？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7009x/>

dear

2011年11月7日10時11分発行